

奇譚クラブ

新しい風俗文藝誌



絵物語 柳井の男
タラシイ美しき女

2

1961

奇譚クラブ

KITAN CLUB

2

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseiyo

Osaka Japan

定価 百五十拾円





限定版特別号 第三弾

『緊縛写真グラフ集』

特価五百円 略号「グラフ」

表紙三度刷、内容グラビア印刷

画題「縛り人形」 絹川文代 花坂道子

◎豪華な内容とモデル陣

巻頭裸身緊縛一頁大扉

ながしめ……………絹川文代

荒縄全裸緊縛……………大塚啓子

落ちた腰巻九態(野外)

円い乳房……………愛川悦子

浴室におびえて九態……………愛川悦子

縄の陶酔……………絹川文代

恍惚境 悦虐の末……………絹川文代

いためられた乳房……………桜井葉子

耐えられる?……………桜井葉子

月経帯の強制 二態……………大塚啓子

手吊りと逆手吊り五態……………大塚啓子

全裸悦虐態……………大塚啓子

白痴美の誘惑……………大塚啓子

はねかえす縄……………大塚啓子

うろうろ許して!……………大塚啓子

雪白の肌は縄にまみれて

六態……………大塚啓子

優姿ハダカ縛り……………絹川文代

くどくどと宣伝文句を並べたて
るまでもなく、全巻これ縛られた
美女の氾濫です。門外漢はいざ知
らず好事家は必ずやその価値を見
出して下さると思います。自
信を以てお贈りするこの限定版を
どうか手にとって、心ゆくまで鑑
賞して下さい。お願いします。

忘却の彼方……………絹川文代

股間縛り背正面二態……………絹川文代

捕われの麗人二態……………絹川文代

湯責め二態……………大塚啓子

浴室にて責める四態……………大塚啓子

何にしようと言うの……………桜井葉子

新人媚態集八景……………桜井葉子

いじめぬく二態……………絹川文代

メンスバンドの猿轡……………絹川文代

観念横臥の図二態……………絹川文代

変形手足しほり四態……………愛川悦子

裸身をさらして六態……………愛川悦子

豊満くらべ 九態……………桜井葉子

亀甲縛り正背面二態……………愛川悦子

怨めしき縄目二態……………大塚啓子

後手首腰縄 四態……………大塚啓子

新人緊縛ポーズ集六態……………桜井葉子

隅から隅まで 4態……………愛川悦子

鏡面万華鏡模(裏と表)……………愛川悦子

四十項目 百十九ポーズ

限定版特別号 第二弾

『緊縛写真と緊縛画集』

略号「緊縛」

緊縛フォトと緊縛絵画の決定版! どの頁を開いても、
華麗きわまりない緊縛 芸術の殿堂が親愛なる皆さまをお待
ちしています。さあ、どうぞ、どこからなりとノックして
下さい。(書店売は致しません) 特価五百円(送共)

- (四馬孝緊縛画集)
- | | |
|--------------|--------------|
| 1、女体耐久テスト | 18、淫虐な美容師 |
| 2、女体は美しき玩具 | 19、遠慮はいらねえぜ |
| 3、素晴しき会食 | 20、狂気の復讐 |
| 4、人間燭台の実験 | |
| 5、オシメカパーと赤ん坊 | 素晴しき写真集(84葉) |
| 6、物置小屋の怪 | 「手吊り」のポーズ |
| 7、白いいけにえ | 逆手吊りと足吊り |
| 8、生埋めの私刑 | 緊縛感のクローズ・アップ |
| 9、アクロバットの訓練 | 拘束女体の経緯 |
| 10、奴隷という責め | 股間縛り鏡 |
| 11、女学生の嫉妬 | 麗しき果 |
| 12、水責めにあう美女 | 狂しき果 |
| 13、回転する女体 | 晒し者なんだ |
| 14、浴場の悦虐 | 腰巻の乱舞 |
| 15、女の御馳走 | 女の欲び八態 |
| 16、鞭の御馳走 | さあ、どうでもして |
| 17、三騎女の逆恨み | 陳列された女体 |
- (外数篇等計八十四態)

限定版特別号 第一弾

『緊縛フォト・アラベスク』

略号「アラ」

収載内容V二十六項目七十七葉(縛られた女体ばかりの写真アルバム)
残部あり、御申込を乞う 特価五百円(送共)



奇譚クラブ (二月特大号) 目次

色刷折込口絵 「珠玉の御物」

表紙 「隠されたもの」

目次裏 「風流いろは草紙」

第一口絵 絵物語 瀬降の男

……漁 犬 射 撃……瀬子 地 方……山小屋の中……
生皮の前で……美 麗 玩 弄……ムチの透れ……
……奇妙な所り……樹間の晒しもの……

M 派 画 稿 マダムとボーイ……瀬れい子 画
絵 女 相 模 倣 投げの打ちあい……常崎京人提供
口 マゾヒスティック・フォト……本誌特写
二 読みつけ、このナマクラモノ奴、ティブル代り、
第 サド・マン映画館——異奇館の歓迎パーティー——
腎部鞭撻の刑、女性化への階段

美しき——いましめ——構成・辻村 隆
監視するもの
ピンクのタイツ

グラビヤ・フォト・セクション

脚本妙子 顔ぐつわの表情とその変化……脚本妙子
汚れたなま肌……脚本妙子
白と黒とのコンビネーション……脚本妙子
白肌はライトに映えて……脚本妙子
美貌とその表情の変化……脚本妙子
淫靡の恐怖とその苦悶……脚本妙子
初めての受難……脚本妙子
無心の表情とそのポーズ……脚本妙子
あどけなさとその表情の変化……脚本妙子
蚊の囁きにまかして……脚本妙子
おの下に、痛打を受けて……脚本妙子
足の表情にポイントをおいた椅子しぼり……脚本妙子
水に濡けられて……脚本妙子
あまぎ……脚本妙子
オッパイ小僧……脚本妙子
表と裏の美貌……脚本妙子

蛙腹物語

女相模倣ファン

中国殘酷物語

蠅洞王嗜虐録

切腹研究夜話

奇譚三十九夜物語 (第 一 夜)

愛好者の記録

続・夢三夜

新稿 或る夢遊家の手帖から

新連載小説 狩獵者

連載小説 「宇宙のどこかで」

(告白) ガラスのお部屋

当代女武勇列伝

戯歌集 一握の縄

連載第三次元小影の国

創作鉄の帯

(告白) 女装への郷愁

美しきが故に……

幻想物語 雪姫物語

ファンタジー・マゾヒスティカ

炎責の一考察

(体験) 男・女切腹記

「あけぼの会事件」について

馬化マゾヒズムとビップエチの周辺について

懸賞告白入選 埋もれた日記

モデル推感

緊縛モデル 悠子のこと

「女装緊縛」 K君とのこと

読者通信

四馬孝・画

第二表紙 「夜の娘」

第三表紙 「足指」

佐保忍・作 瀬れい子・画

……瀬子 地 方……山小屋の中……
生皮の前で……美 麗 玩 弄……ムチの透れ……
……奇妙な所り……樹間の晒しもの……

M 派 画 稿 マダムとボーイ……瀬れい子 画
絵 女 相 模 倣 投げの打ちあい……常崎京人提供
口 マゾヒスティック・フォト……本誌特写
二 読みつけ、このナマクラモノ奴、ティブル代り、
第 サド・マン映画館——異奇館の歓迎パーティー——
腎部鞭撻の刑、女性化への階段

美しき——いましめ——構成・辻村 隆
監視するもの
ピンクのタイツ

脚本妙子 顔ぐつわの表情とその変化……脚本妙子
汚れたなま肌……脚本妙子
白と黒とのコンビネーション……脚本妙子
白肌はライトに映えて……脚本妙子
美貌とその表情の変化……脚本妙子
淫靡の恐怖とその苦悶……脚本妙子
初めての受難……脚本妙子
無心の表情とそのポーズ……脚本妙子
あどけなさとその表情の変化……脚本妙子
蚊の囁きにまかして……脚本妙子
おの下に、痛打を受けて……脚本妙子
足の表情にポイントをおいた椅子しぼり……脚本妙子
水に濡けられて……脚本妙子
あまぎ……脚本妙子
オッパイ小僧……脚本妙子
表と裏の美貌……脚本妙子

羽村京子・文

瀧岸幸雄・文

中塚弘通・文

塔婆十郎・文

辻村 隆・文

松高 志・文

沼 正 三・文

佐 渡 槐・文

佐治麻造・文

柴崎 黎子・文

諸岡堅雄・文

石川 豚 木・文

雪 俊 遥・文

三条卓史・文

青柳みどり・文

花菱京太郎・文

林 正・文

山本節夫・文

中井照夫・文

斗 福 四 郎・文

原 忠 正・文

麻 生 保・文

井上 正 子・文

林 寿 夫・文

近 藤 一・文

南 時 夫・文

読 者 通 信

風流いろは草紙

佐保忍作
淹れっ子画

之
こぞ
人故に
選はれし

ひ

独り居の一人淋しく

金見える

も

モデル嬢額の

汗もぬぐえずに

ぜ

主貝という

文字に馮かかれし

公羽あり

す

すねて

ん

運悪く

逃が

百年目

それからやっど後手に

おくれなか





瀬降の男

せ
が
り
お
と
こ

狼犬射殺

四馬孝画



奥山深く分け入って蘭子が射殺した狼のような
野犬は山男の猛犬が飼っていた愛犬であった
怒った男は野山を追って蘭子を捕えた。

蘭子捕わる



小屋の中



山男の猛次は
自分の小屋へ蘭
子を引きずり込み
衣服を剥ぐと
怒りにまかせて
ねじ伏せた。

生皮の前で

まだ生々しい
犬の皮の前で
蘭子は縄で
縛られた。



「俺の大事な犬を殺しやがって、
え、この仕末は一体どうして
くれるんだ。」
男は狂ったように
蘭子の顔をひねり
まわした。

美貌玩弄



「死んだ犬に代って思いしらしてやる」
男のムチは蘭子の柔肌の上に荒れ狂う。



ムチの洗礼

犬の墓の前で蘭子は、奇妙な恰好のまゝで祈りを続けさせられる。

奇妙な祈り



樹間の晒しもの



夕闇の迫った樹林の中で、こうして蘭子は、男の気がすむまで晒らされるのだろうか。

美しき＝いましめ＝

構成 辻 村 隆



モデル 加 茂 良 子

凝視するもの

モデル 加茂良子





ピンクのタイツ



モデル 前本 妙子





前本妙子猿ぐつわの表情とその変化



汚れなき肢体

モデル 前本 妙子

白と黒のコンビネーション



モデル 絹川文代



白肌はライトに映えて

美貌とその表情の変化





モデル 四方清美



浣腸器の恐怖とその苦悶



初めての縄



モデル 熱海容子



無心の表情

モデル 熱海容子

とそのポーズ集





あどけなさと
その表情の変化









蚊の襲うに

まかして

モデル 絹川 文代





答 の 下 に

しもと

もと



モデル 四方 清 美



痛打を浴びて

足の表情にポイントを

おいた椅子しばり





モデル 絹川 文代



水に漬けられて

モデル 大塚 啓子

あ
え
ぎ



モデル 大塚 啓子

オッパイ小僧

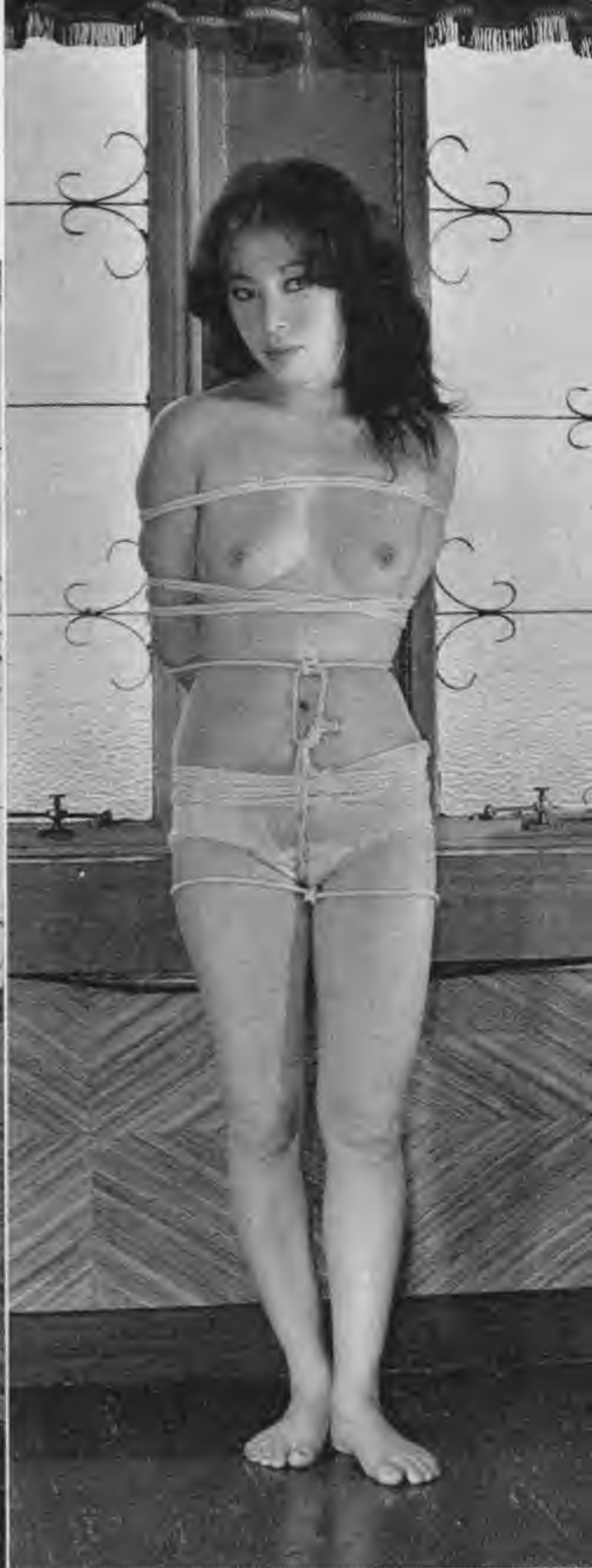
モデル 桜井 葉子





モデル 桜井 葉子

表と裏の美観





マダムとボーイ





踏みつけ





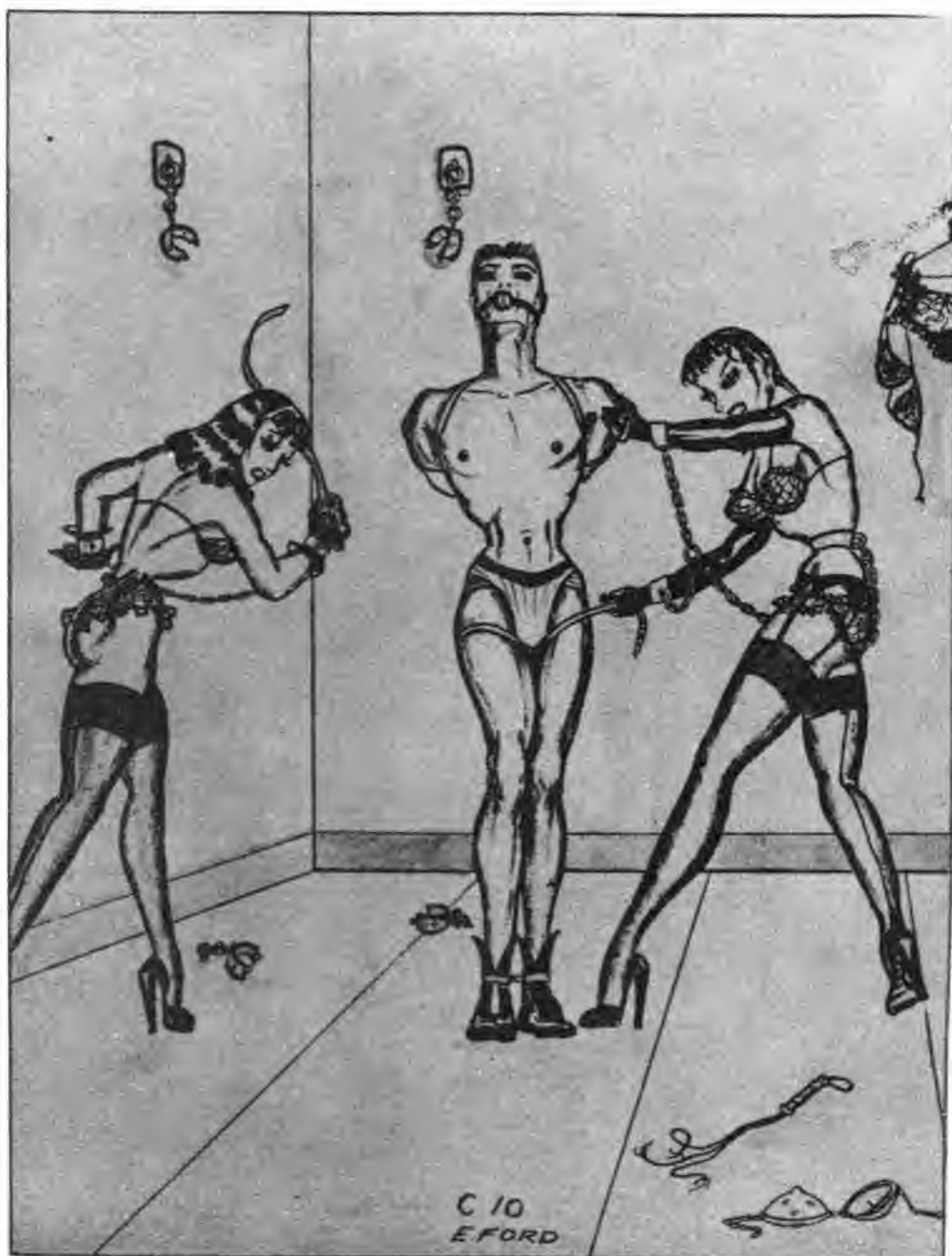
このナマクラモノ奴



テーブル代り

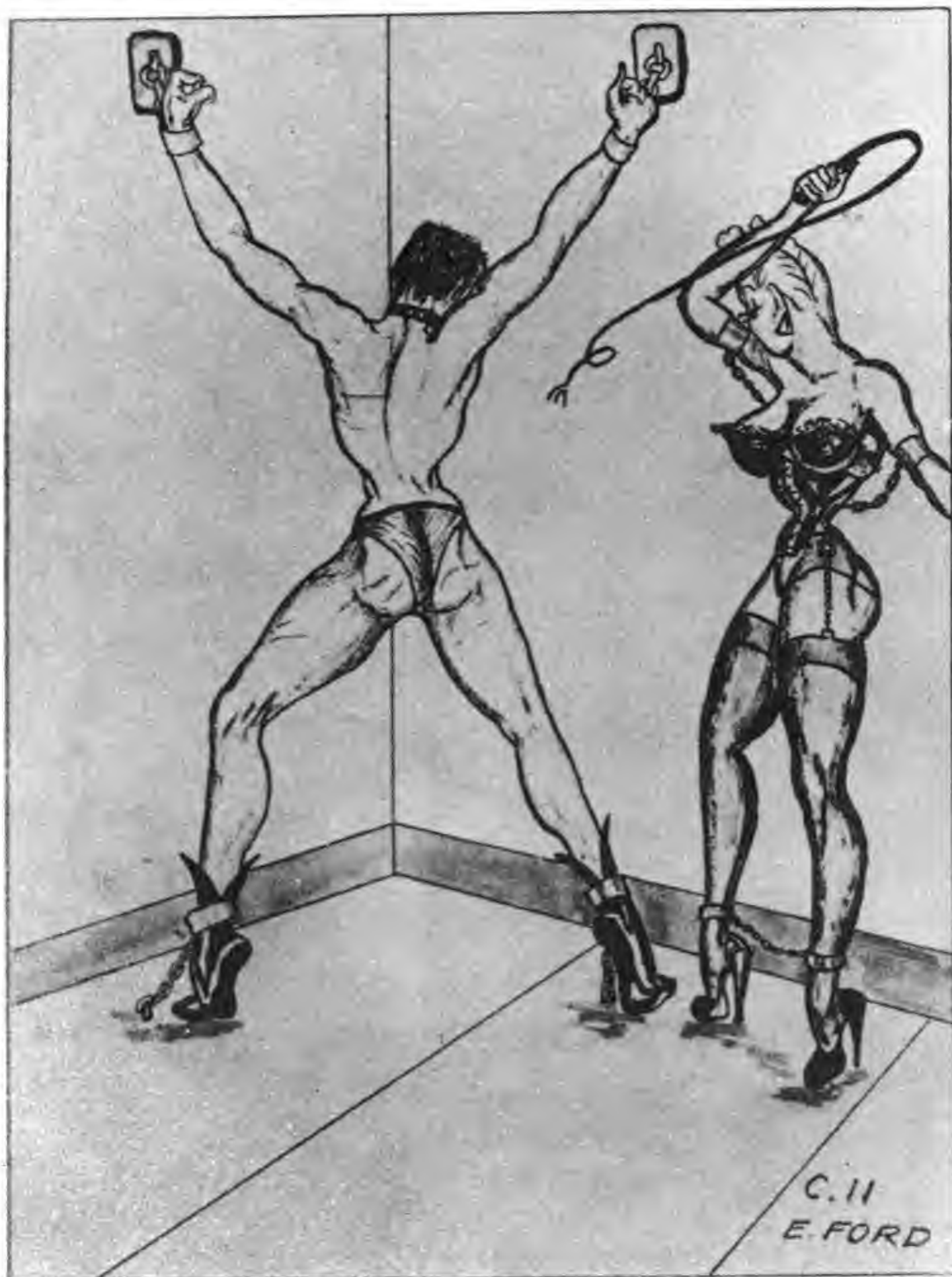
猟奇館の歓迎パーティ

猟奇館の歓迎パーティに招待された青年紳士は、かくも
哀れな姿に剥れて女達の思うままに括られムチ打たれる
のであった。



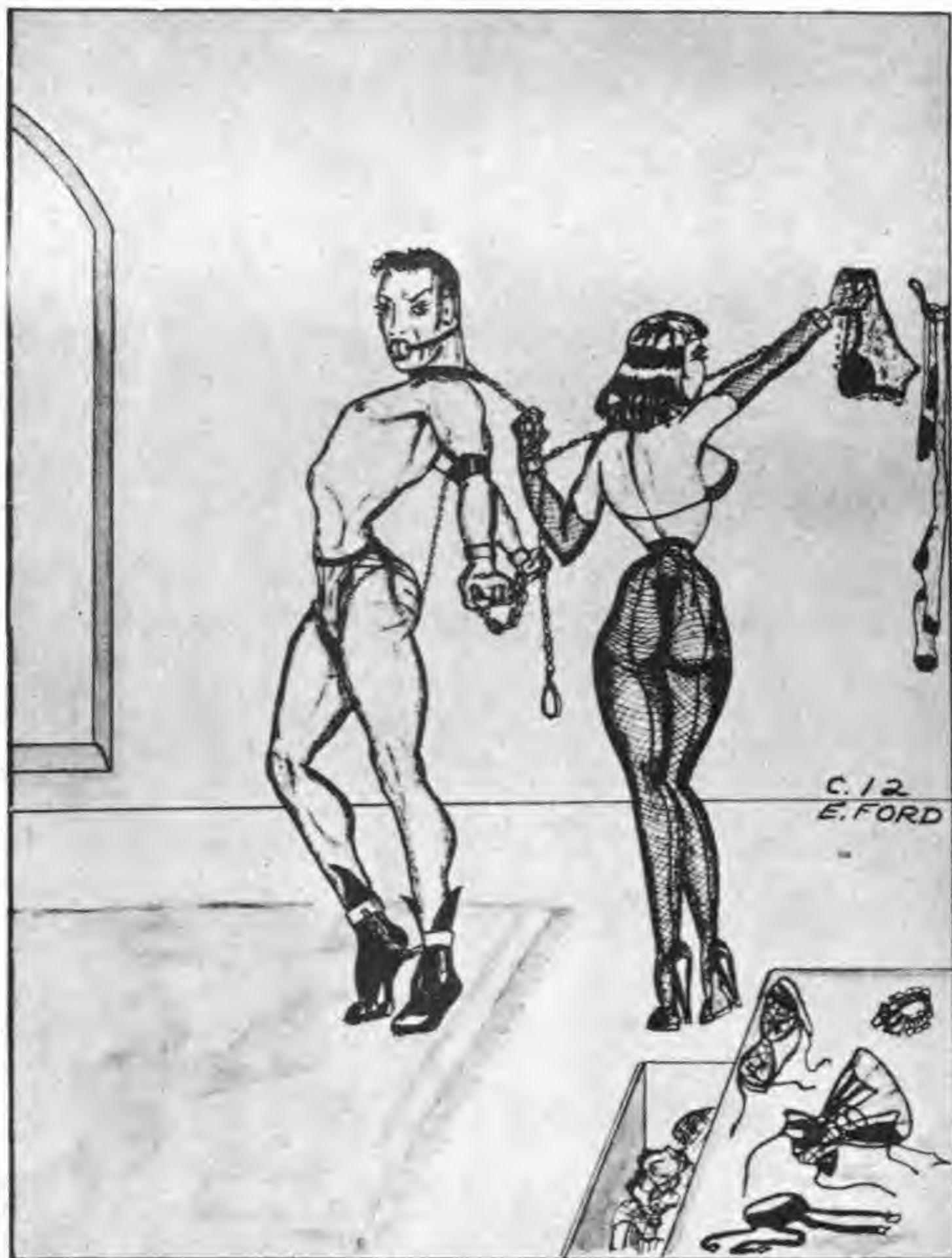
臀部鞭撻の刑

両手両足を大の字に固定された青年の背には女の手にしたムチが激しく炸裂した。忽ち肌に赤黒いミミズ腹が縦横に走った。



女性化への階段

総ての自由を奪われたみじめな恰好でヨチヨチと歩かされてきた部屋には、パンティ、ブラジャー、コルセット靴下などが置いてあった。



新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

新装二月増大号

1961年 2月 号

(第15巻 第2号 通刊第150号)





かえるばら——ものがたり——

蛙 腹 物 語

羽 村 京 子

杉 原 虹 児・画

「……女の腹が美しいためには、或る程度、脂肪がついていることが重要である。シニョラツにしたがえば、腹は軽く盛り上っていないなければならない。……筋肉が十分に発達していないと、腹壁は内臓の圧迫に負け易く、

前へ出っ張り、いわゆる尖り腹ができ、たとえば妊娠の場合のように拡がり過ぎると、きつと『垂れ腹』になる。脂肪が発達し過ぎると筋肉で与えられた輪郭が全部消えて、いわゆる『蛙腹』ができる。

この『蛙腹』も、特に太った女たちを好む男たちには、……フェティッシュになり得る。私自身、或る男が特に、乳房の直ぐ下に豊かに発達したそういう女に熱を上げ、それを見ただけでひどく興奮したというケースを一つ知っている。私はなお、もう一人の男について、かれが球のようにまるい女の腹……を何よりも珍重したのを知っている。腹に脂肪が豊かに沈着している女の特に性的な美しさということを考えて、時に、妊娠している女を肉体的にいちばん美しい型と感ぜざるを得なくなることがある。これは、オイレンブルグが発表しているケースも証明しているところで、……この男ははっきり妊娠した女がかれに特別の刺激を与えたことを認めているのである。これなどは、ヨーロッパの文化発展にも美理想がかなり月の進んだ妊娠の標識をも含んでいた或る時代のあったことを考えれば、おそらく、それほど不思議には思われない事実である。十五世紀および十六世紀には、ブロッホもいっているように、モードはすべての女たちや娘たちに妊娠の風を装わせている。それは、当時の絵から今日なお見ることのできる場所である。否、妊娠した女を裸で人の眼に曝すことさえ躊躇しなかった

のである。……」
 (ウィーン性問題研究所編、清水訳「肉体の讚美」から——「蛙腹物語」という標題はこれからとった。)

第一章 発 端

De gustibus non est disputandum. (好き嫌いについて議論してもはじまらない) ということわざがある。日本流に言うところだ。タデ食う虫も好きずき」というところだろうか。

Oさんにも、人知れず思いなやむ、いわば一つのインフェリオリティ・コンプレックスがあった。それは、恥ずかしくて人に言えないような、奇妙な観念から成り立っていた。

この観念は、彼の十代から二十代にかけて芽ばえ、三十代で彼の心にとりつき、四十代をすぎ五十代になってもなくならなかった。人はだれでも、自分一人の胸にたんで墓場にもって行くような秘密を、二つ三つぐらいはもっているものであるから、ある偶然的な事情の組み合わせが彼をそのかさなかつたならば、それは全く、人に知られないでしまったかも知れないのである。

しかし、今ではそれは、彼の肉体の一部のようになつていた。おさえるとはつきり痛む

ある種の慢性病のように、それはときどきにおい痛みを発するのだった。それらの病人たちが自分の病気をひそかにいとおしみ、大切にかき抱いているように、Oさんは彼の奇妙な観念に人知れぬ愛着を感じていた。

Oさんが五十を過ぎてから、彼は思いがけず、永年つれそつて来た妻に死なれた。すっかり氣落ちしたOさんは、子供たちもそれぞれ成長し、大学を出て結婚して、幸福な家庭を築いていたので、停年にはまだ一、二年あつたが、思い切つて勤めをやめ、孤独な生活に入つた。悲しみの一ときがすぎると、いいような淋しさの時期がおそつた。そしてそのような日々のもと、次第に恢復がおとずれた。それは孤独というよりも、解放であつた。Oさんにはまだ、解放を楽しむだけの氣力が残っていたのである。何をしてもよい境遇、——いわば、まだすっかり衰えるまえのいささかせいたくな余生が彼を待っていたのだ。

生活と享樂のための手段はすでに十分に蓄積されていた。不正なことではなかったが、長年きちんとした生活をして来たおかげで、老後を保障するための、月々きまつたものが入つて来るだけの手だてを、彼は在職中に講

じていた。それは主として、彼の亡くなった妻の功績に帰せられるべきものにちがひなかったが、老人一人のつましい生活を支えるためにはあまりあるものであつた。——なおその上に、誰にも知られない金(かね)が二、三百万、余分にあつた。これは、かりにOさんが、こつそり乞食にくれてやつたとしても、また道ばたに捨ててしまつても、誰にも文句を言われる筋合ではない、秘密にためこんだ資金だつた。Oさんがいささか不(ふ)ちな欲望を充足したいという誘惑に負けてしまつたことを、責めることはむずかしいと思う。

それにしても、みずからすすんで与えられたチャンスを利用することには、大きな勇氣と決断を要するものである。老いの一徹といつたものかも知れなかつたし、それだけ欲望が強かつたからかも知れない。とにかくOさんは、彼の抱いていた観念の不滅を實踐した。彼の肉体が、まだ二、三十年の使用に耐えるものであつたのと同じく、彼の執念もまた決して老いすぎてはいなかつたのである。

働いている人間も、ときに勤めの帰りに盛り場のネオンの光に誘惑されることがある。ときは、いかかわしい見世物を鑑賞したり、みだらな女たちとの一刻をたのしむことがあ

る。けれども、彼等は、それらに魂を奪われつくすことはまれであろう。そういうことをすれば、たちまち生活の現実が、彼等を人生の敗残者として葬り去ってしまうからである。彼等には、生活の目的があるか、そうでなければ生活の規律がある。それが自律的なものであれ、他律的なものであれ、彼等の家庭と職場を結びつけている線の上から、大きく逸脱することを許されない。Oさんはそれらのものから解放されていた。

Oさんは彼の目的を制定すると、慎重に、果敢に、その実現のために行動をはじめた。それは、涙ぐましいまでの努力だったといえるかも知れない。幸いにして——というべきかどうか知らないが——それらの努力は成功した。それは、五十年間に蓄積された老人の世間の智慧のおかげにちがひなかった。若い女たちに嫌われる、老人の無恥な厚かましさに ついても、また、どういふときにその厚かましさを利用することが出来るかということについて、Oさんは計算を誤らなかつたからにちがひない。

まともな生活をしている人間が、秘密のたのしみを求めることには、それ相應の困難がつきまとうものである。商業主義は世を挙げ

てセックスをうたい、都会の夜の混濁があらゆる奇怪な欲望を吸いこんで行く現代においても、度を外れた享樂は、たえず暗黒の無法者の世界につながって行く危険をはらんでいる。不用意に巻きこまれることは、出来るだけ避けねばならなかつた。しかもOさんの場合は、無法の世界から遠ざかれば遠ざかるほどよかつた。彼は、彼の目的を達しさえすれば、それでよかつたからである。

しかし、もちろん、冒険はいくらかの危険をとまなうことは避けられない。無法の世界にまいったくふれないで、達せられるような種類の目的ではなかつた。そこでOさんは、慎重にゆっくりゆっくりと目標に近づいて行つた。それに、いくら世を捨てたとはいへ、過去のつながりからくる、体面というものがあつた。事は秘密を要するのである。Oさんの行動は「おしのび」で行われねばならなかつた。

都会のジャングルにいきなりとびこむことは、きわめて危険だつた。何ならヌード・スタジオではだかの女を見ることも、ストリッップ劇場で、はだかの女が踊っているのを見ることも出来る。また、ちょっと勇気を出しさえしたら、シロシロとか、シロクロとかいうあやしげな見世物を見ることだって、それはほ

ど困難ではない。Oさんはそれらのいずれをも、あれこれとなく見て廻つた。けれども、Oさんはどれにもひどく失望した。Oさんの目的は、ほかのところにあつたからである。しかし、それ以上、深入りすることは危険だつた。求めるものは容易に手に入らないかに見えた。

やがてOさんは、共犯者をこしらへることが、目標に近づくための、有効で安全な方法だと気がついた。共犯者をつくり、目標を手に入れるのは、かならずしも困難なわざではない。なぜなら、Oさんは金を持ってゐるからだ。お金が、そしてお金だけが、無法の世界にまきこまれることなく、無法の世界との境界線の上に坐りこむことを可能にするのだ。シャイロックのように、世の中のものはすべて、金で買うことができるのだ。無法の世界のただ中にでも、水と油のように、すり心地のよい席を用意してくれるものは、お金である。

Oさんは、東京や大阪のような大都会を避けて、一つは温泉のあるS市と、もう一つは自衛隊のあるM市とに根拠地をきずいた。どちらも淫蕩な空氣の支配する町である。そこでOさんは、二流か三流の旅館をえらび、そ

この常客になった。下心があるから、さかんに札びらを切る。相手も買収されていることは承知だから、かえって都合がよい。Oさんは時機を待った。共犯者には、十分の手あてをしなければならぬ。

Oさんがこれらの町に来て感心したのは、東京では簡単には見られないようなことが、平然と行われていることである。ヌード・モデルは、お金さえやれば、どんなひどいポーズでもするし、お座敷で行われる、いわゆる「全スト」なども半ば公然と黙認されているのだ。したがって、淫蕩な空気が町を支配し客は旅の恥はかき捨てとばかりに、ふだんの生活をすてて享楽する。浅草や新宿では、うしろめたい気持と危険への警戒なしにはなしえないことが、日常茶飯のこととして通用しているのである。

けれどもOさんは、最初からいきなり共犯者に自分の目的を告げて、見くびられるようなことはしなかった。甘く見られたら、どれだけつけこまれるか知れないからだ。ケチケチして相手に失望を与えてはならなかったが、セカセカと急いで腹の内をみすかされて、安く見られては困る。相手につけこませないだけの余裕を示しておく必要がある。だから

Oさんは、最初に自分の要求をもち出さなかった。相手のすすめるものは、何でも一通り見た。相手の手の内を一通り知っておく必要があるからである。くそ面白くもないように、あやしげな見世物の数々。ただ、変っていて面白かったのに、浣腸実演があった。ぬるま湯をたっぷり浣腸して、腹をぶっくりふくらまして見せる。始末するところまで見せるのである。——相手が手の内をすっかり出し切ってしまうと、Oさんはおもむろに自分の注文を出しはじめた。

わたしはわざと、Oさんの「奇妙な観念」については、何も説明しないで来た。読者はそれを不満に思われたにちがいない。わたしはここで、それを述べるべきところに来た。それは、妊娠した女の丸い腹、子を孕んでぶつくりふくれ上った女の腹なのである。

第二章 A 子

真冬の温泉場は、客が少なかった。正月のシーズンが過ぎて、早春の観光シーズンがあとずれるまでは、このような施設にとっては、一つの息ぬきになっている。Oさんは旅館の二階のガラス窓越しに、人通りのさびれた道路を見下していた。向うから若い女が歩いて

来る。女は頭からオーバーをかぶって、寒そうにからだをすくめながら、Oさんの泊っている旅館の前まで来ると、さっと小走りに駆けこんだ。階下で、おかみと話している声がきこえる。

間もなく、トントントンと足音がして、おかみが二階にあがって来た。

「ごめん下さいまし」

「ああ、おかみさんか……どうぞ」

五十年配の小柄でぼっちゃりした和服の女が、微笑をうかべて入って来た。無造作にすわると、もう一度、眼で笑って、

「ご注文通りに行きましたよ。もう二十分もしたら向うの部屋で……」

という。

「ありがとう。感謝するよ」

おかみは肩をすくめて、ホッと、ためいきをして見せた。

「でも、Oさんったら、ずいぶん変わってますのね。はたで見えているわたしたちまで変になりますよ。」

「いや、……しかしこれが、わたしのたのしみなんでね。自分でも困った病気だと思ってるがね。」

Oさんは立ち上って部屋の隅に行くと、カ

メラを手に取り、すわっていいじくりまわしながら、

「今、ここから見たよ。……それで何カ月だって？」

と、たずねた。

「六カ月になったばかりだそうですよ。……でも、あんまり変なことしないで下さいよ。素人なんですから、あとでめんどうなことになるら困りますからね。」

と、おかみは釘をさした。そして、「それじゃあ、……今お風呂に入ってますから、もうすぐしたら呼びます。」

と降りて行った。

Oさんは、子供のように胸をときどきさせながら、子を孕んだ女の白い腹を思いうかべていた。若いときから、いろいろの体験と、かずかずの嗜好遍歴を経て、たどりついた一つの結論がこれだった。おれは今、それを試そうとしている。Oさんは無理にも自分を落ちつかせようとした。おれは何もわるいことをしようとしているわけではない。

女は二十二、三歳、中肉中背で色の白い美



人だった。洋装がびったり身について、思ったより、きちんとした身なりをしていた。Oさんは、ちょっと女を値ぶみするように眺めながら、女の身の上を聞き出したいという衝動を辛うじて抑えた。

女は、しかし、いきなり自分のことを話しはじめた。Oさんを信用して、自分はどういう立場だから、そのつもりでいてほしい、という弁解か、注文のつもりだった。ひどく事務的な口調だった。

女は本当は二十四歳で、すでに一人子供がある。亭主もいる。今度のことは、もちろん亭主に内緒で、お金がほしいからだ、と言った。今後のことについても、妊娠したはだかを見せるだけなら、何回でもよい、ということだった。Oさんが、からだにさわることもあるかも知れない、と言うと、変なことさえしなければかまわない、とちょっと考えてから言った。

「じゃあ、わたしはこれで……」

と、おかみが立ち去ってしまうと、女はきつとOさんを見た。割にととのった、美しい顔だちである。

女は無表情のまま、立ち上って脱ぎはじめた。部屋は炭火であたたまっていたから、寒くはなかったが、女は何となしに寒そうな身ぶりをした。緊張しているのだろう。

「はじめから脱ぐんですか」

Oさんがうなずくを見ると、女の表情がかすかにゆがんだ。Oさんは、女の羞恥心をためしていることに、ふとサディスティックな興奮をおぼえた。

Oさんは、このような場合に、相手の気持ちをほくすことばを知らないわけではなかったが、それよりも、目の前にあるものへの興味

が、彼の注意を奪っていた。

女は、するすると着衣を脱いだ。すんなりとしなやかな白い体だった。思ったより大きな乳房がゆったりとやたるんで、乳首のまわりが大きくなっている。臀も申し分なく十分に発達していた。均衡のよくとれた、きれいなからだだった。しかしOさんの眼は、ぶくくりと膨れ上った女の腹に吸いつけられていた。その腹に子どもが入っていることは、一目であきらかだった。その真白い腹のふくらみが、ときどき、グッ、グッとつばって、形を変えた。胎児がうごいているのだ。……

一時ののち、女はふとんの上にあおむけに寝かされていた。女のおびえ切った眼が、Oさんの顔にそそがれていた。(わしはいま、男が動物になったときの顔をしているにちがいない。女がおびえているのは、そのためなのだ。)とOさんは思った。

A子——というのがその女の名前である——は、二度、三度と回を重ねるうちに、Oさんをそれほどこわいとは思わなくなった。Oさんが何もしないのが分ると、彼女は安心して、笑顔さえみせるようになった。何もなくても、じっとしていればお金がもらえるのである。写真をとらせることも、はじめは、

だれかに見せられると困ると思ったが、その心配はなさそうだった。(案ずるより生むが易しだわ。)彼女は、自分が、はじめは大それた冒険のように考えていたことが、実は何でもないことだったのに気がつく、まだまだOさんにけっして心を許しはしなかったが、毎月一回か二回ずつ、彼女のはだかを見にくる老人に、親しみをおぼえ、何かこつけいなような、あわれみさえ感じるのだった。

そのうちにも、彼女の腹は、ぐんぐん大きくなって行った。七カ月、八カ月、九カ月と、せり出して来た腹のために、彼女は肩で息をし、腹をつき出してそり返って歩く、例の妊婦特有の歩き方をしなければならなくなった。「ねえ、あのおじさん、こんなグロテスクなポテレン腹の、一体どこがいいのかしら？」と、彼女はよく、おかみに言って笑った。

春のゴールデン・ウィークがすんで、観光客が水のひくように帰ってしまうと、ふたたび温泉地に静かな時期がおとずれた。Oさんはその間も、せっせと通いつづけていた。Oさんの手もとには、すでに何百枚もの妊婦の写真がコレクションされているにちがいない。A子はそれを一枚も見ただことはなかった。見せてもらいたいとは思わなかった。こ

の二、三カ月のうちに、Oさんは、本職の写真屋とまちがえるくらい、たくさん照明器具や、バックにつかう幕などをもちこんでいたが、現像と引伸の方は、家に帰ってからこっそりやるらしく、写したフィルムの切れっぱしさえ誰も見たことがなかった。A子ははじめ、フィルムなしで、からでのぞいているのかと思ったくらいだが、そうではないらしいかった。

もう一つ彼女が心配したのは、彼女が旅館でしていることが、町の人にもれることだったが、こっちの方は、旅館のおかみが、万事うまくやってくれた。Oさんがやってくるのは、大てい忙しい土曜、日曜をはずしたときだったし、Oさんはいつも離れ——最初のときに彼女が案内された部屋——をつかったから、昼間でも雨戸を閉め切ってしまったら、中で何をやっているか分らなかった。彼女が来ていることを知っているのはおかみだけで、それも大てい午前中だったから、女中には、Oさんが寝ているといえよよかったのである。

臨月になると、A子の腹は、ますます目立って丸く張って来た。Oさんは、そのようなからだをした彼女のために、一週間ばかり滞在

して写真をとったが、出産予定日の三日前に帰って行った。もちろんこれが最後のさつえいになるはずだった。A子は、いつもの代金のほかに、まとまった金をもらって帰った。ところが、それから一週間もたたないうちに、Oさんがまた旅館にやって来た。おかみが不審に思って部屋について行くと、

「あの子はまだ生れないのかい？」

と、いきなり聞いた。

「さあ、……」

と、おかみが口ごもると、

「まだなら、もう一度来てもらえないかな。」

という。おかみは笑い出して、

「まあまあ、何かと思ったら、……先週見えたばかりだから、女中が変な顔をしてましたよ。……でも、とにかく聞いてみますわ。」

と言いながら、出て行く。

おかみは間もなくもどって来た。A子は、予定日を二日ばかりすぎてもまだ生れないので、行くのはさしつかえないが、これから昼食をすまして、医者に寄ってから行くという伝言だった。Oさんは声をひそめて、

「ところで、今日はちよつと注文があるんだが……」

と言う。

「何ですの？あらたまつて……」

Oさんの注文というのは、今日は、痛くはしないから、からだを縛らせてほしい、というのだった。

「お待ちとおさま」

という声が廊下にきこえた。

A子がきものを脱ぐと、みごとにふくれ上ったまんまるい臨月腹があらわれた。臍が裏がえしになって、怒張した腹壁の内部の圧力のすさまじさを示していた。A子が照れた。

「前より大きくなったような気がするな」

「今どはん食べて来たから……」

さつえいは順調にすすんだ。縄はそれほど痛くなかった。Oさんは、A子が両手で顔をかくした写真は何枚かと、縄をかけた腹のアップを何枚かとった。いつもとり方がちがう、とA子は思ったが、あらためて異議をささむまでもなかった。ライトにあてられた臨月腹の妊娠線が、みにくいほどくっきりと浮び上って見えた。氣候がすっかりあたたかくなっていたので、もう寒さは感じなかった。さつえいが終わったとき、A子は快よく疲れて、妊娠した大きな腹を空気にさらしながら、ぼんやりとしていた。わたしは、とりかえしのつかないことをしてしまったのかも知れない

い、などと思ひながら。

とりかえしがつかないといへば、ここ何カ月かのあいだにおこったことは、みんなそうだったといえる。Oさんが来なくなつてから、というより、A子が旅館に行かなくなつてから、といった方がいいのだが、A子は入院、出産、退院と、つぎつぎに目さきのかわる出来事のために、しばらく考える余ゆうを奪われていた。偶然にも、Oさんとの最後の日の夜に、A子は出産した。それから十日ばかりたつて、新しい赤ちゃんを加えて、以前の生活の日常が、ふたたびくりかえしはじめるようになる、A子はOさんのことが、まるでるかとおい夢だったような気がした。体力が恢復し、子供の世話に追いまくられるようになる、A子はOさんのことを、忘れるともなしに考えないようになった。

だから、あれから三月以上たったある日、旅館のおかみが、Oさんからことづかつたものだといって、新聞紙につつんだ四角いものをもつて来たときには、A子は、とおい昔からたよりが来たような気がした。嚴重に封印された紙をやぶつてあけてみると、中から一冊の雑誌が出て来た。「K……」というその雑誌を、A子は知らなかった。不思議に思っ

て表紙をひらくと、Oさんの手紙がはさんであつた。

「先ほどはいろいろありがとう。小生のちよつとしたいたずらをお許し下さい。もちろんあなたにめいわくがかかるようなことはしませんから、安心して下さつてくださいです。記念に一部だけお贈りしました」何のことかさっぱり分らず、パラパラとめくると、グラビアページに縛られた女の写真がごちゃごちゃと写っていた。彼女は思わずあかくなりながら、なおもめくつていくと、グラビアの最後の方に、両面見開きになって、異様なかたちのヌードがのつていた。よく見ると、片方は両腕をあげて顔をかくした、はだかの女の立っている姿で腹が異様に大きいのである。「プレグナント・ヌード(1)」と、見出しがついていて、下の方に、小さい字で、(読者O氏の提供による)と注釈がついている。彼女は思わず、アッと声を立てた。顔はかくしているのを見えないが、まさしく彼女自身ではないか。左側のページ一ぱいに、ほとんど正面からとられた、妊婦の全身像が、あかるいライトをあびた真白い臨月の腹をつき出して、黒いバックを背に、くつきりとそこにうつっている。彼女は、いそいで

右側のページに眼をうつした。そこには、やはりページ一ぱいに、縄をぐるぐる巻かれた女の胸から腰ぐらゐまでが、大きくアップでうつっていた。片ひざをついて、上体を前にかがめ、両手をうしろにしばられた女の、おしつぶされそうになった腹が異様にふくらんで、筋が入っている。ほとんど真横からうつしたものだ。ボタンのように、裏がえしになつてとび出した臍。乳首のまわりが大きく黒ずんで、垂れ下つた乳房。「プレグナント・ヌード(2)」(読者O氏の提供による)！妊娠している上に、縄でくびられたために、おりまげられた肢体の苦痛が一そう強調されて、息づまるような迫力を生み出している。

A子は、すべてを了解した。

第三章 I 子

A子が出産してしまつて、S市に行く用がなくなると、Oさんはしばらくぼんやりと家にとじこもっていたが、ある日、思い立って久しぶりにM市をおとずれた。M市は何となく殺伐な町で、Oさんはこの町のそういうところを好かなかったが、何かSでは求められない強烈な刺激が得られそうな気がしたからである。行きつけの旅館にあがると、

「何か面白いものはないかね」

と、いきなり切り出した。

「おやまあ、久しぶりで見えたと思ったら、もうそれですね」

おかみは、四十歳くらいで、よくしゃべる女だった。ずるそうな眼を、すばやく、あちこちと動かしてしゃべる。いやな女だが、利用価値はある、とOさんは、つねづね思っている。

「近ごろ、こんなものを手に入れたんだがね」

と、Oさんは、最近S市でとったA子のヌードを何枚か出してみせた。もちろん顔はかくしてある。まだ例の「プレグナント・ヌード」が「K……」誌に出るまえだったが、Oさんは用心ぶかく、「K……」誌に送ったのは、まるっきりちがったように見えるのを、わざとえらんだであつた。

「へーえ、こりゃ、お腹が大きいじゃありませんか」

と、おかみは、さも感心したようにながめて、

「こんなのがいいんですかねえ」

と、あきれたような顔をしてみせた。Oさんは笑いながら、さっさと写真をしまいこんで、

「まあいいさ、風呂にでも入れてくれたまえ」

と、なにげなく立ち上る。気がついておかみが、ゆかたの方に手をのばした。

風呂からあがって、小屋がけのストリップを見て、気ばらしに町を歩いて帰ってみるとおかみが夕食の膳をならべて待っている。何か話があるな、と心まちにしていると、

「だんなさん」

と来た。

「何だね？」

「ほら、いつかだんなさんもごらんになった……浣腸実演をやった子、あの子がいまこれなんですよ」

と言いながら、おかみは腹をつき出して、その前に手で円をかいてみせる。Oさんは、ごはんをのみこみそこねて、目を白黒させた。写真を見せた効果が、これほどきめんだとは思わなかった。

「あの子がねえ、本当にかわいそうな子なんですよ。前には、あんなことまでして男にみづいていながら、……それがひどい男でしてね。女をなぐるける、からだに生傷のたえまなしでしたが、お腹が大きくなったら、邪魔あつかいにされて、捨てられてしまつて……」

おかみの話がつきることなくつづいたが、

要するに、彼女は、早速その女のところに行つて、すでに話をつけて来たのらしかった。

Oさんは、おかみのぬけめなさに舌をまいたが、もちろん否応はあるはずがなかった。

Oさんはその女をおばえていた。その女、(I子)は、色の浅黒い、すこし太った、妙におどおどしているくせに、どこか馬鹿のようなどころのある、あまり美人でない女で、いかにも男におもちゃにされて、捨てられても不思議ではなさそうだと、Oさんは思った。

半年ばかり前に見た、その女の浣腸実演というのをOさんは思い出していた。五、六人ばかりの客がそれを見るといので、ちょうど泊っていたOさんもその仲間に入れてもらったのだが、何とも奇妙な見せ物だった。

座敷の半分をくらくして客席にし、反対側、といったも、八帖だから手をのばせばとどくぐらいのところに、強いライトで照明された高さ三十センチばかりのテーブル一つ。やや大きな洗面器に湯が一杯、それにエネマシリンジ。粗末な洋装の若い女が入って来て、洋服を脱ぎはじめる。テープレコーダーを提げた、これもよれよれのズボンをはいた男が入って来て、テープをかけた。テープの説明にしたがつて、いよいよショウがはじま

た。男も女も、すべてパントマイムで、テープの言うとおりに、人形のように動く。

十五分ぐらいいもかかっただろう。女がときどき、ウウツ、ウウツとうめき声をあげるの、そのたびに笑声がおこった。全部注入しおわると、男は洗面器をさかさにして、すっかりからになったのを見せる。ほおう、と客席から、嘆息がおこった。テープの説明のとおりだとすれば、きっちり三リットルのぬるま湯が、女の腹の中に吸いこまれたことになる。女が立ち上って、客席の中に入って来た。女の腹はぶっくりふくらんで、女は苦しそうに肩でいきをしている。

〇さんはそのとき、ああいう見せ物に出る女は、一体どんな女だろうと思ったが、会ってみると、どこかという特徴もない平凡な娘だった。女は二十一歳だと言ひ、妊娠七カ月だと告げた。さし当り、今旅館に住みこみで働いているが、いつまでもつづくものではないから、〇さんが



面側をみてくれれば、お産がすむまではやめる、という。生れた子をどうする気か、〇さんは気になったが、なまじっか聞いて、しょいこむことになると思ひ、だまっていた。〇さんはおかみと相談して、女の当座の居どころをきめ、医者にかからせることにした。

〇さんは、いろいろと女のはだかを見て歩くようになってから、妊娠してないふつうの女でも、からだにいろいろのちがひがあることを知った。乳房の大きい女、小さい女、臀の大きい女、小さい女、やせた女、太った女、からだつきもそれぞれにちがっている。だから、女がかわることには、またそれだけのたのしみがあつた。I子も、それなりに魅力があつて、からだの色は、思ったより白かつた。腹は月に似合わず大きくて、七カ月には見えなかつた。

〇さんは、ときどき、I子のかかっている医者のところに行つてみた。〇さんはそこで、女のからだについて、いろいろの知識をえたのだが、墮胎専門にやっているような、インチキくさい医者だつた。しかし好人物らしく、話し好きで、よく相手になってくれた。その医者がある日、にやにや笑いながら〇さ

んの顔を見て、

「Oさんは、I子が双胎なのを知らないんじゃないですか？」

と言った。Oさんが、

「ソータイ？……って何ですか？」

と問いかえすと、

「ふた子ですよ。もっとも、I子には言っていないかもしれませんがね」

と言って、ニヤリと笑った。（言ってくれないものを、分るはずがないじゃないか）と

【通信】

女相撲ファン

浦岸 幸雄

私は貴誌発刊以来の愛読者であり、現在マスコミ関係（新聞）の仕事にたずさわっているのですが、貴誌の読者の声の欄を拝見しますと、まったく女相撲のマニアの多いことに驚きます。私もそのうちの一人ですが、これまでの女プロレスではどうもさっぱりしません。

以前、都内新宿で山形県の女相撲がかか

Oさんはいまいまいしく思いながら、I子の大きすぎる腹を思い出して、なるほどと思った。写真をとることも、からだをしばらくさせることも、I子の場合には簡単だった。逃げられた男——やはり、あの「浣腸」のときの男がそれだった——がどういうことをしたのか、くわしいことはI子も語らなかったが、彼女はすっかりマゾヒストに仕立てあげられていた。男というものは、そういうことをするにきまっている。と思っているのかも知れない。

りましたがアンダーシャツやショーツなどをはいた上にまわしをしめたりして、少しも実感が出ません。ところで私は最近、若い女性同志のはちきれんばかりの女相撲を見ました。そのときの写真は当方に多数写してあります。

二人の脂ののった白い肌と肌とがガッシリと目の前で組合い、二人の体からは女の

そのためにOさんは、かえって、I子にあまりひどいことをすることができなかった。Oさんは一度、妊婦の逆さ吊りというのをやってみたいと思っていたが、I子の腹を見ると何となく気がとがめて、できなかった。

夏がすぎて、秋になった。産み月が近づいてくると、I子の腹はますます大きくなり、二つの胎児が腹の中で動いているのが、よく分るようになった。ところがI子は、ちっともそのような胎児に、愛着を感じる風がなかった。（あたしのベビーが、……）などとI子が言うのを、Oさんは聞いたことがなかった。大きな腹をかかえて、I子はいつも苦しそうにしていた。

Oさんが手をさし出すと、ふとんの下から手を出して、しっかりと握った。ふとんにあごをうずめるようにして、はずかしそうに、にっこりと笑う。媚をふくんだ眼に、涙がたまっていた。この女でも、こういう女らしい表情を見ることがあるんだな、とOさんは思っ、何か心あたたまるとような気持ちで、じっとI子の顔をみつめていた。

秋も深くなって、そろそろ寒さが身にしみるようになったころ、OさんはふたたびM市をおとすれた。



汗がたらたらと流れ互いに組合った腋毛はお互いの汗でびっしょりです。黒と白のまわしはきっちりと股に食い込み、共に相手のまわしを力一ぱい引合い、そのたびに二つの女体は、全身の筋肉を躍動させるのでした。二人は四つに組み合ったまま、お互いのはちきれんばかりの乳房と乳房は、押し合いからみ合い、力の限り戦うさまは、まことに女相撲の醍醐味満点で、まさに身ぶるいさせられます。

はじめは二人とも恥かしがっていましたが、最後には女の意地で相手を倒そうと必死となり（勝った方に賞金を与えたわけです）髪の毛をふり乱し脂汗で全身びっしょりとなり夢中で押し合いへし合い組合っています。勝負があつて、もういいからといっても離れず、まったく女相撲の勝負はすばらしいの一言につきまします。以上が私のみた概略の一部ですが、もしご希望ならば、二人の娘がガツキと組合った写真と愚作を発表させて頂こうと思います。

以前一回ある雑誌に女相撲の記事を発表しましたところ、全国のファンから驚くほどのファンレターが来たことがありました。が、残念ながら、この雑誌は程なく廃刊となってしまいました。

尚、貴誌に於ても、女プロレス、女柔道もあることです。から、女相撲会など発足し、希望者に観戦させたら実に素晴らしく、ファンが全国より沢山集まること疑いなしです。

「I子はその後どうしているかね」

と、おかみに聞くと、

「それがねえ、子供をおいたまま、どこかに行っちゃったんですよ。……どこに行ったものか……」

といいかけたが、

「ああ、そうそう、何かだんなさんに渡してくれて、あずかったものがありますよ」

といって、一通の封書をもって来た。Oさんが封を切ってみると、手紙が入っていた。

「この間ごろはいろいろお世話になりました。最初は、子供を育てようかと思いましたが、乳のみごをかかえてはどうかにもなりませんので、一人で行きます。子供はどこかの施設でもひきとってくれるでしょう。本当はあたし、Oさんのお嫁さんになりましたかった、しかしそんなことは夢です。あたしのような女に、いろいろよくして下さったことを感謝しています。さようなら。」

Oさんは、I子の手紙をくりかえし読みながら、いつまでも動かないで、ひとりであらずいていた。

中国残酷物語

蝸^{かつ}洞^{どう}王^{おう}虐^し嗜^{ぎやく}録^{ろく}

塔婆十郎

1

「女狩りだあッー」

「蝸洞賊の女狩りだぞうッ！」

「かくれろ、逃げろ、戸をしめろ！」

「女たちをかくせえー！」

大声でわめきながら、三、四人の男が走ってくる。口から泡をふき、眼は血走っていて常人の顔ではない。町じゅうの者へ、この嵐のような女狩りを知らせるのだ。まさしく、嵐だった。

蝸洞王の家臣で、一の参謀と自称する李梵忠の指揮する無頼の一群が、町を片端から練り歩き、荒れ狂っていた。

若い女とみれば、だれかれの容赦なく捕える。逃げるを追ひ、隠れるを襟がみつかんでひきずりだす。

「それッ、縛りあげろ！」

泣きわめき、許しを乞うて膝まづく女を押えさつけ、縄で縛りあげる。そして、城中へひきたてるのだ。

上古六朝の世、ここは黄河上流をさかのぼること数百里の山峽に位置する花袋関という町であった。

町の東部にそびえる秀麗な相貌の山が鵬遊山。

その鵬遊山に相對した蜎洞城に君臨する王の名は牛蜎洞。

きょうの女狩りも、その蜎洞王に捧げるためのものであった。

「なんという、むごいことを……」

「むたいじゃ……」

「稀代の惡王じゃ、暴君じゃ……」

「ああ、あの易王さまさえ、滅ぼされなかったら……」

町人や百姓たちは、頭をかかえ、涙を流して歎きあった。

つい半年前まで、この花袋関を治めていた易王は、慈悲ぶかく善政をほどこして仁徳の名が高かった。

その易王は、四川省の山岳地帯に徒党を組む、牛蜎洞の馬賊団にほろぼされた。

兇暴にして敏捷、戰略に長じた蜎洞の手勢のために、易王の軍はみじめな敗北を喫し、みな殺しにあった。

生け捕りにされた易王は、手枷、足枷、首枷のまま、花袋関の大踏をひきまわされた。最後には、二頭の牛に両足をくぐられ、身体を引き裂かれたのであった。

易王には娘が二人いた。姉娘の碧花は、蜎洞に捕えられて監禁されていたが、妹はうまく落ちのびた。

一流賊の蜎洞が、その名も蜎洞王と稱し、このあたり一帯の町村落を支配することになった。

しかし、非道にして強欲、掠奪、好色は烈しく、惡王の素質を十二分に備えた男であった。

「——きょうの女狩りは、ちかごろにない不漁だな。いっこうにめぼしい娘が捕まらぬ」

町なかに突っ立った李梵忠が、あたりを見まわして、いらだたしげにいった。



通りには人氣がなく、死の町のような静寂がただよっている。

「もう漁り尽くしてしまったのです、参謀。宮殿の中には、もう五百人もひしめいているというのに、殿はいつたい、何人の女を抱けば気がすむというのでしょうか」

部下の一人が、汗を拭きながらいった。

「いくらいても、多過ぎるということはないんだ。英雄色を好むというからな。精力絶倫とは、まさに殿のためにできた言葉だ。とはいふものの、五日に一度、新しい女を探しだして献上せねばならぬおれたちの苦勞も、なみたいていではないな」

「まったく、さようで」

この日、捕えた女は五人。しかし、娘というにも、美女というにも遠いものばかりであった。

李梵忠にとっては、それが心配だった。顔色がくもった。

「しかたがありません。こうなったら、数よりも、質でこなすのですな、参謀」

この部下は、こざかしい頭脳と弁舌をもっていた。

「数より質？」

李梵忠、はききかえした。

「つまり、女遊びにも、趣向を凝らすので。わが殿は女をいたぶり、さいなむことが、まことに好き。そこで、珍らしい変った遊びの方法を考えて——」

部下の表情が、卑しげに笑った。

「なるほど。新しい趣向をくふうして、うまく進言すれば、並の刺激に馴れた殿の心も、しばらくは慰められるというわけか」
それが成功すれば、また褒美にありつけるかも知れんわい——。

参謀の李梵忠は、眉をひらいて、にんまりと微笑した。

2

蝸洞城、城内の大広間。

部下たちを集め、連日連夜の酒宴がひらかれていた。この城を乗とった勝利の快感にまだ酔い痴れているのである。

美姫数名を左右に置き、虎のような目玉をギラギラ光らせながら、酒を浴びているのは蝸洞王であった。

立ちあがれば、六尺を越えようという巨大漢。陽焼けと酒焼けで、鬼よりも赤い面貌である。

顎から頬、鼻下にかけて、これみよがしに伸ばした赤ひげ。大きくくつろげた胸もとから、長さ三寸はあろうかと思われる胸毛がのぞいている。

広間の中央では、緋の羅衣をまとった女たちが、絃楽の合奏にのって、群舞の真最中であつた。

「やめろ。くそおもしろくもない。毎日おなじような踊り。もう飽きたわ」

蝸洞王は、ふきげんである。

盃を床に叩きつけ、そばにいる女の髪の毛をつかみ、イライラとねじり倒した。

「ひいッ！」

と悲鳴をあげ、眼尻をつりあげて苦痛を耐える女。その白い苦悶の顔を見て、自分のふきげんをおさえる蝸洞王なのだ。

そのとき、参謀の李梵忠が、そつと膝をすすめた。

「——殿。ならば、わたしが考えましたる、新しい趣向をごらんに

いれましょう」

そして梵忠は、手にした白羽扇を、ひらりとひと振りして合図した。

すると――

選りすぐった美女が、およそ三十人ほど。

しかも、腰に一片の薄衣をまとっただけの全裸に近い姿で現われたのである。

どっと一座がどよめいた。

「並べ！」

李梵忠の命令である。女たちは大広間の一隅に、ずらりと一列、横に並んだ。白裸の群像が羞恥に波のようなくねりをみせた。

「ほう、何をはじめようというのだ」

蜷洞王の目玉が、好奇にいっそう、まるくなつた。

「殿、わたくしめの趣向を、まず、しばらくごらんください」

李梵忠は、自信たっぷり、再び白羽扇を振りかざした。

「這え！……乗れ！」

命令をどなった。

裸女たちは、いっせいに床へ両手をつき、膝をついて四つに這つた。痛々しい恰好だった。三十四の牝犬に化したのだ。

と、つぎに、大柱のかけから、手に鞭を握った男たちが、これも女の数ほど、ぞろぞろと現われた。

「殿、ごらんなされませ。治にいて乱を忘れず。静に構えて動を忘れず。これは、女を馬に見たての走り競べでございます。あの白い馬どもに、この大広間をひとめぐりさせて一着二着をきめ、なまけて最後になった女には、存分の仕置きを約束しては……いかがで

ございます？」

「うむ、おもしろそうだな。まあ、やってみろ」

盃を唇にふくみながら、蜷洞王の眼に、チラと興味が湧いた。

「用意――走れ！」

梵忠は号令した。

牝犬の群れは、犬よりももっと苛酷な、馬と変じたのであった。

鞭を持った荒くれ男たちは、おう、とこたえて我れ先の勢いで裸馬の背にまたがった。

「それよッ」

その白い尻に、情容赦のない鞭を、ぴしりッと入れたのだ。

「ひいッ！」

背をのけぞらし、咽喉をひきつらせて牝馬は鳴いた。

残酷な競馬が開始された。

弱々しい四肢をもった白い馬は、屈強な男をのせて、いっせいにヨタヨタと走りだす。

両手と両膝を突っぱって、乗手の全重量を支え、必死の力で走るのだ。走るといふよりも、這い進むのだった。

たちまち、両腕に苦痛がのしかかった。両膝の骨が、くだけるかと思うばかりだ。

女たちが疲れるのは早かった。速度が落ちたり、とまったりすると、まるい尻に雨のように鞭が鳴った。

ぴしりッ！

ぴしりッ！

ぴしりッ！

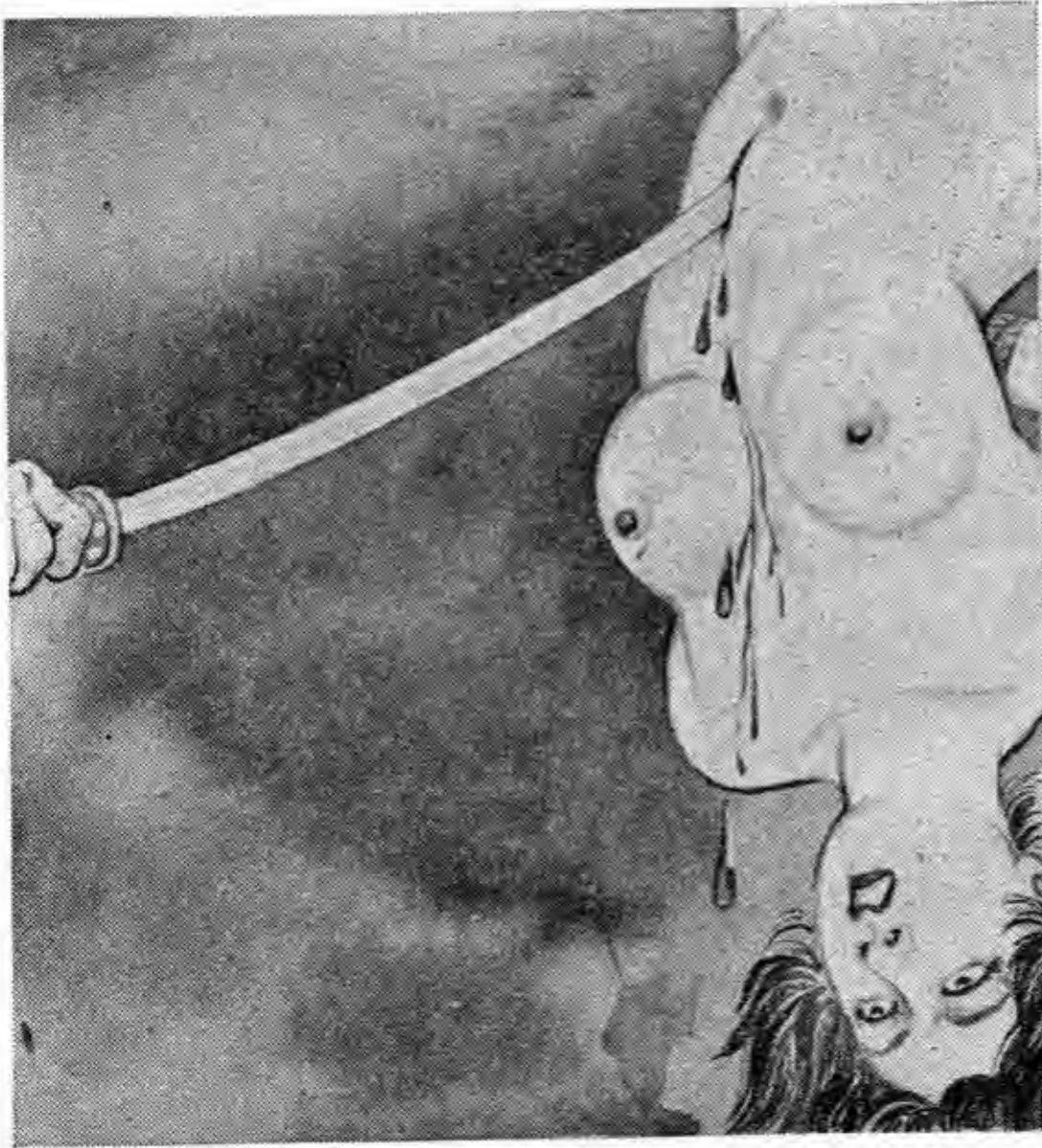
どの女の口からも、悲鳴がふきあがった。

男たちが、力まかせに叩く鞭のために、柔らかい肌は裂けて、血がにじみだした。鞭痕が幾条も交叉し、そこからは肉が破れて、血は太腿に伝い流れた。

「ひいッ、ひいッ、ひいッ！」

悲鳴をあげながらも、脱落することはゆるされなかった。脱落した場合の仕置きがおそろしかった。

「うむ、これはおもしろい。走れ、走れ。どの馬も負けるな。おく



れるやつは鞭で打て。打って打って打ちすえろ！」

蝸洞王が、濁声を張りあげてわめきだす。

哀れな裸馬たちの、白い肉からしたたり落ちる鮮血の色をみて、きゆうに興が増してきた蝸洞王だった。

広間の中に、異様な熱気がたちこめた。

苦痛と恐怖に駆られ、本物の馬のように、ハッハッハッと荒い呼吸を吐きながら、鞭打たれ、男の踵に脇腹を蹴られながら這い進む女たち。

「それ、走れッ、負けるな！」

「そら、追い越されたぞ、元気をだせ！」

罵声とともに、ぴしぴしと鞭が鳴る。

「ひいッ、ああッ、うううッ！」

乳房がゆれる。汗が流れる。あえぎ、つぶれ、打たれ、そしてまた起きあがり、ヨタヨタと前進し、牝馬たちにとっては地獄の苦しみだった。

そして、ついにこの大広間を一巡し、もとの出発点に戻ってきたときには、どの馬の尻も、まっ赤にそまり、全身からは滝のような汗を流していた。悲鳴をあげる力もない。

ぐったりと床に身を投げだし、羞恥も恐怖も捨てて、半死半生のせつない息に、肩をあえがせていた。

「うぬッ、きさまはどうした！」

蝸洞王が立ちあがり、指をさして大声で叱咤した。

広間の中央に、乗手を乗せたまま、つぶれ果てた女が一人いた。運悪く、岩のような大男を乗せた牝馬だったのだ。

死んだように倒れ伏したその女は、左右から腕をつかまれて抱



き起こされ、蝸洞王の前にひきずりだされた。

「おのれ、顔をみせろ、なまけ女め。どうして最後まで走らぬのだ！」

女は髪をつかまれて、顔を蝸洞王の前にねじむけられた。

「お前、永蓮だな。ようし、なまけた罰に、仕置きしてやる！」

蝸洞王は吠えるように笑った。

永蓮はふるえあがった。十七才の美少女だった。まだあどけなさの残っている顔が、蒼白になってひれ伏した。

「おゆるしくださいませ！」

「ゆるさぬ。それッ、仕置きの仕度をしろ。この小娘を縛りあげろ！」

蝸洞王の一喝だった。

「ははッ」

数名の部下が、ばらばらッと立ちあがり、永蓮の周囲をとりまいた。

「おゆるし、おゆるしくださいッ！——」

恐怖と哀願の声は、たちまちもぎとられ、圧しつぶされた。

3

永蓮の細い両腕は、ぎりぎりと言中になじあげられた。縄が蛇のようにからまった。

「ひいッ、痛うッ、痛うッ、おゆるしを！」

永蓮はまだ哀願をつづけた。

だが縄は十七才の柔肌に、なんの感情もなく喰いこんだ。

乳房がくびれあがった。首にも縄をかけられ。美少女の白い容貌が、恐怖のためにくしゃくしゃにゆがんだ。

蝸洞王の残酷な性格を知っている。蝸洞王の気に染まなかったために、おそろしい殺されかたをした女を、何人も知っていた。

背中の両手首がひきしぼられ、肩のあたりまで、ぎりぎりとしめあげられた。

「ううッ！」

と、息がつまり、永蓮の愛らしい顎が、前につきでた。

馬賊軍の兵士の手で、力まかせに縛りあげられるのだからたまらない。縄の苦痛を素肌を受けて、永蓮の肉はへこみ、縄は骨にまで

届くかと思われた。

「く、く、くるしいッ！」

血のでるような少女のさけびだった。白い咽喉が、ヒクヒクとあえいだ。

「馬鹿め。まだ泣くのは早いわ。泣いたり、吠えたり、わめいたりするのは、これからのことよ。わっはっはっ！」

蝸洞王は哄笑した。

あらゆる非道、残虐に馴れた、この馬賊の王の考えることは、想像を絶していた。

「この小娘の足首を縛り、天井から逆さに吊り下げろ！」

蝸洞王の命令は、大広間全体にひびき渡った。

「ははッ」

忠実な部下たちは、ただちにその命令を実行に移した。

ピンと縄が張った。

天井から、永蓮の足首まで一直線である。永蓮の長い髪は、ぱさりと逆に垂れ下がって、床を掃きそうになった。黒髪の長さは、三尺ほどもあった。つまり、永蓮の顔は、床の上から三尺ほどの高さ揺れている。

うしろ手に縛られたままの逆さ吊りであった。永蓮は唇を噛み、かたく眼をとじる。

無抵抗の裸身が、むざんな白さをさらしていた。うす紅色の乳首が二点とがっている。

「——刀をもて」

蝸洞王が命じた。

反りのゆたかな大刀であった。

ギラリ、と抜き放つと、刃渡りは三尺近くもある。

その大刀の柄を右手にがっしりとつかみ、蝸洞王は腹をつきだして構えた。

「永蓮、眼をあける。お前の鼻のさきに、ごちそうが光っているぞ。わっはっはっは！」

永蓮は眼をひらいた。

蝸洞王の赤黒い顔が逆さにある。鼻の先には、まさしく大刃渡りの先端が突きつけられていた。ピカリッとそれが光った。

「ひえッ！」

思わず、永蓮は顔をそむけた。その反動で吊り下げられている身体が揺れた。

「うふふふ……顔をそむけてはいかん。これから、お前のその可愛い顔が、おいぼれた羊のようにひんまがるんだ。白絹のようにまっ白い肌に、河のような血が流れるんだ。わっはっはっは！」

蝸洞王は、狂ったような馬鹿笑いをあげ、それから右手の大刀を構えなおした。

あろうことか、その鋭くとがった刃先を、宙に揺れている永蓮の白い腹に、プツリッと突き刺したのである。

「ぎゃあッ！」

叩きつけられた猫のような、獣じみた悲鳴があがった。

みるみるうちに、血があふれだした。白くまろやかな腹から、ぶくぶくと血糊が流れだす。血は粘っこい一筋の河をつくり、永蓮の胸へ、乳房の谷間を伝い、咽喉へ流れ、そこから顎の先にとどまった。

さらに、永蓮の顔面を赤く濡らして床の上にしたたり落ちるので

ある。

凄惨の匂いが、広間に充満した。

「うふふふ……うふふふ……」

ゆたかな血の匂いを嗅いで蝸洞王の眼が満悦に細くなった。これは戦場の匂いだ。

悪王どころではない。こうなれば狂王だった。野獣の王だった。

「わははははは……」

黄色い歯をむきだして笑うのだ。そして、右手に大刀に、また力をこめた。

ツツツツ……

刃先は、まっすぐに下までおりた。

皮膚がひらかれ、乳房の間まで刃はすべり落ちた。永蓮の裸身が、弓のようにのけぞった。

「ぎゃあアッ……」

絶叫は途中で消えた。あとはただ虫のようにもぐだけである。それもやがて動かなくなった。

こうして、永蓮は死んだ。

この残酷な遊戯を、蝸洞王はすっかり気にいってしまった。

兵士を乗せ、鞭で追いたてる裸女競馬。そして、落伍した女を逆さ斬りの極刑。

この遊戯は、およそ十日間もつづけられ、十人の女が腹を裂かれて死んだ。が、やがて蝸洞王は、単純な女の血の臭いに飽きてしまった。

「もっと変った遊びはないか。珍らしい趣向はないか。おれを夢中にさせるような」

賞金つきで、彼は案をつのった。

しかし、大同小異、蝸洞王の欲望を満たすような、奇抜で残忍な趣向は、なかなか現われなかった。

4

さえずりかわす鳥の群れ

春風なぶる花の顔

鵬遊山に雲ひかり

沈花の池に月のかげ……

唄いながら、碧花は泣いた。

ついこのあいだまで、この城は裏の鵬遊山に啼く小鳥の声に包まれ、見晴らしのよい樓閣殿には、五彩の雲が絵のようにたなびいていた。

父の易王が、沈花と名づけた清澄の池面には、鵬遊山に咲き乱れる春秋の花々が、美しく散り降った。

その沈花の池も、いまは蝸洞王の悪政に虐げられた人民たちの、悲歎の涙をたたえて重く光っている。

平和に栄えた花袋関の町が、馬賊あがりの悪王のために、日毎衰微していく有様を、胸かきむしる思いで眺めている碧花だった。

蝸洞王に反抗して起ちあがった勇気の人民たちは、すべて捕えられ、池のほとりで男女の区別なく、火あぶりの刑に殺された。

勝ち誇った蝸洞王は、城の名も蝸洞城と変えて、日夜酒色にふけり、淫虐な遊戯に浸っている。

かつては琴を弾きながら花をめだたこの樓閣殿は、いまや冷酷な

る牢獄と化し、足枷をはめられた囚われの身を悶え、悲歎の日々を送っている碧花である。

「父上……」

易王の面影をしのんで、碧花の白磁の頬は涙で濡れた。

「うふふふ……なんだ、また泣きつらか。よく涙が枯れないものだ」

いつのまにか入ってきた蜎洞王が傲然と碧花をみすえた。

「どうだ。覚悟はできたか。おれのメカケになる気になったか」

碧花のかぼそい肩に、毛むくじらの手をかけてひき寄せるのだ。

「ええ、けがらわしい」

碧花は、肩をひいてその手を払った。蜎洞王のそばから逃げようとする。しかし、白い両足首には、頑丈な足枷がぎっちり喰ひこんでいるのだ。

不自由な身体は、もろくものめって転倒した。

「ふッ、馬鹿女め。……よいか、おれはな、お前をいつでも自由にすることはできる。その愛らしい手足を、木杵に縛りつけて抵抗を奪ってよし、その唇をおしひろげて淫の秘薬を飲ませてよし、その気になれば、ことはかんたんなのだ。……だが、おれはお前だけにはそんな乱暴はしたくない。お前はなにしろ易王の娘、けだかい女だからな。おれは匪賊あがりの王だ。気位のたかい娘が、馬賊のおれに、自分から膝まづいて、なにとぞ寵愛を……と哀願するのを、おれは待っているのだ。おれだって、無理に手ごめにするよりも、その方が何倍も楽しいことを知っているぞ。わははははは！」



傲慢にして、嗜虐に満ちた嘲笑を、碧花の顔に唾とともに浴びせかけるのだ。

日に一度、この楼閣殿にあがってきては、碧花をなぶる蜎洞王だった。

ほっそりとした肩と腰をふるわせて悲歎にくれる姫の身悶え姿に、この上ない快感をおぼえる嗜虐の王だった。

そのとき、参謀の李梵忠が足音を鳴らしてあがってきた。

「――殿。本日の女狩り、ただいま終わりました」

「ご苦労。して、獲物は？」

「は、それが……三人ほどで」

「たった三人か。その三人も、どうせろくなのは居らんだろう」

蝸洞王は腹立たしげに舌うちした。

「町中を隅から隅まで、どぶ板を剥がしてまで調べたのですが、若い女はもうとても」

「玉華という姫はどうした。易王の娘二人のうち、姉の碧花はこのとおり足枷をはめて、まずは我がもの。妹の玉華はうっかりと逃がしてしまっただが、聞くところによると、姉に劣らず美しいというぞ。玉華を早く探がしだせ。お前ほどの男が、ちとだらしないぞ」

「は、申しわけありません」

梵忠は、めんぼくなげに頭をさげた。

玉華の名をきいて、ハッとしたのは碧花だった。

「わたしはどんなむごい目にあわされてもよい。妹の玉華だけは、どうか捕まらずに逃げのびてほしい……」

姉としての、ひたすらな願いであった。

「それはそうと、殿。きょう、町なかでおもしろい老人を見つけてきました」

李梵忠は、報告をつづける。

「おもしろい老人？……なんだ、それは？」

「は、老珍と申す、植毛師で……」

「植毛師だど？——それがどうした？」

蝸洞王は、不審と期待の眼で、参謀を見すえた。



「失礼なら、殿は、この碧花をまだ……」

「うむ。強情な娘だな」

蝸洞王は、チラとにがい顔をし、

「なれば、その植毛師を使って、この姫を意のままにする趣向は、いかがで……」

李梵忠の狡智にたけた眼が、蝸洞王と碧花の顔を交互にみた。

「ふむ。こいつ、またなにか、おもしろいことを考えつきおったな。よし聞こう」

蝸洞王の顔が好奇に光り、奸才に長じたこの忠実な参謀をみつめた。

李梵忠は、もったいぶってペロリと唇をなめ、王の耳もに口を寄せてささやいた。

「——この姫の肌に、熊の毛を植えつけるので。えへへ……」

「ほう、それはまた奇想天外」

「いかに高貴の姫といえども、姿変すれば、心また獣心に変じ、さすれば、みずからすすんで、殿のご寵愛に……」

梵忠の唇に、うす笑いがうかぶ。

「なるほど」

「いかがでございますか？」

反響いかにと、王の表情をうかがうのだ。

「おもしろそうだな。つれてこい、その植毛師とやらを！」

蝸洞王は命令した。

「ははッ。……ところで、殿。この案に対する、わたしへのごほうびは？」

梵忠は、卑しげな笑みを洩らす。

「そうだな。……うまく成功して、この高慢ちきな姫が、おれのいうとおりの女になったら、宮殿の女を十人、それから五百金をお前に与えよう」

蝸洞王は、馬賊らしいふとっ腹をみせた。

「ははッ、ありがたきしあわせ」

李梵忠は、ぴたりと床に平伏した。

白絹よりも白くなめらかな、香氣に満ちた美姫の素肌に獣の毛を植えつける——

この残酷な奇案は、馬賊王の好みにピッタリと一致した。

美と醜、白と黒との対照的な配合、そして交合だった。

さっそく、植毛師老珍を召出す。

年令百才を越え、猿のようにひからびた老爺であった。

そのことを命ずると、

「め、めっそうもない。こともあろうに、先王の姫、碧花さまのに、獣の毛など……おそろしい、もったいない！」

老珍は首を左右にふって固辞した。

しかし、刑棒を五十もくらわせて背中を裂き、そこへ焼酎をそそぎこむと、老珍は悲鳴をあげて承諾した。先王の徳を慕う心よりも

自分の命のほうが惜しかった。

凄惨な悪戯がはじまった。

蝸洞王にとっては、しかし、かってないほどの快感を呼ぶ見世物だった。

乳を塗ったように白い柔肌に、わざと傷をつけて、熊の毛を移植しようというのだ。

まず、碧花の身体の裏側、つまり背中からその作業ははじまった。

特別につくらせた木の枠に、裸にむいた碧花の四肢を、うつ伏せにして縛りつけた。

ちょうど、ハリツケの形だった。床にうつ伏した十字架だった。

碧花の左右の手首、腕、腹、足首の各所に嚴重な縄がかけられた。

碧花の左右の手首、腕、腹、足首の各所に嚴重な縄がかけられた。

縄は情も容赦も手かげんもなく、姫肌の上にギリギリと喰いこんだ。もう逃げることはおろか、身動きすらならないのだ。

そして、残酷な手術は、碧花の首すじのあたりからはじまった。老珍の指に握られた針が、鋭く柔肌に突きささる。

「ひいッ！」

痛烈な悲鳴が、碧花の咽喉からふきあがった。がくんッと首がのけぞった。柳眉は逆立ち、眉間には苦痛の皺が走る。

肌を針で突き、裂き、そしてそこへ熊毛をさしこみ、膠を垂らしこみ、化膿止めの薬草汁を塗りつける。

老珍の指さきは、さすがに熟練であった。百才を越える老人とは思えぬほどの敏捷な指の動きなのだ。

碧花にとっては、生きながらの地獄であった。

「ひいッ！」

身動きならぬ身体をもだえ、咽喉をつき破る悲鳴。はらわたもちぎれる絶叫。

すべすべとした肌から、フッフッとあぶら汗が湧いた。いましめの縄が、さらに肉に喰いこむ。

白い襟すじに、おぞましい熊の毛が、びっしりと植えこまれた。

老珍の指は、さらに肩から背中、腰へとおりてくる。いまやこの老植毛師も、かつて彼の経験にない奇妙な植毛に興奮し、眼光らんらんと腕をふるっていた。

黒々と、そしてふさふさとした熊の毛が、次第に碧花の背面を埋めていくのだ。

「うう、くくくッ！」

汚辱と苦痛、恐怖と口惜しさの声が、碧花の唇から吐きだされ

る。十字架にくくりつけられ、腹這いになってもがく姫肌の哀れな姿。

「わははは、おもしろい。もっと泣け。もっともだえろ」

碧花の苦悶を見おろしながら蜩洞王はいかにも心地よげに哄笑するのだ。片手には大盃をつかみ、この凄愴な見世物をさかなに、ぐびりぐびりと咽喉を鳴らしながら酒を飲んでいく。

血と汗と悲鳴の、むごたらしい数刻が過ぎた。

碧花の背面、首すじから足の踵まで、ぎっしりと熊毛が植えこまれた。黒一色、それが草原のように、ひくひくと波うっている。野獣の異様な臭気がただよいはじめた。

「——ああ、疲れました」

全身に汗びっしり、頭から水を浴びたような老珍が、ぐったりと腰をおとしてうめいた。

「休んではならぬ。つづけろ。まだ背中を終えただけではないか。まだ腹のほうが残っている。早くやれ！」

蜩洞王が、あらい声で叱咤した。そのうしろには、李梵忠もニヤニヤしながら眺めている。

「へい……ですが」

老珍は哀願のような視線をあげた。疲れているのだ。骨だけの肩が、せいぜいとあえいでいる。

「ならぬ。つづけるのだ！」

「へい」

しかたがなかった。老珍はふらつく腰をあげた。

碧花の縄が、いったん十字架から解き放たれた。腹這いの身を起こされ、つぎには身体をひっくり返されて、仰むけに縛りつけられ

るのだ。

いっそう、むごい光景が展開した。

氣品をみせて、つつましく盛りあがっている碧花の乳房にも、黒い熊毛が植えつけられるのだ。

苛烈な乳房責めだった。鋭い針のさきで、熊毛をさしこむための穴を、チクリッチクリッと突くのだ。もっとも柔らかい乳房のふくらみに……。固く粗い熊毛を数本ずつ……。

「ひいッ、ああッ、きえッ！」

赤い血が、白いまるみからプツプツと玉になって湧きだす。氣も狂わんばかりの激痛であった。うす赤くとがった乳首にも、その針は容赦しなかった。

老珍も、もう夢中だった。早く仕上げて、このおそろしい仕事から解放されたかった。鬼のような形相になって、その乳房に熊毛を突き刺す。

「うううッ！……ぐううッ！」

碧花の背が、弓のようにのけぞった。

「ぎゃあッ！」

ひと声、吠えるような悲鳴をあげて、ついに碧花は悶絶した。ぐったりとして、動かなくなった。

「おい、大丈夫か。殺してしまっはなんにもならぬ。この女を殺したら、お前の首をただちに斬り落とすぞ」

蝸洞王がのぞきこみ、心配げにどなりつけた。李梵忠も一瞬、息をのんだ。

「へい。心配はねえです。氣はたしかで。ただ眼をつぶっただけでさあ……」

汗に濡れた顔で、老珍はこたえた。

失神した裸女の肌に、なおも残忍な植毛術がすすんでいく。乳房を終えて、腹、腿……。

やがて――

みがれた玉のごとく、美しく輝やいていた姫の白肌は、首から上だけ――つまり、顔だけを残して、すべてを黒光りした、粗い感触の熊毛におおわれたのである。

顔はもとのままの、白く秀麗な姫であるのに、咽喉から下は、手も肩も胸も腹も腰も、みるからにおぞましい、熊と変じたのだ。

妖奇の熊姫、獸身の美女！……

これほどの嗜虐があろうか。

氣品高い王侯の姫を、畜生の世界にひきずりおろしたのである。

生きながらの畜生に。

数刻後、氣を失っていた碧花が、ふと眼をあげ、自分の姿に眼をやった。

十字架から、もう身体は放たれている。しかし、全身に疼く痛みとともに、黒々となびく獸の毛――。

「ああッ！」

絶叫をあげると、碧花は眼をつりあげ、口から泡をふいてのけぞった。ふたたび氣絶したのだ。

つぎに息をふきかえした時、碧花は毛の生えた自分の胸を腰を、キョロキョロとみまわし、撫でさすった。

そしてつぎに、ひょっこりと天井に顔をむけて、

「ヒヒヒヒ！」
と笑った。

蒼白な顔に、澄んでいた眼が濁っていた。

碧花は、いきなり四つん這いになると、室内を這いまわりはじめた。歯をむきだし、それこそ熊のように尻をふって歩くのだ。

気が狂ったのである。

「なんと！」

蝸洞王は、さすがに啞然とした。眼の前に這いまわる碧花の、その異妖な光景を凝視した。

「うぬッ、誰が姫をきちがいにしろといったのだ、この馬鹿者め！」
蝸洞王は足をあげて老珍を蹴倒した。腰の刀に手をかけると、この植毛師を刺殺しようとした。怒りのために、顔面が赤くふくれあがっている。

「しばらく。殿、しばらくお待ちください。こんなおいぼれを殺さずとも。——なに、姫が狂えば狂ったで、また一段とおもしろうございます。すなわち、こんどこそ、なにをしようと、思いのままではございませんか。えへへへへへ！」

李梵忠が、あわてて押しとどめる。

蝸洞王を怒らしてしまつては、自分への褒美も危くなる。ここはなんとか、王の機嫌をとりむすばねばならないのだ。

その夜から——

蝸洞王と熊姫碧花の、奇妙な戯れがはじまった。

ことは、数寄を凝らした鳳凰の間である。この部屋も、易王からそっくり奪い取った豪華な居間であつた。

「こい、こい。わしの熊よ、熊姫よ。可愛がつてやるぞ」

酒に酔い痴れた蝸洞王が、唇の端から涎を垂らしながら碧花を呼ぶ。

碧花の咽喉には、金具の首輪がはまっている。この首輪は李梵忠の案だつた。

首輪には長い鎖がつき、その端は蝸洞王に握られている。

「さあ、こっちへくるんだ。這え、まわれ、尻をふって走れ」

首輪の鎖を力かせにひきずりまわす。

碧花の咽喉がのびる。必死になつて這いまわる。

「よしよし、こんどはわしの膝へこい。抱いてやろう」

すると碧花は、狂った瞳にうれしげな笑みをうかべ、蝸洞王の前に這い寄り、その膝に両手をかけてじゃれつくのだ。

もはや完全に獣心と化していた。高貴の姫の面影は消えていた。

熊姫の首根に足をかけて踏まえ、蝸洞王の心には、しびれるような征服感がある。勝利の快感だ。

一介の馬賊にすぎないおれが、いま易王の姫の首すじを足蹴にして酒を飲んでゐる。

なんという、うまい酒だろうか。

陶然として、蝸洞王の酔いはふかまっていくな。

こうして——

悪王と熊姫の奇怪な交歓が、このただれた城内に、日夜くりひろげられていった。

美しい人獣——ただの女では得られぬ、刺激的な快楽である。妖しく倒錯した肉体の魅惑に、忘我の境に溺れる蝸洞王であつた……

(次号にて完結)

切腹研究夜話

中 康 弘 通

身 辺 雑 録

しばらく多忙で、本誌への寄稿も途絶えていたが、たまたま閑暇を得て筆を執ることが出来た。「身辺雑録」と記した通り、私ごとばかりであるがお許し願って一筆しよう。

この夏ごろ、ふと鏡に向かって、右の髪髪に白いものの混じっているのに驚ろいた。左がわもよく見ると、そんな年齢でもない心算が、白いものが一とすじ二たすじ見える。そう云えば、もとくよくない視力も此のころ一層おとろえを見せたようである。

丁度そのころ、永年に亘って書き綴って来た、切腹の歴史、文芸に就ての拙文が一冊にまとまって出ていた。思えば、志を立ててから早や十余年の才月を経過していた。そのことは小著の「あとがき」にも簡単に記したが、紙幅の都合もあって、余り詳しい



ことは書けなかった。

このシリーズを始めて雑誌に発表したのは昭和二十七年の夏、「人間探究」に寄せた「藻屑物語鑑賞」からである。続いて同誌には「女ハラキリ」が載った。更に「切腹史談」を脱稿したころ、同誌は廃刊となった。

この原稿が翌二十八年三月から本誌に連載された拙稿の母胎となったのである。当時は「切腹」をテーマとする文章は風俗誌の類いにも見られなかった。そこには戦後という時代の課した制約があったにしても、全く当時の風潮からすれば、徒ずらな懷古趣味として問題にされていなかったであろう。

従って、拙稿の採用を快諾した当時の本誌編集長、箕田京二氏の断は、営業的に可成り冒険だったと云えよう。

尤も、本誌二十八年四月号に信太蓉子氏の「開花の契機」が現われ、独り切腹の真似ごとを試みるという彼女の告白は、是また一つの劃期的な文章と云えるかも知れない。

そして私が、既に前年予見していた通り、このころから切腹、特に女のそれが、文芸、女剣劇はもとより、ヌードショウに至るまで取り入れられて行った。

仇討と切腹を二大支柱とする歌舞伎の「忠

臣蔵」が上演を禁ぜられていた終戦直後から考えれば、今夏渡米した歌舞伎一行の「忠臣蔵」が米人の注目を浴びたことは、まことに隔世の感に堪えず、十余年を此の一とすじに打ち込んで来た筆者に取って、殊に感慨深いものがある。

今度、小者が週刊読売七月十七日号、歴史読本九月号、両誌の書評欄に取り上げて頂いたことも、全く思いがけないことがあったし一部を寄贈した小者がミシガン大学日本研究所に於て学生の閲覧に供せられていることに至っては、日本と日本人を愛するが故に、少しでも日本と日本人に関する偏見や誤解を解きたいという、ささやかな私の念願が幾分なりとも果されるような思いで、深い感激を覚えていいる。

その間、寄稿させて頂いた新聞雑誌の編集長各位の御厚意には何よりも深く感謝しているが、また随分多くの読者の方々から、激励や示唆を頂いたことも忘れられない思い出である。

まず人間探究の編集部を通じてKR氏の来信を得たのが端緒となり、拙稿が本誌に連載されてからは、福岡のHM氏、香川の岐溪秀峰氏、浜松のKM氏をはじめ、信太蓉子さん

岸田映子さん、愛川晃子さん、児島輝彦氏など、当時の編集部を通じて来信があった。全く当時をなつかしく思い出さすお名前ばかりである。憶むらくは大半が今日では音信不通で、たまたま私も臥床、入院、転居と重なる変転から、宛名さえ定かでない方々が多いことは遺憾に堪えない。

考えてみれば八千万の人間が住む中で、一つのテーマをめぐって意見を交換するということは稀らしいことに違いない。そうした不思議さは因縁の深さにも通じるようで、離合集散つねならぬ世の定めと思ひ合わせ、一層の感慨を覚えずにはいられない。

岸田さんは夭折されたとも仄聞するし、愛川さん、岐溪氏いずれも余り健康にお恵まれでないようであった。今日どうしておられるか、他の方々とも合せて、その御健在を祈りたい。

なお私は今度の著書で始めて住所を公開したので、未知の方々からまた色々とお便りを頂いたが、中にも、終戦時の体験をお知らせ下さった方や、引用もれの文献を御惠贈下さった方、地方史の文献から参考部分を多忙をも顧みず筆写してお送り下さった方など、ありがたい読者の方々の御厚意を頂いたこと

も記しておきたい。

ところで時代相が逆コースに向かったとい
うのか何うか、“切腹”が再認識され始めた
のか、“剣豪列伝集”八、九月号に、八剣浩
太郎氏「時代小説考証大百科——切腹の巻」
を二回にわたり掲載された。

是は少い紙数で良くまとめであり、目新し
い資料もあって興味深いものであったが、中
に、私の旧稿から取材し而も誤解されている
のではないか、と思われる個所があるので、
一応解説しておきたいと思う。私の勘違いで
あるとすれば八剣氏に失礼の段くれぐれもお
わびしておきたい。すなわち氏の文中に、

それから、正十文字の変型として、左
から右へ一文字に切り、一旦ぬいた刃を
水月から右脇へ斜めに切りさげ、前にぬ
いたところで合わせるのがある。終戦当
時、ロシア兵がなだれ込んだ満洲で、十
八才の日本娘がこの型で割腹自殺したと
いう。暴徒につかまって散々なぐさみも
のにされたあげく、

「日本のおんななら切腹できるはずだ、
やってみろ」
と強要され、ついに腹かき切って、溢れ
てた腸を両手でにぎりしめ、恨みの涙に

ぬれながら絶命したそうである。

と記されているのは、私が嘗って「特集人
物往来昭和三十四年五月号」に、

まづ正十文字の法の異型として、左か
ら右へ横に切り廻し、右脇で一旦抜いた
刃を鳩尾から右脇へ斜めに切り下げ、前
に刀を引抜いた所へ合せておく。是は史
書では例を探し当らないが、中山博道先
生が説いて居られたし、終戦時、満洲で
十八才の少女が此の型に則り割腹したと
いうことである。

(中略)

俗に無念腹とも云い恨みを残す屠腹に
は、十文字に限らず一文字にしても、腹
も深く切って腸を掴み出す場合もあるら
しい。終戦時に暴徒に拉致されて切腹を
強要された十八才の少女が、腹を掻切っ
たのち両手で両脇腹をぐっと押し溢れ出
た腸を掴んで絶命した、というが如きは
その尤なるものであらうと思う。

(下略)

の二項が混同されたのではないかと思う。
二項ともたまたま同じく十八才の少女なので
斯ういう混乱を招いたとも云えるが、それに
しても拙稿の説明不充分によるものと見え、

甚だ不体裁なことであった。

私は此の二つの事件に就き内容がある程度
知ることが出来たが、元来は本誌、昭和三十
二年一月号所収の、田谷敬生氏「女性切腹例
抄記(上)」によるものであった。従って、
田谷氏の記述の内容に忠実に引用させて頂い
たわけである。

前者は満洲に於ての事件であるが、ここに
引用した娘の最期は、終戦直前、前途の多難
を察した姉妹が潔よい自決を願ひ、共に悲愴
な十文字腹を切り、壮烈な死を遂げた、その
妹の方である。

後者は、やはり満洲ではないが、ある外地
で拉致されて強要され、与えられた軍刀で腹
一文字に掻き切り、是また悲愴な最期を遂げ
たものであった。

次に今ひとつ気付いたのは、切腹した史上
の烈女を列記した中で、会津戦争関係に新藤
初子の名が挙げられていることであるが、私
は此の名を“裏窓”所収、矢桐重八氏作“父
恋い娘旅”で知った。この作品の中で、初子
は薩長兵と戦い力尽きて立ち腹を切ることに
なっている。

会津娘子軍の中には随分、勇烈な女性があ
ったし、また立ち腹を切った婦人もあったと

いうことを仄聞したこともあったが、是は創作であろうと思う。従って拙稿「女人悲傷譜」では、あくまで文芸作品のヒロインとして扱っている。若し史実に該当する女性があるとしたら詳しく知りたいものである。

尤も、陶山密氏作「切腹した最初の女」の

ヒロイン摺建静子さんの切腹を、私も嘗て事実と思い込み、本誌昭和二十八年五月号で書いたことがあった。後に、愛宕山尊攘義軍碑建立関係者の方から自決の真相を伺い本誌に訂正の謹告を載せて頂いたこともあった。創作と事実とを混同しないように、幾ら細

心であっても、ある程度は追究への熱意が却って眼を鈍らすことが多いのである。次回には、本誌の過去に活躍された寄稿家読者の方々に就いて、感じたことでも書いてみたいと思っている。

(切腹研究夜話十一)

〔新版〕女体緊縛フォト オンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙 9×13 ㎝)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

9	8	7	6	5	4	3	2	1
股間しはり	後手足しはり	後手猿ぐつわ	海老責しはり	高小手猿ぐつわ	床間の飾り物	海浜に於ける緊縛	柔肌に強烈な荒縄	
(須川令子)	(村田那美子)	(須川令子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(佐賀美智子)	(須川令子)	(須川令子)	

R R

71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33
股間タテしはり	首縛股間しはり	手足逆吊り	和服の後手しはり	仰向全裸悦虐責	後手首縛シメ	乳房下しはり	肉体美への折檻	お灸ゼメ	後手猿ぐつわ	松樹縛り晒責	コルセット縛り	股間しはり	手と足と緊縛	後手しはり	御開帳	くさりゼメ	折檻の魅力	全裸の股間しはり	逆立の折檻	開股椅子ゼメ正面	振袖の緊縛	腰元の吊り責	ヌードしはり	本縛しはり	股間しはり	落花狼藉の緊縛	樹間のハリツケ	帆立舟のゼメ
(中富綾子)	(坂口利子)	(伊吹真佐子)	(藤田節子)	(川端多奈子)	(加賀利江子)	(村田那美子)	(伊吹真佐子)	(春日、伊吹二嬢)	(萩千恵子)	(村田那美子)	(中塚文子)	(加賀利江子)	(萩千恵子)	(萩千恵子)	(川端多奈子)	(須川令子)	(愛川悦子)	(大塚啓子)	(花坂道子)	(村井知可子)	(愛川悦子)	(田中芳代)	(川辺登子)	(益田房子)				

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72
逆エビ責め	変形全裸股間縛	ヌード縛り	全裸横臥緊縛	ビクニツク	ハイヒール	湖畔の宿にて	尻立逆しはり	下着の色模様	目隠し開股縛り	後手高小手	乳房しはり	開股ベッド縛り	全裸床柱縛り	亀ノ甲縛り	ヌード股間縛り	ガソジガラメ	臀部丸出し猿轡	破れたシュミーズ	女学生のしはり	仰向開股しはり	乳房くさりゼメ	野外バンド責め	トイレ正面排泄縛	開股正面いじめ	乳房縛りゼメ			
(愛川悦子)	(花坂道子)	(村田那美子)	(萩千恵子)	(須川令子)	(田中芳代)	(大塚啓子)	(愛川悦子)	(花坂道子)	(愛川悦子)	(萩千恵子)	(愛川悦子)	(大塚啓子)	(川辺登子)	(愛川悦子)	(中塚文子)	(伊吹真佐子)	(坂口利子)	(須川令子)	(萩千恵子)	(川辺登子)	(村田那美子)	(中塚文子)	(伊吹真佐子)	(佐賀美智子)				

“奇譚三十九夜”物語

第 二 夜

△この物語は第一夜から第三十九夜まで毎号一夜宛載せてゆきます。▽

辻 村 隆

プロローグ

肌色の月が窓辺に徐々に浮き上って——。洒落たカバーのアームチェアーにダッコちゃんがチョココンと片眼をつむっているのです。例のクラブ——。メンバーは八人の退屈男。此処に於ては話は苦痛ではなくて其の日の愉快な遊びなのです。

パイプ氏がつと立上って、今宵のリクエスト曲をかけます。みんなが若返るように……。

「アモーレ、アモーレ、アモーレ——」

「死ぬ程愛して」の艶やかなメロデーが、そこはかとなく流れ出し

たのです。

人々は、ストラスブルゲの大通りや、サン・マルタンの附近の居酒屋で、陶然と酔い痴れた人のように、てんでに好みのワインを捧げ、瞑然して、一体どこの国の女が、世界中で一番美しいだろうかと考え、ソ連は嫌いでも、オリンピックの体操で金メダルをとったラチナ嬢のバレリーナが、矢張り一番美女だろうかなど、静かに考えるのでした。

曲が終ると、ナイロン氏がおもむらにグラスを置いて軽く誰にともなく軽く会釈して、そっとポケットより翡翠の耳輪をとり出したのです。淡い螢光灯の光を受けて、それは深海魚の如く緑色に燦然

とした妖しい光りを放っていました。

第一話 翡翠の耳輪が知っている。

吉原は、あのごみごみした虹口から、広々とした仏祖界へ来て、もう二カ月程になる。フレンチ・パークのプラタナスの葉が、木蔭の日溜りに吹き溜って、傍らに、黙然と中国人のアマ達が編物しながら、可愛いフランス人形のような子供を遊ばしていた。

秋がくると流石に上海の一流地も、そこはかもなく佗しい。

吉原はその晩、外套も着ずに、フリリと食後の散歩に出た。霞飛路の大通りの、美しい舗道の上に散り溜った街路樹が、街灯に黄色く光って、サラサラと風に流れた。

夕食のコーカサス料理のシャンリックが、まったく美味かったので、ロシア人のボーイに余計チップを弾んだ位だから、彼の体内のウオトカも快よく踊っていた。

エドアル路と西藏路との交叉点、大世界前の広場で、いつしか彼の足はとまった。

クスリと煙草のネオンが大世界から洩れてくるミュージックに歩調を合わせるように、華々しく、どぎつく明滅していた。

ネオンの蔭のあちこちに一団となって、野雞の群が、紅唇をひらめかせ、エトランゼの懷ろを狙っては近寄り、相手にせぬとなると、猥雑な言葉を浴びせかける。

赤衣が、青衣が、闇に舞うと、その一団に紫煙とどぎつい西洋香水の匂いが漂った。

吉原は地味な支那服を着込んで、すっかり上海人になりきっていた。

野雞では味わえない、大世界の淑女を求めて、彼の足はその辺りを逍遙した。

その夜は彼にとって何という恵まれた晩であつたろうか。

淑女は求めるまでもなく、向うから彼の前に現われたのである。ヴィガンの香が、吉原の鼻をかすめて、彼はハッとした。途端、秋風に舞ってヒラリと一枚のハンカチが彼の足許に落ちた。

遠いネオンにはえて、翡翠の耳輪が蒼くさえて女の両の耳たぶに光っていた。

真黒な緞子の地に、銀糸で唐草の縫い取りをして、ノールな支那服が、ピッタリと肌に吸いつき、氣品がこぼれていた。

彼は静かに、而も敏捷にハンカチを拾った。そっと軽くくちづけをして彼女に差出す。

妖しい笑みが女の頬に走って、白魚の指がしなやかに彼を招いた。

一瞬の緊張を破って吉原は女に近附いた。

二台の黄包車が、わらわらと寄って来た。

車はエドアル路から、敏体尼露路へ曲って、すぐ小路に折れた。

降りた二人を、穢い中国人が、西瓜の種を嚙り乍ら、胡散臭げに見た。三階建のフランス造りの古いしやうしな館の鉄扉を微かにきしませて、女は彼を招き入れた。二階の突き当り、ドアを開くと、

凡そ十五、六帖も敷ける板敷の部屋があつた。左の隅の、四本柱に白幕の垂れた、詩絵の金ピカの支那式ベッドが、大きく彼の目に入った。

中央の卓を囲んで、彼女は目で坐れと示した。ポイントマイムが続いて、吉原のアバンチュールを求める心は極度に昂っていた。

今では相当、上海馴れがして、大抵の事に驚かない彼も、未知の

世界に入り込んで、激しい緊張に襲われた。

彼は辺りを見廻した。黒檀の家具類、卓子、椅子、化粧台、茶卓、衣裳簞笥——それに大きな肖像写真——この部屋は、ありきたりの中国風であったが、此の部屋の奥に、もう一つ部屋があるようである。半開きになったドアの隙間より、暗い冷たい空気が流れてきた。

「吉原先生でしヨ」

女はククと笑って玉を転がす声で、意表をついた。流暢な日本語。

「えッ、どうして僕の名を——」

「……」

女は黙って一葉の写真を彼の前に差出した。

「あッ、愛栄じゃないか——」

「そうよ、私の義妹よ。先生に大変可愛がって貰ったネ。随分ひどくおやりになって、未だウーン／＼寝てるよ」

「あーあれは愛栄も承知の上で……」

「勿論、私みんな知ってるヨ。義妹、大変、嬉しいと喜んでる。だけれど今夜、愛栄ではダメ、私が代りになってネ？」

「えッ、あの、君が——」

吉原は思わず呻いた。爽快な嗜虐の念が、もりもりと湧き上って、来た。

茶館、青蓮閣で知り合った愛栄と、夜毎の逢瀬を重ねて、彼は愛栄を掌中のものにした。

激しい鞭打ち。密室での快楽。肢体の少女じみた愛栄と二人、全身にぬらつく香油をぬりたくって、ギラギラする裸身を鞭をふるって追い廻した夜——。

「噯呀！」と絶叫する愛栄を、高々と逆吊りにして、しなやかな細鞭

で打擲し、緑の髪の長く垂れ下った、愛栄の逆さの顔に、口うしに快楽の旨酒を吸わせた一夜——。

きれぎれの嗜虐の愛のしるしが、走馬灯のように彼の脳裡をゆるやかに巡った。だから吉原は、この歓楽の異境を離れる事が出来ないのである。

「承知ならいい。だけど、これだよ——」

吉原は、さっと鞭をくれる素振りをした。さっと頬を染めて女はうなづく。

「愛栄で出来ない事、私、先生にしてあげられる。隣りの部屋で支度する。呼んだら入っていいのヨ。私、愛蘭——」

黒衣の裾をひるがえして、女は最後に自分の名を告げると、隣室に消えた。

「いいわ」

微かな声に吉原は牡豹の如く、扉をけた。まばゆい程白い肌に、金色の腕輪がきらめいて、すつくと愛蘭は立っていた。

伸びた肢、くびれた胴、豊かに張り切って胸、垂らした黒髪——。そして、キラキラと光る双つの翡翠の耳飾り——。

女は微笑みを湛えて両手を拡げ、吉原を迎えた。きれぎれの言葉が吉原の耳朵をうった。

「耳輪を外してネ、その穴に卓上の絹糸を差し込むの——いい……ネ……」

云われる儘彼は傍らの卓上の真赤な細い絹糸の束をとり上げる。見かけよりは強靱で、強く引張っても切れない。為すが儘の女に、彼は素早く耳輪を外し、穿たれた穴に絹糸を貫通させる。通った絹糸は二本となって、女は眼で壁の環に固定し、一方の耳もまた、同

様に反対の壁に強く絹糸で結ぶ——。
両耳で吊られて女は眼眦をつって、静かに痛みにくらえる。
吉原はズボンのバンドを引きぬく。



刹那、愛蘭の眸に、恐怖と快樂が交叉して、彼の手は豊かな胸に一瞬、飛ぶ。——
ピシリピシリピシリ、女の両手が空を掴んで、のけぞり、両耳の絹糸が張り裂けそうに緊張する——。

くいしばった唇から、呻きが洩れ、眼にスーッと涙が一筋、二筋つたう。

みるみる肩から乳房にかけて、桃色の妖しい線が、二条三条——白肌を赤く染め出した。

皮バンドが振り下される度、愛蘭は体の支えを失って前後に揺れた。両耳の絹糸が、辛うじて愛蘭を倒さぬよう、耳穴の皮膚に深く深く潜穿して、彼女の耳穴は今にも干切れん許りに吊り上った。

両の耳から相前後して、ささやかな血滴が、ポトリポトリと床にしたりおちる。

白滋の肌は破れ、無慚に鮮血を惨ませて、女の息は乱れ、空にあえいでいた。

微かに噁呀！噁呀！と叫び、我的多々辛苦——と呻くように喉の奥でうめいていた。

吉原はポケットのナイフで、緊張し切った両耳の絹糸を発止と切った。

ドタリと愛蘭の体は前に倒れ、そして動かなかった。もどかしく体中の絹糸を切り裂く吉原の頬に冷めたい黒髪のグビガンの香がひ

しひしと泌み渡った。女の手が彼に、そつと翡翠の耳輪を握らせた――。

翌夜――、吉原は館を訪れた――。

女はいなかった。腑抜けの如くフラフラと彼は大世界の方へと辿って行った。

毎夜、吉原はウビガンの匂いを求めて、大世界をさまよった。十七日目、彼女を見かけた。女は黄包車の上だった。

寸時にして吉原は愛蘭を追った――。

併し、彼女は美しい木偶人のように沈黙した儘、振り向こうともしない――。

黄包車はズンズンと大世界前の大通りを、バンドの方へひた走って行く……。

と、彼女の車は江南大旅社の前でピタリと止まった。彼女は一寸振り返った。そして何とも解き難い謎の微笑をチラリと彼に投げかけたかと思うと、その儘、玄關正面の大階段を、靴音も軽やかに、トントントンと駆け上っていったのであった――。

「愛蘭は所詮、謎の女でした。恐らくは本名でもないでしょうというのは、愛蘭に姉はなかったのです。どうして愛蘭と吉原の秘密の遊びを、その女は知ったのか、それも分りません。上海で誰も、再びその黒衣の女を見掛けたものはありませんでした。勿論、吉原も――。

唯一つ、残されたこの翡翠の耳輪――、これだけが、彼女の秘密を握っていると思うのですが……と、吉原は云うのです」

ナイロン氏はそう語り終って、女の肌をいとほしむように、静かに緑の耳輪を愛撫していました。紫煙の漂うクラブ――。誰も、一

人も口を聞かず、この妖しい話に惹き込まれていました。昔のよき歓楽の都上海をほうふつと儼に浮べ乍ら……。

第二話 奇妙な「掟」 あそび

「プロスペル・メリメの小説を読む迄もなく、コルシカ島、シチリア島、南イタリア辺りでは、昔ながらの「掟」が、公けの権力以上に隠然とした力をもっている事は、映画「掟」を御覧の方は、既に御存知でしょう。

イヴ、モンタンの、「掟」あそびのシーンは、今も私の脳裡に深く焼きついているのです。ロロブリジーターの豊満な胸と、そしてお色気も共にね――。けれどこんな「掟」あそびが、日本にもあるとしたら、どんなものでしょうか――いやもう、近頃の若い者は、何を考え出すことやら……」

ステッキ氏は、取輪めいた笑みを浮べて、好き心の、皆の関心をゆさぶる様に、こう語り出したのです。

二十一才の大学生、山野進が、この奇妙なメンバーに足をふみ入れた、そもそもの始まりは、ペン・フレンドとの文通からだった。初期の目的は何であれ、若い男女が文通に飽きたらず、いつしか、グループに「みのむし会」と名づけ、発足した頃は、抜けるべきは抜け、ふるいから落ちたものは落ち。所謂、利那主義的な快楽を求める、渴いた世代の、男女許りが残ったのであった。人並の刺激にも飽き桃色遊戯も面白くなくなって、会の発案者、岡嶋が、奇妙な「掟」遊びを提唱した時は、会の男七名、女五名、一人の異義もなく賛成した。岡嶋は叫んだ。

「諸君、我慢較べで会長を選ぼうではないか——茲に椅子がある。この椅子に順々坐つて呉れ給え——。弱電から徐々に流して、強い電流にして行く。一番頑張った者が会長になる資格があるとする。勿論、諸君が動けぬ様、この椅子に絞りつける——。死刑台の電気椅子の実験だ。どうだい……」

皆は顔を見合せ、女の中には既に唇の色を変える者さえいた。外部から遮断された、バー、ダンディの地下の倉庫、この扉は四時間後まで、外から確っかり閉められており、誰一人として逃れ出る事は出来ない。

工科大の山野進は、電撃には多少の自信があった。エンジニアの彼は、たえず電気と接触する関係上、少々のボルトなら素手で握れる様にさえなっていた。

次々と椅子に固定され、素足を鉄板の上にのせ、徐々に電流を通じると、或る者は眼を白黒させ、女は派手に悲鳴あげ、次々と会長の椅子から降りた。

この我慢会を提唱しただけあって、流石に岡島は電気に強かった。顔を紅潮させ粘りに粘つて、遂にタイムは山野を僅かに超えた。会長、岡島がこうして選ばれた。「掟」遊びの実権を握る会長既ちオヤの位置が定まり、会員は会長の命ずる、いかなる「遊び」にも絶対服従を誓わされた。

一、「掟」あそびは絶対会長の命ずる儘に従うこと。

一、「掟」あそびの日は必ず集まること。

一、「掟」あそびを絶対他人に洩らさぬ事。

一、四カ月に一回、会員の提唱する我慢くらべに従つて、会長を選出すること。

一、会を脱退したものは、他の全会員によって極刑のリンチに処すること。

一、右の誓いを破った者もまた右に同じ。

悪魔の申し児のような岡嶋は、計画通り、会長になって、嗜虐の第一歩を踏み出した。

A男はB子の足裏を二十回舐めよ——とか、産婦人科の医者とか——とか。女同志の裸角力——とか、

男の体中に女がマジックインキで落書きするとか、

両の鼻の穴にローソクを立てて、火をつけ誰が一番辛抱する——とか、

謂わば、会員が一樣に愉しみ、稚氣のある他愛もないものが続出したが、追々、岡嶋の好む、サドへと傾いて行くのを、次第次第に理性を失いつつある会員たちは、知らず知らず彼の行動に惹き込まれていった。

それが最初に現われたのは「みのむし会」と云う名称通りの遊びが始まった夜である。

くじで選ばれたU子が、会長の命ずる儘にパンティ一枚となり、臭気の放つドンゴロス袋に押し込まれた。首だけを出して彼女はスルスルと天井高く吊り上げられた。石油コンロが、吊り下ったドンゴロス袋の最下に置かれ、火がつけられた。熱気は徐々に上昇する。コンロを取り巻いて一同は、饒て始まる、みの虫踊りに合せて踊ろうというのだ。知性を放擲した彼等は、夫々に手を組み、体をすり合せて、じっと上を見上げていた。厚手のドンゴロス袋の底から、じわじわと熱気はかけ上り、袋の中のU子は尻をもじつかせ、脚を袋中で絡ませ、必死に熱気を避けようとした。それがさながら、み

の虫のうごめくように、袋がゆれ、踊り、馳て涙と汗でくちやくちやになった顔に恐怖を一杯にのせて、悲鳴をあげて、絶叫する彼女を、狂気にむせた踊りと騒音が、その絶叫すらをかき消そうとしていた。

コンロの火は消えた。U子は知らず、夢中で袋の中でうごめいてみの虫踊りを演じていた。哄笑と怒号――。

こうした狂態の中にも渴いた恋は生れる。T子と山野の間がそうであった。

T子が無惨に、岡島会長の嗜虐の好餌になって、散々玩具にされた時、始めて山野に激しい憤りが湧いた。

今迄、T子が散々鞭打たれ、又緊縛され、彼女の責めには麻痺していた山野も、その夜、岡嶋が選んだ遊びには胆をつぶした。

それは責めというより拷問であった。

T子は両手足を太い針金で絞られたのである。ペンチでギリギリ針金の先をよじつてとめ、柱で皮膚に深く喰い込む程、細鎖で括りつけられた彼女は、ちょっと身動きしても、千切れるように手足に疼痛が走った。

岡島は細いビニール線の先に小さい白色ランプを取付け、無理矢理、T子の口を開かして、ビニール線を嚥下させていった。一米――二米、食道を通して恐らく、ランプは胃に納まったに違いない。ゲテモノ見世物の「人間ポンプ」にヒントを得たのであろうが、修練の出来ていない者にとっては、これは死に勝る苦しみであった。線のはしをバッテリーに接続させて、不気味に岡嶋は笑ってパッと部屋の電気を消した。柱に絞られたT子の胸の下辺りで、微かに螢火の様に、ほの赤く、体内で、ランプは明滅していた。吐く息、吸う

息に、ランプは揺れ動いた。バッテリーから更に一本の線が引かれ、手足を絞った針金に岡嶋は線を接触させた。ビリビリビリと、その都度、T子はけいれんし、悲鳴にならぬ声を挙げた――。

食道からビニール線のとり出された後、岡嶋は最後の止めを刺すように、太い針金の尖端を鋭くとがらせたもので、T子の鼻障子を穿孔したのであった。

T子は悶絶した――。

山野は次回に迫る、会長選出の我慢くらべを、我慢でかちとって、岡嶋に復讐してやろうと心に誓った。

その日――

我慢くらべは、例によって岡嶋の提唱で、五〇〇〇の浣腸をし、誰が一番長く堪え得るかというのであった。

会員に次々と浣腸が始まった。

二分、三分――。五分で二人落ち、ついでバタバタと便器に走った。既に十個のおマルは排泄物で充たされ、残る二個に、岡嶋と山野は、顔をこわばらせ、必死に歯をくいしばって脂汗を垂らしながらこらえた。

十六分――遂に岡嶋はこらえ切れず、走ってしゃがんだ。

「俺は勝った――とうとう会長だ――」

山野は更に二分をこらえた。

「責めで一番苦しいのは、駿河責めというやつだ。T子の仇き討ちに俺は最後に、こやつをぶっ倒れるまでやってやる」

山野は勢いよく、会長の座についた。おどおどと一斉に見守る会員達の眼を意識して、山野はおもむろに岡嶋を指した――。

彼の命じる儘に、会員達、特にT子は積極的に、岡嶋を後手にし

っかり絞り上げ、俯伏せにさせると、次いで、両足を絞り、背中で引なりに引き絞って両手足を一つに縛り合せた。既に岡嶋の肩と腿は床から離れて、彼は苦しげにあえいでいた。

山野の命令一下、するすると天井から綱は下って、両手足を縛った縄を、太綱に結び合わせた。やっしよいやっしよいと掛声につれて、滑車はきしみ、岡嶋の体は宙に浮いて、くるくると廻った。

「T子、岡嶋を力任せに殴れ、打て——」

命令と共に、T子の手に握られて、チェーンは、ビューと風を切って、岡嶋に襲いかかった。忽ち皮肉は破れ、鮮血が滴たり落ちた。会員の一人一人、B子もA男もR子も、一再ならずこの嗜虐の鬼、岡嶋に責めさいなまれ、罵られて来た。入り替り、立ち替り、鞭が、竹刀が、細鎖が、岡嶋の体をズタズタにした。全身血まみれにして、岡嶋は息も絶えぐにヒイヒイと哀れな嗄れ声を振りしぼって泣いた。

ローソクの火、マッチの火が、彼の肌をあちこち焼けただらせ、飽く事を知らなかった——。

バッテリーをかかえて来たU子は、岡嶋の腋の下と足の先に針金を差込み、バッテリーの電流を最大限迄あげてタッチさせた。みの虫のように宙にうごめいて、ピクリピクリ岡嶋は死力をふりしぼって、みの虫踊りを演じた。

ボロ屑のようになって岡嶋は、やっと地上に延びた——。

「よし、会長が更に提案する——」

山野はここで声を切った。

この果てはどうなるかと、一同はシーンと、心の冷めなくなる思いで肅然とした。

岡嶋に行った私刑同然の行為に、彼等の嗜虐のおかえしは果され、地上に延びた岡嶋の姿に、人々は少しずつ麻痺していた理性がらさめつつあった。

「会長の命令で、今宵限り、この“みの虫会”を解散する」

わっと解放の喜びと拍手が一斉に湧いた。彼等は好んで会に入つた者許りであった。が……

当初の悪趣味の面白さは、いつしか恐怖と変じ、会則に雁字搦目に縛られて、どうしようもなく、不安と焦燥に明け暮れていたのだ。

今は恩讐を去って、岡嶋を人々は介抱し、衣服をきせると、外からの扉の開くのを待つ許りとなった。人々は廃人同様の岡嶋を支えて地下から表に出た。澄み切った月が、危険な“掟”あそびの解散を喜ぶように、三々伍々家路につく彼等を、柔かく照らしていた。

「案外なものですな。山野は引く手数多の工科大卒というので、立派に就職し、T子さんを女房にして、誠に神妙に暮していますよ——。昔からよく云いますが、遊ぶだけ遊んだ方が反って、あとよしと云うことになりそうですな。さあ——二人っきりの時は、こりゃ、何をやっていますかね——。世間に害悪の流さぬ限り、人生の退屈をエンジョイする意味で、偶にはアブノーマルな行為も、夫婦だと許されているんじゃないですか——。怒れる若者達の遊びは、“膝遊び”とか、“責めごっこ”とか、とかくもう我々はついてゆけませんよ」

ステッキ氏の話が終っても、一同妙に考え込んでしまいました。若さにもものい寄せた、そんな世界に飛び込んで見たいような——そのくせ空恐ろしいような——、複雑な表情で——。

頃合を見計って女給仕が運んで来た、熱い紅茶に何故ともなく、ホッとした溜息があちこちから洩れたのです。

第三話 トイレットに憑かれた男

「最近までのベストセラー、トイレット部長」の文中に、風流な一



で行けば、彼は、のむ、かく、のぞくの三道を一路邁進して来たのである。

彼は支那の古書をひもといて、世界の何億という人口が、毎日無駄に排泄している尿尿が、いかに貴いものであるかを知った。

中国に、仔豚を煮る名人が居たが、その丸煮が実に美味で、骨の

節がありましたかね。ええ、ここに一寸それを写して来ましたが……」

こう云ってスバル氏はガサゴサとポケットをかきまわすと、一枚の書片をとり出して朗読を始めたのでした。

——静かに坐る法悦の境尿したたる音を聞く

時ありて放屁ひびかい糞落つる音やがて聞こゆる

犬飼伝十郎は、最近、これを座右の銘としている。彼の便所遍歴は実に長い。齢に十六才を迎えて、実に二十年——。彼は二十才の春、緊禪一番この道に精進する決心をしたのである。下世話にいうのむ、うつ、かうのことわざ

ずい迄柔かであった。

主人は秘伝を誰にも明かさなかったが、遂に友人の懇望もだし難く、秘かに話したのによると、仔豚を煮る前、糞壺へたっぷり一日浸けておき、十分に尿尿の泌み込んだ仔豚を煮ると、短時間でこんなに美味くなるのだと語った。

伝十郎は最早じつとしておられず、早速、小豚ならぬ、若鶏を買って来て、これをオマルにとった己の糞尿につけて煮たところ、妙香えも云われず、その後、彼はいつも糞尿につけるようになった。流石これは当時新婚の妻には内緒であったが、病膏もうに入った頃は、フト妻の便に浸して見たいと思った。彼はいやがる妻に用便させて、まるで宝物でも手に入れた気持になって、若鶏をこれに浸した。妙香は益々かぐわしく、伝十郎をうっとりさせた。毎日毎日の用便をオマルにとれと云われて、妻は遂々愛想をつかして逃げ出した。

彼が二十八才の時である。

ある「いかもの食い」の座談会の文中、彼は又、偉大なる記事を発見した。

九州のある老人が、人糞の食い方を説明していた。その説によると、人糞の堅からず、柔かからざるものを天日に曝し、十分によく乾燥の上、これを摺鉢ですりつぶして、粉末にして、御飯にかけると、風味も可にして、塩加減よく、うまきものなりとあった。

伝十郎は独り身の気楽さ、ものともせず早速これを試した。旨きものと云う程でもないが、喰えぬ事はない。

伝十郎は、これが彼の好きな人気女優の便なら嘸かし旨かろうとそこはかとなき、無理な希望に身を焦していた。

三十才の夏、伝十郎は大陸に渡った。奉天（今の瀋陽）で三年間、過すうち、すっかりひとかどの大陸浪人になった。平康里や北市場に出入りするうち、妓楼で、王香姐という十七の若い娘と馴染になった。

満洲の妓楼が日本の遊廊と変っている点は、便所であった。花も羞らう姑娘が、便所だけは、誰憚らず、へきりも困もない。唯、板を長く渡した間に誇がって、女同志、向かい合って用便するのである。何かの拍子、伝十郎は便所へ立って、姑娘の用便中に出くわしたが、全然恥ずる色もなく、腰をゆすって、後ずさりし、前の席を、どうぞとすすめたから、伝十郎、まるで天国の様に思えたのも無理はなかった。つまりゆずった姑娘が香姐である。

妓楼の房には、それぞれ立派な小便壺が備えてあって、姑娘は庫子を降して、そのツボをまたがりサラサラと、いとも爽やかに、遊客の前で用便をする態と、何の恥じらいもなく、極く当然の事のように見せてくれる――。

かつて糞尿症で他界した大須賀子尉は、若返り剤と考えず、若い女の尿をのんでいたそうであるが、伝十郎も、香姐がさらさらとツボに用を足す態を眺めて、猛烈にこれを呑んで見たい慾望にかられた。

彼は一夕、旧城内に足を運んで、素晴らしく高価な、花瓶かとも思われるような、小便壺を買って求めて来た。

香姐は大喜びである。彼女が一日数回、否応なく用うるツボであれば、大切によく磨いて壊れぬよう注意していた。

それにしても、伝十郎が来る宵は、時々、壺中の小便が、跡形もなく綺麗に拭い去ったようになっていた事に、彼女は不審を感じ

じた。忘八且（楼主）の掛声で、一寸房を留守にした間に、伝十郎はこの若い娘の尿を、すっかり呑み乾してしまふのである。

香姐は薄々、氣附いていたがそれが決定的となったのは、房事での直後、香姐が、床へ降りて、壺へ歩み寄ろうとして、グーズを脱ぎ、跨がらんとした刹那、伝十郎は忽ち当りよって、自らの口にそれを受けたからである。

伝十郎は香姐の、この香ぐわしき尿をじかに呑んで、甘露の美味を覚えた。酒の匂いもなく、粗末に甘んじる妓女の尿は、透明に澄んで、妖しい香氣すら放っていた。

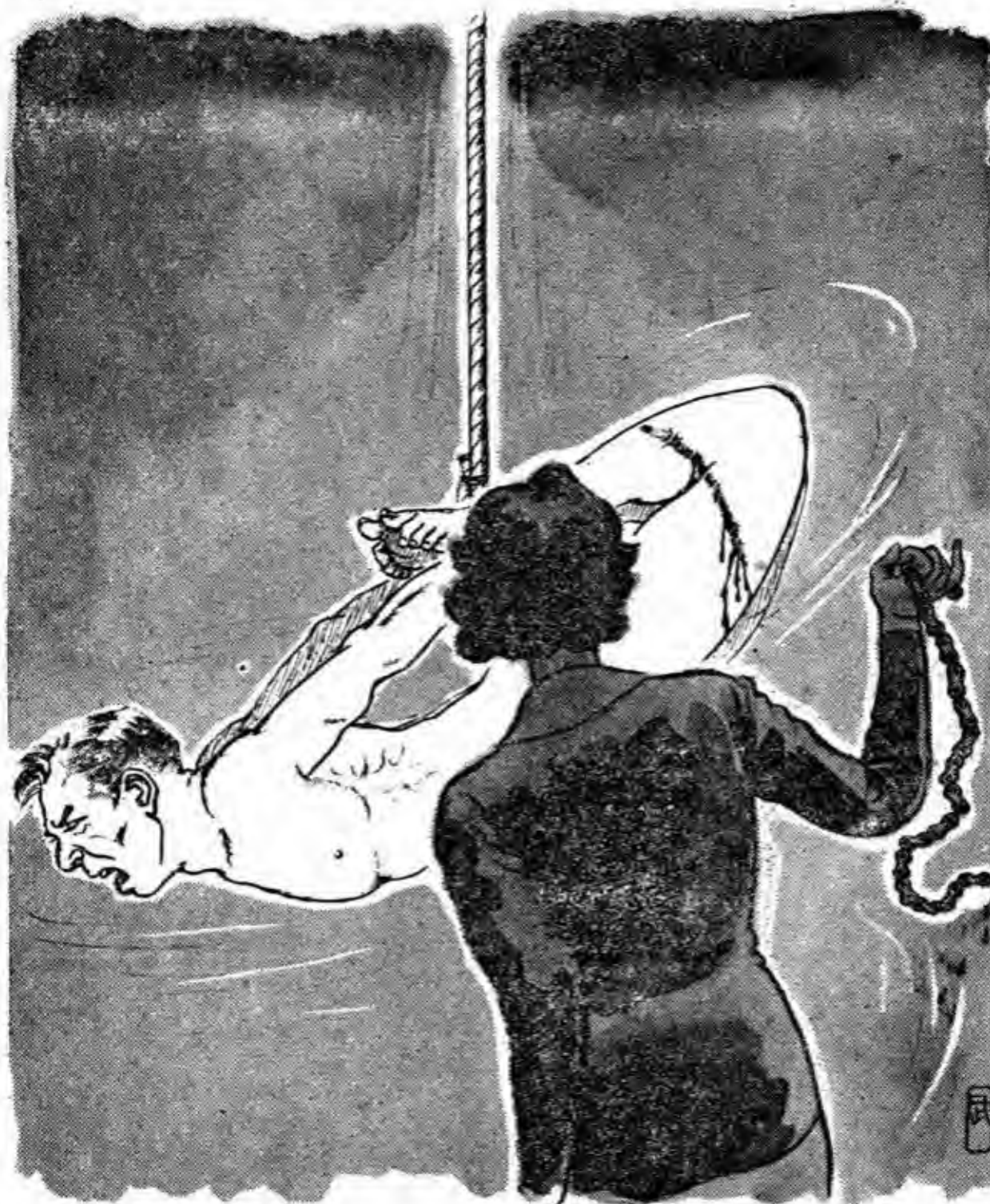
香姐が転売されて、突然、妓楼から姿を消した時、伝十郎は、身も世もあらず嘆き悲しんだ。平康里の妓楼を片っ端から覗いては、香姐の姿を求めたが、彼女が遠く牡丹江に売り去られたと知ったのは、大分経ってからであった。

応召中の彼は、流石に奇癖を出す機会もなく敗戦を迎えた――。

中支から内地へ戻った伝十郎を迎える者は一人も居なかった。

地下鉄のホーム、便所の傍ら等に、夜を明すように落ちぶれて、伝十郎の奇癖が又ぞう蘇がえった。

公衆便所の覗きである。と共に、定住した時のない彼にとって、便所内はゆっくりと寝



られる安住の地ともなっていた。

公衆便所の猥雑な画は日に日にふえても、彼にとっては左程読む事に興味なかった。イカレポンチかチョンガーのたれ言に過ぎないからである。

何気なしにふと気付くと、男同志二人が便所に忍び込むように入る事に時々ぶつかったが、女同志辺りを忍んで便所に入った時は、伝十郎の去勢されたような血が若者のように躍った。

彼は辺りに人影のないを見定めて、そっとその隣りの便所に忍び込む。

懐ろから碗をとり出す。碗の底の小さい二つの穴にゴム管を挿し入れ、聴診器のように耳にゴム管のはしを入れ、碗をそっと板壁に当てると、隣りの様子が仔細残らず、聞えてくるのである。彼の考え出した盗聴器である。

息づかいから、囁やきまで聞えてくる――。

久しく口にしない尿の苦酸っぱい酸味が口辺に蘇がえってくる。

二人は出たらしい。

伝十郎はそっと機会を待つ。人の気配のないのを確かめて、急いで隣りに忍び込む、ふんわかと女臭が漂っている。便器すれすれにかがんで、澁んだ底を覗いて見ても、尿の気配もなく、ちり紙が大きく丸められて、伝十郎の心を見すかすように、そっと屎尿の上ののっていた。

伝十郎は漸やく職についた。ビルの掃除人である。何と彼にふさわしい仕事ではなからうか――。彼はとりわけ、便所を丁寧に清掃したので、ビルの持主からは非常に喜ばれ、骨身惜しまぬ男だと、昇給した。

水洗便所は、何もかもを洗い流してしまう。しかし、伝十郎は決してガッカリしない。

ルーズな女事務員は、ギリギリ迄我慢し、慌てて飛込むと、勢よく放水し、水を流さず、その儘飛出し、さて、化粧にその数倍の時

間をかけて立去ってしまう。

伝十郎は、今は大威張りで女便所――ここでは婦人用とのみ記載されているが、便所に交りはない――の扉を開く。

フフフ、はねっ返りだが可愛い娘だったっけ。彼は独り言して、水洗便器の中心に、こはく色にたまった液体をいとはしむように手で掬う。伝十郎は、そっと彼女の顔を思い浮べ、さも旨そうに、一口二口、啜り込むのである。

水栓が故障で、うまく排水しない折は伝十郎の独り舞台である。

ビルの誰一人として、未だ伝十郎のこの性癖をしらない。

「おじさん、困ったわ。いくらペタルを踏んでも、お水出ないの――」

可愛いいえくぼのタイプピストに、さも羞かし気に囁やかれると、伝十郎は、湧き上る歓喜を耐えてわざとしかめっ面でこう云うのであった。

「仕方がないね。よしよしこれからバケツに水を汲んで流しておいてやるから――、今度からは、先ず試めしてからするんだよ――」
彼女は羞じらい顔に安堵の色を浮べ、後から、親切なおジサンにピースでもあげようかな、と考え乍ら、感謝の眸で小走りに職場に帰って行く――。

やつこらさ――と、伝十郎は逸る心を押えて、バケツに一杯の水を汲み、弾む心地で、ドアをあける。

ちり紙に隠れて、彼女の遺物は、太く逞ましく、二巻、三巻、便器内を我物顔にのさばっている。伝十郎は黄色く濡れしよばれたちり紙を、宝物のようにそっとポケットにしまうと、凝っと黄金色の健康な固体を見守っていた。踊んで便器すれすれに顔を寄せ、匂い

を充分に吸いこんで、そっと指でつまみ、惜しそうにツボに落しては、その姿の隠れ没する迄水を流し、丁寧に洗い流すのである。

醜女には、伝十郎は便所の故障を伝えてやる。階下の汲取口のある便所まで、醜女は地駄太を踏み乍ら走って行かねばならない。

伝十郎の秘かに好きな娘、優しい娘の時は、黙ってさせておくのである。そして、タイピストの一例通りの事が、次々と行われるのである。男便所には大きく故障中の貼札。

伝十郎は今や生甲斐を感じている。

娘の勢いのよい放水をきいては胸をときめかせ、特に可愛い娘の時は、その隣りを掃除し乍ら耳を傾けている。

年と共に伝十郎の、のむ、かく、のぞくは少なくなりつつある。

愛好者の記録

とやま・かづひこ

人間家具

何の気なしにテレビを見ていた。コメデ

イは山の場面。若い男女が四、五人。中の二人が婚約者。山の中で、未来の夢を描いて夢中になってしまふ。

併し、伝十郎のこの性癖は、彼の死ぬまで、恐らく変らぬ事であるう。

「世の中に、こんな変った男が、一人や二人おっても、かえって面白いでしょう。すっかり臭いお話になってしまひまして……」

スバル氏は鼻をピクピクさせて、紙片をたたみました。

風が出て来たようです。「寒こさせ、綴りさせ、寒さがくるぞ」このビルの谷間にも何処かでコオロギが、冬の訪れの近きを、こう鳴いて知らせているのです。

中天に冴え渡った日——。満ちたりた八人——クラクションの気兼にしたような断続音は、どうやらゴル氏の迎え車のようです。

静かに第二夜は更けてゆきました。

(第二夜おわり)

ここが玄関、ここが居間、ここがキッチンと、架空のスイートホームをつくってゆく。

山の中とて、道具が何もない。けっきょくおとなしい連れの二人が、二人の道具の代用となり、

「ここへソファを置きましょう」

と男が云えば、実際に床に手をつき、四ツ這いになる。女性が平気でそこに腰をおろす。

「犬を飼って……」

と、女の方がいえば、あわてて、男の一人が犬になり、チンチンをしてみせたり、吠えてみたり、あげくには、食堂の床に座って、喰べのこしのご馳走を喜んで頂く。この道具代用をさせられる男の一人は、ご主人の男性に借金があり、あまりバカなマネをさせられるので、

「イヤだよ……」

と云いかけると

「お前には貸しがある。イヤならここでスグ返せ」

とスゴまれ、イヤイヤ、命令に従うところなどは、いかにもマゾヒスティックだ。

さすがに、トイレや浴室は出てこなかった。だが、実際に、ビデオ、バス（清掃奉仕）ピスボット勤務、さてはトイレットペーパーの代用までさせられたら面白からう。

なにげないテレビの中にまで、「ヤプーごっこ」が入ってくるのだから、世の中はたのしくてたまらない。七月十日日曜日、昼の日本テレビにて――。

温泉にて

商用で、七月の下旬一杯を熱海で過すの

がここ八年来のしきたりになっている。

ことしも例年の通り七月十九日から熱海のKホテルに陣どって、関西方面の取引先の人々と、連日に亘って、真剣な取引に立会うのである。

さて、Kホテルのおかみは、いわゆる二号サンで、世の中の何もかも知りつくした人。

そのおかみの文子さんが、夜、涼みがてらクーラーのあるかづひこの室へやってきて、面白い話をしてくれた。

主人公はある老紳士。神経痛で、ちよくちよく投宿する上客の一人とか。

この紳士の神経痛療法が一風変わっていて、ぬるい湯に長い時間入ったあと、タイルに寝そべり、女中さんにたのんで、細いムチでやわらかくせなかを叩いてもろう。そして、ときには、いやがる女中さんに無理にせなかを、ところかまわず踏んで貰う。

「それがねえ、このごろは、病気がひどくなったとかで、顔まで踏ませるんですよ」

とは文子さんの話。

とにかく、湯上りのホテった全身を、かまわず叩かせたり、踏ませたりで、自分は苦しそうにウンウンいいながら

「おかげで痛みが取れたよ」

と、サッパリした表情で、多額のチップをはずむのだそう。

そのムチも、そつと拝ませてもらったがちょうど柳の枝のような、しなやかな細いムチで、

「あまりキツくは叩かんでくれ」

と注文するという。

実は、カマをかけて、文子さんから白状させたところでは、あきらかに、その紳士はM型で、ようやく聞きだしたところでは、ムチのさい中に、オケに、例のものをさせ、それをうれしそうに呑むという。

「病気によいクスリだから、とセがまれてキタナイとはおもうけれど、あたしも呑ませてあげるのですよ」

とうとう、文子さんは、恥づかしそうに声をひそめた。

これで読めた。その紳士、神経痛よりは、あきらかに、Mであり、コプロなのだ。

とかく歓楽地は、気のゆるいもの、ここにもまた一人同好がいた、とかづひこはほくそ笑んだことだった。



地獄絵

こんな夢を見た……。

芝、高輪在の由緒ある梅林寺の和尚、慈戒大僧正は、斯界稀に見る人徳者でありながらその蔭では住職に非るまじき非行の数々を犯している（らしい）との噂が立ったのは、つ

続 夢三夜

大映他品・切られと三郎より

牧 高志 文・画

い最近のことで、寺を周る町内界隈の床や女髪結屋では専らの評判であった。

勿論こうしたニュースバリニューのある噂話が家の中で、もてはやされるのは、のんびりと茶のみ時位なものであって、現今のように即刻テレビで放影し、生々しく真実性を伝えるのと違い、どうもおかしいとか、くさいとかの言葉をはさんで頭をかしげ、半ば笑い

ながらも話に尾ヒレをつける処に、天下泰平、大江戸三百年の匂いが結構、長閑に漂うていたものと見える。

「先生、早く書きあげて下さいよ。でないと特集号の瓦版に間に合いませんや……首尾は何ンだっというじゃありませんか。」

どうせ、おちは怪談話ナンで御座ンしよう。怪談話と云えば……、先生、近頃、梅林寺本堂横の俗にいう賽の河原の岩が夜な夜な、夜泣きするっていつてますぜ、如何です？ そんな処に思い切って題材を転向出来ませんか。

きっと面白いものが出来ると思っんですがねえ……」

「梅材寺と云や、先頃、心中の片われの何処かの娘さんが首をくくった浄雲寺の隣の古寺だが、近頃、色んなことが噂されてるようだね、今評判の神かくしの娘達と何か関係でもあるのかな。先ン達っても出入りの大工の熊公が来て寺の床下直しにひよいと、もぐったら真新しい湯巻をめつけたと云ってたが……石が夜鳴きするのも存外、色っぽい音色なんだろう」

「免に角、何かありそうですねえ。それに魚肉食禪宗坊主だからいいようなものの、ツル

ツル頭の和尚さんについて十日前、水も滴るような女房が嫁入ったって云うじゃありませんか」

「その女が茶屋か吉原の女郎上りかも知れないから別段泣かなくてもよい石が夜泣きするんだらうぜ」と判ったような判らないような話をしていううちにネタ取り瓦版の記者は有り合せの原稿をひったくるようにして帰ってしまった。

こうした場合、有名作家であると坐ったまま忽ち続きの情景が、さも関連あり気にスムーズに展開出来るのだが、文献の一も持たぬ三文文士は、せめて事実に基づいたサムシングでも把握しない限り、にっちもさっちも動きが取れぬものである。

何は兎あれ、世に云う噂話がたとい嘘八百であろうとも先ず以てこの眼で確かと探索する必要があるであろうと、例の如く有合せの羽織をひっ掛け、ぶらりと家を出るには出てみた……が、何才になっても色気は欲しいと見えて、脇道の吹上稲荷の下の色町を殊更に通ると、ピンツケの匂いが艶めかしく匂った。その結綿の娘達にもまれているうちに白い土塀のお屋敷町に出たが「淡路恵之介」と書いてある表札の門を右手に見て左折すると

すぐ浄雲寺の森が見え、続いて梅林寺の屋根瓦がズームレンズのように迫って来た……。

ロケーションには、もってこいの場所である。空は青く松は緑に、しかも無類の閑静さ。大かた、こんな処に噂さの種が秘んでいるのだらうと、白く「下乗」と書いた札の立った門をぎいーと開けると、妙に扉の片側だけがあいて、正面に曾って腰元三百人（は大げさだが……）を素裸にむいて飛び込ませた鯉取りの心字池が展開、序でに扉の今一つの片側を押しやると、池に面し母屋に続く千坪余の芝の前庭、成程これなら雪合戦はさぞや見たえがあるであろう……と判断するうちに、この両景を偶然に合わせると、70mmのシネマスコープになる。なるのは結構だが今回は借り物の將軍のお遊び事でなく、梅林寺を巡っての行状記を是が非でもかき出さなければならぬのだ。その梅林寺は今静かに眼前に横わって無気味な風に揺れている……。

ここで私はふらつき乍ら私に改めて云いかけた……。どんなに私自身の身体が動くかと云うても齡は既に四十の坂を越している。幸い背景は江戸の町内だから近代的センスは無くともよいし、今流行の洋式のムードが判らなくとも、私に取っては敢えて残念至

極だということにはなるまい——結論を披歴するならば、江戸前の感覚でこの推理的時代劇の一角を開拓すべくスローモーションの動作で探索の駒を廻せばいいだらう。若しこれだけを予め容認して貰って置くと三文文士でも存外この霞のような、綿菓子みたいな……つまり噂に咲いたアクシデントを融（と）くことなく描写することが出来るだらう。また出来なければわざわざ羽織までひっかけて床中から飛出した甲斐がないというものだ……。さて、思い付の超シネマスコープもさることながら、竜形の鬼瓦をいかめしく背負った梅林寺の正門、そして見渡す限りの内庭園、池と芝の原っぱがあるなら、それ相当の山の一つ位はあってもよからうと思ったら、果たせるかな、鬱蒼と茂った森を抱えた岩肌も露わな山、その山の向うに俗称、石また石の賽（さい）の河原があり、小徐で本堂につながっている。そのド真ん中に一際目立って大きな岩石が夜泣き石であるそう……。――

断って置くが、寺社奉行の許しも乞わず、ここまで無断侵入した私の風采はペンを懐に羽織こそ風に揺れているが紺のもも引きに確かに朱房の十手を腰に挿した岡っ引姿。ただ残念なことに肝心の雷を結っていたかどうか

で、颯爽たる勇姿をいささかスポイルしかかったことだけは本当のようだ。

処で、問題の夜泣き岩……（を前方にして）モヤモヤした噂の事件が果して解きほぐせるかどうか。そっと重い足を近づけてみる。どうやら陽も暮れかかって、身体をカムフラージュするのにはもって来いの、たそがれ時だ。信州浅間山山麓の名所「鬼押出し」の絶景も斯くありなんと思わせる——噴火岩を巧みにあしらったの賽の河原は近づいてみると思った程でもなく狭まかった。その砂利の上へ乗るとブカブカするような気がした。

おまけに、直徐二尺余りの水成岩で出来て、いるらしい夜鳴岩の頂点をぐいと掴んだら前後左右にグラグラと揺れた。今更、本堂の床下を探究たつて女の湯巻が転っている訳であるまい。薄闇に黒く突立った山（本当は築山であろうが）の外、一草一木何んの変哲もない風景である。

この平凡な風景が実は甚だくさいのである。昼間の墓所の如く、嵐の前の静けさの如く、そして柔和そうに見えるお面相の人間が結構、妊婦の腹を割いて後世に「安達ヶ原」という名所を残したことを見ても判る。

先ず咄嗟に思いついたことは即刻、寺院の



中へ侵って慈戒坊主を何処かで掴まえることだ。そのきっかけは一体どこからやるかと木蔭の下で低姿勢でしばし思案したが、別に名案が浮ばないままに、熊公の二の舞ではないが本堂の太い床の下にもぐってみた。少々窮屈だが、もぐったままで一晩中、夜泣石のメ

ロディーを聴くのも——一法。それはそれとして、熊公が拾いあげたという証拠物件は、どの道このあたりだろうと、夜目にもキラキラ白光りする蜘蛛の巣を払いのけながら前に進むと、どすんと板囲いの処にぶつかった。そのすき間から、かすかな灯が洩れている……

ドラマチックに言えば、ここまでが何やらを匂わす前編なのである。

このとりとめのない前編から身の廻りの空間を狭めて奥まった分野に突入する時、宛も行動にブレーキを掛けるようにトイレットに行きたくなった……危ふく場所柄をわきまえずに粗相をする処だった。どうやら後編は余程、気を付けないと安易に波乱万丈の中に巻き込まれる恐れがありそうだ。

板囲いの釘に眼を突かれぬように用心しながら灯の洩れている処から、そっと中をのぞいてみる。覗きながらも、わが身の露われるのを警戒しつつ、眼と耳とを緊張させた——甲斐があつて意外にも本能寺はこの真下、巧妙にも一大怪奇パノラマ絵巻が展開中であつたのだ。

それは、どうして身体が地下へ通ずる階段を降りたか判らぬままに地下室へ……と云つても、どうもただの地下室ではなさそうだ。正しくアトリエ……いや、そうじゃあない。米倉、そんなもんじゃあない。納骨堂か、飛んでもない。線香の一つも煙っていないスタジオ——確かに江戸時代なんだからスタジオだと開き直るのはおかしいが——端的に、しかも他人はいざ知らず、筆者好みの表現法

で申すならば「生き地獄現世編パノラマ式演戯場」とでも云つたらよからう。誰かが演戯をする。否、誰かが音頭を取って、あたかもそれが現実、さもこのようにあつたらうと、あの手、この手と品を替え物を代えこの淫虐三昧……橋の上の乞食は三日で止められぬというが、成程、人徳の裏では斯様なレクレーションが必要だったと見える。

町の髪屋連中の噂話を念の為、総合すると、何町の娘さんが祭礼の晩に居なくなつた。何町の何んとか娘のかんざしが橋のたもとでひろわれた。長橋祥姿の若い内儀が今の今まで寝ていた床の上に「確かに女体、只今頂戴、つくつく法師！」と記した紙切れが残されてあつたそう……などなど。所謂「神かくし」に逢つた女達は、想像に違わず、眼下にのけるのだ。確かに拐された若い女達に違いない。

余計な事かも知れぬがお産の折に妊婦の部屋を覗かぬ方がよいと同じように、腰の十手に催促されて岡っ引根生で今飛び出そうなものなら万事お終いだ。こいつは思い切つて眼を塞ぎ耳を澄ますに越したことはあるまい。苦しいだろうが、しばらく音で判断して、パアッと眼をあき、頤合を見て

「御用だ」と名乗り出ても遅くはないだろう……と考える。瓦版の特集版では後世にアップールするためには安易にタネ採り記者の口車に乗ってはいけない。

その視力を伴わない音のみの世界は、無気味なおおよそ次の通りであつたのだ……。地底からのし挙げるように響き渡るのは、そも慈戒坊主の声であろうか。

「は、ほう……、これはまた一段と見事じや。縄はやっぱり荒縄に限るようじやのう。今日の趣向は格別じや、この中に淡路恵之介殿のご内儀が居なさるそうじやが、それはどなたかな？ 愚僧にタテつくのはかまわぬが、この度は必要あつて御奉仕願わなければなるまい。あの花嫁衣裳のまま荒縄で縛られた色の抜けるように白い娘御は、とんとこのあたりで見かけぬ御仁じやが、何処でお拐い申した？」

「絵に致しますには、どうしても斯様な新入り娘がいります故、烏森かしずの糸問屋、いや百目ローソク問屋で御座いましたか、夜分押込みの上、ひっ捕え連れて参つたもので御座います。御氣に召しましたか？ 名は富士見屋の奈美とか申しました。それに今晚はどうあつてもこのメめて十人の女達の大詰——処刑の

場を描き上げなければなりません」

「柱に縛りつけ、天井から吊るすまではよいが呉々も泣き声が洩れぬようにな。何処かで岡ッ引が盗み聴きして居らぬとも限らぬ。女共の責めの表情は絵筆に乗るが苦悶する声は絵画に残らんで残念じゃ納……世間では何処をどう嘆き出したか知らぬが、天井の石を夜泣き岩と云い触らし居る。無理もないテ。この上が評判の賽の河原じやもの。」

処で……華泉、（どうやらお抱えの特約の絵師の名前らしい）換気抜けの岩穴から度々悲鳴が洩れるのも困るが、先達達のように湯文字一枚で逃げられるのも困るのう。」

「あれは、もう一步という処で取押え、ひどく糺明の上、大川へ流しましたで御座います」「可哀いそうじゃが念願の大地獄絵が完成するまでは生きにえになって貰わなけやならない。そなたのお



仕込みで、お夕……（夕顔の花魁の名だとすると吉原の女郎であろう）もああやって蓮の花の坐につけば生仏そっくり、夫唱婦随じゃろうがな……」

「流石は当代一流の名僧正で御座りまするな。仏の道と色恋の道とを備えていらっしゃる。六十にして惑わず、斯程の美女を花街からお連れ遊ばすなんて、何処までもお目が高

う御座りますな。

新奥さまも、さぞかしあのように裸でお苦しい……ことで……」

「何んと申した？ それは兎も角、処刑が済んだ女共の亡骸を賽の河原へならべ、法師山へ葬るのが事じゃて……。本当なら何しようとかまわぬが、皆んな生きとるからのう」

「その場は人目につかぬよう早目に素描の上他日改めて……」

「この一連の地獄絵が出来上ると次は極楽編となって、天女池畔鯉つかみの戯画や素裸芝庭まり蹴りの図が待つとるな」「左様に御座います。その節はいずれ活動屋がワンさと押しかけて来ることで御座いましょうに。それはさて置き法師山の土牢に押込めてある例の三人の身妊女はやはり、吊るしに使うんで……？ それなら最早や寺内のセットが一杯に」

「あれはどうやら余の胤を胎み居る女共じゃにつき身二つの上いずれは沙婆へ戻す考えじゃ。」

さアて、思わず余計なセリフが長く多く入り居ったわい。華泉ッ、

描くなら今の内じゃよ。炎もつけよう。煙も焚こう。今一度、女共をくくり直おせ。柱には厳しく縛えよ。吊るしは酷に、革の鞭は生肌のなかへ……そうじゃ、その色その筆先、苦悶じゃ、苦悶じゃ。現世の苦しみがそのまま尊い御仏の姿になるのだ。おお、そこな御仁！ 動くな紺のもも引の岡ツ引き。ペアツト眼をお明きなされ。何故、明るみに出ようとなさらぬ？

どうした？ どうなされた？ “御用”の声はお忘れになられたかの……？

ワハッハッ……、十手で拙者共を召捕りの上、女共の縄を解かれるか。それとも愚僧の仲間になって地獄絵の下絵を手伝い下さるか。御覧の通り美女ばかりで御座るよ。大江戸八百八町、ミス何小町、ミセス何新造の綺麗どころを、あのように無残に、このように後手に縛り上げての責め放題。仏の道は即ち閻魔大王の過去帳につながるのじゃ。

愚僧はここばかりは空なる経文は読まぬ——代りに無能なる女体を探るのじゃ。瓦版への筆稿料はおやめなされ。女の湯巻がくさいなら、捲くって存分お調べなさるがよい。大川は伊達には流れて居らんでのう……。

何故、黙っていなさる？ 拙者の人面獣心に癖易なされたか、それとも女の責め絵図に腰でも抜かせ給うたか。ワハッハッハッ……。眼を大きく開らきなされッ。さては……腰の十手は伊達で御座るな……。

「うるせいなッ、黙まれ！ 愚なる僧侶、いやつくつく法師の生ぐさ坊主め。事實は確かに突きとめた。神妙に“御用”……と云いたいんだ」

「そうだろう。そうお出でなさるのが岡ツ引式文士のやる筆法だ。その筆法で腰の抜けた貴殿が何をどのように書かれようと勝手だが、わしにはわしの言分がある。この道楽を始めたばかりを決して愚痴るのでも御座らぬ。そも拙僧は自他共に許す人徳稀に見る高僧。それが何故、善男善女が忌避する悪魔絵——「地獄変図」に魅せられ描こうとするのか。だが拙僧と絵師の華泉は決して婦女子の魂まで消した覚えは毛頭御座らぬばかりか、あくまで修道女として、しばしば隔離修業の道に就かせるのが本来の念願。ただ……」

「ただ……どうなされた？ 経文による心中の女性は辛うじて消却出来るが生白肌白脛の女性は身は高僧なりと雖も眼底より消却し能

わずとでも仰せられるのか」

「ウハアハアハア……、正しくその通り。ならば既に愚僧は貴殿で、貴殿は愚僧である筈、その愚僧の貴殿を貴殿自ら探って何んの為になるのじゃ。美化された責めの世界に日和見は有り得ず、また中立などと申す生緩いことは許されては居らぬわい。」

ただ、みだりに殺めず、痛めつけよとは釈伽も仰せられぬが、人間好む処に従い本能の趣くままに女性を緊縛し左の邪道を連行せんとすれば右にキリシタン、さればとて右の邪道に転んじんか左に仏陀さまでは浮ばれぬ。

お判りかな？ 判らねばそのまま一眠りせられよ。気を沈めてな……おお夜も明けように、アハッハッハッ……、華泉、色が褪せて来よった。も早や輪廓さえもおぼつかぬ……

「あなた、もうお起きにならないと会社に来ますわよ。ハイ、朝刊……」

第一面に総理談として曰く

——複雑なる国際情勢においては一国の中立は絶対に有り得ない——と書いてあった。

(続夢三夜、第一夜——完)

新稿 ある夢想家の手帖から

沼 正 三

第二章 奴隷志願

これらの誇り高く支配に慣れた婦人達にとつては、奴隷は一人前の男でも人間でもなく、理性を具えているので有用性の倍加した家畜であるに過ぎません。

——マゾヒストの手紙その二——

謹しんでお返事を差上げます。

奥様。私が従順な奴隷であることを期待していると貴女からはつきり仰言つて載きました今日こそ、私は自分が「情無くも」次のような人間であることを告白しないではおられません。生れながらの常軌を逸した素質のため、私は少年時代から、奴隷として美しい女性に隷属し所有されることを、自分の理想の型に出来るだけ叶った

女主人、即ち自分を理解してくれる気位高く自負心強い貴婦人から全く彼女の奴隷として見られ、畜^けわれ、扱われ、「古典的な原則と模範とに則つて」彼女の側近に仕えて、身の廻りの世話をしよう「何ノ遠慮モナク」仕込まれ使役されることを無上の幸福とし、羨むべき運命として、夢みて参りました。（この奉仕を）「トヤカク云ウモノハ呪ワレヨ」であります。この際、結局それが、どんな風な仕方になされるか。ということだけが問題となるのであります。女主人の前に恐懼することを叩き込まれながら教育され、彼女への畏敬と屈従と極度の卑下とに慣らされた奴隷に対して、女主人として要求するのである以上、女主人たるものは奴隷にどんな種類の作業でも請求しうると私は考えます。

古代ローマの主婦達、百五十年前のロシア、ポーランド、ハンガリーの貴婦人達、六十年足らず前の米国南部大地主階級の令夫人や

令嬢達、彼女達は成程婦人ではありましたが、自分達の身の廻りの世話をするのを任務とする奴隷や体僕が男性であることなどは少しも気にかけませんでした。彼等は女主人を美しく愛らしい女性として見ることを畏れ憚るよう、その魅力ある容姿に男性の視線を注ぐなどということを取てせぬように充分仕込まれていたのです。

これらの誇り高く支配することに慣れた婦人達にとっては、奴隷は一人前の男でも人間でもなく、ただつまらぬ物であり、家具であり、その所有に属する生命ある物体であり、理性を具えているので有用性の倍加した家畜であるに過ぎません。その唯一無二の使命は自分の所有者たる女性のために、可能と考えられるだけのあらゆる仕方、欲せられたあらゆる方法を以て彼女の福祉健康を図り、彼女の氣随氣儘の希望や要求に応じ、彼女の安逸に、又当然のことながら彼女の情欲や悦楽に奉仕することにあるのです。

女主人にとっては奴隷は一般にみじめな無であり、しかも他方では全てでもありました。無であると申しますのは、奴隷は女主人をば女であるがためにほんの少しでも遠慮させたり、氣兼ねさせたりすることができず、彼女は毎日の暮しに、人との交際に、道楽ごとや色々の習慣に、奴隷に対して婦人としての何等かの顧慮をなす必要は少しもなかったからであります。しかも又、奴隷は全てでもありません。即ち女主人が、奴隷を何かあるものにしたいと欲すればその欲したものに、彼女が彼を何かあるものに使用できると信じればその信じたものに、彼女が折々の氣まぐれのままに彼を道具にし又、材料にして何かあるものを作りたいと望んだものに、それが何であろうとあらゆるものになったのでした。

愚鈍で単純でいやらしく不器用な女奴隷なんかよりは、多くの場

合、主人の氣持の分る頭の良い学問のある奴隷が選ばれました。動植物の三自然界が産出する貴重な品々でも、驚くべき宝物でも、自分達にふさわしい貢物として、あたり前のように受取ってしまう氣難しく驕慢な貴婦人達にとっては、高い門地に生れ、精神的にも肉体的にも高度の教育を受けていながら、一身の運拙くして奴隷の身となった人類の一員をば、奴隷たる地位において使用し、自分の身の廻りの世話をさせるのが、いけないなどとは理解し難いことなものでした。

まことに最良のものでなければ、氣位高く自負心強い女性のお氣に召さないので。そして奥様、御手紙から拝察致しましたところでは、貴女は、御自身で自分の奴隷とお定めになった人間であるこの私が、同時に素性の良い者であって、決して人の召使たる身分ではない、ということ、非常に重視していらっしゃるようであります。が、このことは私の喜びとし、興味を感じるところであります。

奥様が、私の女主人となられますかどうか、私が奥様に奴隷として身を捧げますかどうか、これはもっとお互いがよく知り合った上で初めて確定されねばなりません。——私の理想に叶った女主人を憧憬する氣持が、奥様の御手紙を拝見して再び目覚めて参りました。御手紙にありますような積極的な御氣持が、御婦人の方から自発的に出て参りました場合、それがまるで電気のように私に作用すること著るしいものがあるのです。

私の理想とする女主人の型は、御承知の常軌を逸した素質に基いて、私というものの中に、自分に正当な権利のある所有物、即ち本来自分の奴隷たるべきものを認め、これを自分のものと請求する所の氣位高く自負心強く而して教養ある。そういった婦人なのです。



然し、私自身女主人を憧憬すること甚だしいのと同様に、私の方の奴隷にこそなりたいと願うような婦人は、彼女の方でも真に女主人たるの性質を持っていて載きたいのです。——中途半端なことや茶番狂言は一切、私は好みません。——私の女主人は単に女主人と名乗るのみでなく実際にも私の女主人たる気持でいて載きたい

のです。私に対して女主人としての自己を主張し、貫徹することができる方、女主人としての自覚を持ち私に畏敬の念を起させることが出来る方であって載きたいのです。——命令に対して盲目的無條件的に服従すること、及び彼女自身を尊敬して殆んど崇拜の域に達すること、これを私に義務とし第一の法律として課するような女性、

私はかかる女主人の奴隷になりたいのです。私は女主人が、最初から彼女に対する極度の鄭重さを私が身に付けるように、私をば仕込まれることを、又、彼女が自身の權威について指一本でも指されるのを潔しとせず。私から尊敬される女主人たることに充分気を配っていらっしゃることを望んでおります。

最大の敬意もて署名致します。

恭順なる奴隷（貴女が御望みならば）

× × ×

セルヴィリストが職業的女主人にあてて出した手紙。一〇章に紹介したものと共に、私の愛誦するところである。ヒルシュフェルトが世に出したもので、原文は一種の格調を備えた良い文章であるが、充分に訳し伝えられないのは遺憾である。殊に一番力を入れて書いている「奴隷は無であり、全てである」という一節でこの感が深い（附記第一）（附記第三）

ここには畜化空想も汚物愛好もなく、純粹なセルポイリズムがひたひたな熱意をこめて披瀝され

ているのだが、ある意味では最もマゾッホの正統に近いマゾヒズム心理と言えよう。「身の廻りの世話」と訳した所は、単に着物を着せたり食事の給仕をしたりでなく、入浴や上廁の際のインチメートなサービスをも含む意味である。「彼女の情慾や悦楽に奉仕する」と言っているのは、(能動的に仕掛けるなどは念頭になくも)要求されれば、男性としての御用(附記第二)もするつもり(の空想であるから、純粹のパジズムではないが、(この点につき旧第二一項附記第二参照)、その前段迄の貴婦人が奴隷が奴隷に対してその男性たることを無視する点の記述はパジズム的である。

「体僕」と訳したのは *Leibeigene* は、「奴隷」*Slave* と区別してこう訳するのが定訳になっている。尚片仮名書きは原文がフランス語の箇所である。

この手紙の内容は、後で度々参照の為引用することになるから、そのつもりで熟読しておいて欲しい。それ丈の値打のある文章であると思う。

附記第一 この前後の記述を読むごとに思い出す映画の場面がある。「怪船ニュームース」と題したと思うが、はっきり記憶ではない。とにかくハリウッド製三流作品で、イギリス貴族が無実の罪で爵位を剥奪され、囚人として植民地に送られ、そこで総督令嬢と恋愛するという筋書であった。主人公自体も令嬢附奴隷として浴槽の彼女に奉仕する場面があった(奴隷の時は裸を見せて平気なのに、恋人にし、殿方として遇する様になると、恥かしがって裸を見せなくなるのと対照的だった)が、私がもっと感じ入ったのは、身の廻りを世話するでも何でもない原住民の少年奴隷であった。安楽椅子や寝台の上には大きな団扇が吊っており、少

し離れて綱を引いて操作する仕掛になっているのだが、この少年奴隷は綱を引くだけの役だ。画面では(実生活でもそうだろうが)一言もきかない。令嬢がダッチワイフを股にはさんでしどけなく午睡している時にも、愛人と並んで横になって語ろう場面でも、確実に団扇は動き続ける。もう空気の様なものだから画面に姿さえ出て来ない。だが、寝室の一隅には、彼が立って(坐る設備はないから)両手で綱を引いているわけなのだ。寝台の二人がどんなことをしようが、彼はそれを見ながら団扇を動かさねばならない。令嬢にとっては、この奴隷は寝室の備品、暑気を払う道具に過ぎないのだ。

附記第二 女奴隷が主人に奉仕させられる場合と違って、女主人が奴隷を享樂する場合には当然、ある種の処置を必要とする。鋭利な陶器片でこの処置手術を行う前に、重さを測っているドミナの姿を帝政羅馬の詩人は描いている。

附記第三 印刷前に次の例を得たので、附記第一を補充しておく。サンデー毎日三四年九月二七日号、犬養道子嬢の「世界放浪記」第四回は、東アフリカでのホテルの一夜を語る。六尺豊かな黒人ボーイ(客が靴で歩くところもはだしで歩くのを道子嬢が「しずかで大変よろしい」といっているのはクレオリンの感覚である)が部屋に案内してから出てゆかない。鍵も呉れない。何とそのボーイ自身が鍵なのである。「男の方を見ると、これはとくに完全な鍵と化して、感情の全く動かない顔をひざの上にのせたまま、身じろぎもしない。立派な一人の人間に、こんなみじめな仕事をあてがったのは、やはり植民地という土地の歴史かと、義憤に似た気持が起ってくる……。」さすがの道子嬢も黒人の物

体視には慣れていないので、困ったらしいが、慣れた白人婦人客なら平気で着更えをし、熟睡してしまうらしい。「裸かになるから」といったら「そんな時こそ鍵が必要です」と答えたところ、黒人の視線に「男性」の目を感じさせなければそのとおりである。森の湖でシェパードに警戒させつつ水浴する場合と同じ様に感じ得れば良いのだ。白人婦人にはそれができるのである。

——印度やエチオピアでは、主人の寝室の前の廊下に、扇を守って夜を越す番犬的召使がいることは聞いていたが、婦人客の寝室の中で鍵になって「扇のところ」にうずくまって「夜を明す黒人ボーイがアフリカのホテルに珍らしくないことを、日本のレディの体験として聞き得たことは嬉しい。

第二三章 ある派出所会の設立案

派出所を使つて見たいと思います。

——高峰秀子（週刊新潮告知板）

マゾヒストが自分の空想を現実味に味う様な機会は、余程の幸運に恵まれなければ、訪れるものではない。卓抜な実行派黒田史郎氏の様に痴愚者の仮面を被ることで相手の女を安心させ理想的状況を積極的に作り出すということは、特技なき一般マゾヒストには企及し難いところである。

そこで多くの場合は、娼婦にこれを求めるほかない。西欧の都市にはマゾヒスト相手の職業的女主人（儲われドミナ）が沢山いることが、独逸、仏蘭西の文献に見える。北独ハンブルクなどは彼女等の黄金境と称せられ、各種マゾ類型に応じそれぞれの専門ドミナさえた位である。戦前の資料であるが、クルト・シュナイダーの研

『マゾヒズム特集号』

定価 三〇〇円
(特価 一五〇円)

満天下Mマニヤ待望のマゾ特集号愈々発表！

◎口絵並にグラビヤフォト、本文の隅から隅に至るまで、総べてM派にて独占した「マゾヒズム特集号」の決定版、目下分譲中、

——巻頭口絵——

「マゾヒスチック画集」

滝れい子画

(マゾ画力作八葉)

生きリフト

稽古まわし

矮人哀歌

執事の祈念

美妓の嘲笑

揺がぬ重庄

道場の鬼百合

意趣返し

グラビヤ、セクション

「マゾ・フォト・ギャラリー」

ドミナのポーズ

征服者の嘲笑

珍獣出現

飼犬嘲弄

ドミナの専用マット

服従の宣誓

怠慢奴隷譴責

室内馬に好適

屈服の瞬間スナップ集

——本文——

二百字讃歌……………真砂十四郎

あわれ誠一郎……………日本文古六

捕虜の洗礼……………出久 信男

美しい暴君……………馬族 保

あるマゾ男の告白……………昭吾

幸福隷属の告白……………鐘坊 巡

祭壇に君臨する脚……………馬族 保

ヴィナスの重石……………真砂十四郎

囚獄の思い出……………嶽 牧一

美しき悪魔の哄笑……………真木不二夫

実験室にて……………角田 平八

牛乳風呂の饗宴……………馬族 保

サジズムの女……………才 昭吾

被虐哀歌……………真金鍛次郎

挿絵・カット……………北原 純子

杉原 虹児

究報告によれば、登録娼婦七〇人の中にサド女性一人、マゾ女性二人という数字が出ている。独逸人にマゾヒストの多いこと、比率上もサディストを上廻ることは、広汎な資料（「変態性欲病原論」二冊）の上に立って、プロッホの確言するところであるが、それが娼婦中のサド女性の数字に反映していると言えよう。

日本では事情が異なる。マゾヒストは絶対数も比率も劣勢で、従って娼婦の方にも彼等を客とする機会が少く、職業的女主人などは発生する余地がなかった。四十年前、谷崎は自伝的作品「饒太郎」において、慨嘆した――

西洋の Masochisten はかかる註文に応じるやうな Prostitute を捜し出すのに必ずしも困難を感じないらしい。維納でも巴里でも伯林でも欧州の著名な大都の夜の港に色を鬻ぐ娼婦の間には Foot-fetichism とか Flagellation とか、その外さまざまの Masochisten に関する悪戯が、物好きな色恋の一種の形式として普通に行われて居るらしく思われる。之に反して不幸なのは日本の Masochisten である。東京に生れて東京に育った饒太郎は、此の都の暗黒面の隅々までも可なり詳細に通曉して居る積りであるが、いまだいかなる階級の娼婦の間にも、Masochism を了解し若しくは男の要求にまかせて残忍な悪戯を演ぜんとする程の豪胆なる女を見ない。

この嘆きが今も通用することは、杉本真三氏「犬の生態」（三三年一月号）の、どこに行っても「ヘンタイか」と娼婦達に相手にされぬ悩みを語った条りでも分るだろう。勿論、戦後に至り。事情は改善されて来ている。谷崎が東京中に一人しか見附けられなかったサド娼婦を黒田史朗氏は新宿の青線赤線文で三人指摘し得た（三三

年四月号「いざない」）。明らかに、時代の進歩と共にサド女性の比率が増大したのである。

然し、売春禁止法は彼女等を又地下に追ってしまった。考え様によつてはマゾ・ブレイはアパートの密室の方が適しているの、私娼化した方が職業的女主人としてはふさわしいとも言えよう。女神にも獣にもなれる、こうした美女を相手の惑溺――谷崎が「黒白」で描いた様な――は、確かに魅力に違いない。だが、職業的女主人の専門化がない今日、私娼からこれを見出すことは、公娼制度下においてサド女性を発見することに幾層倍する時間と費用とを要するだろう。もっと楽な方法はないものか？

一方、本誌上に続々登場されるサド女性のことも考えねばならない。彼女等を娼婦視することの非は言うまでもないが、現実に、そう見られる危険なしに、彼女等は嗜虐の欲望を満足させ得るだろうか？彼女等の為にも何か新しい組織が欲しいところである。

そこで、私に一案があるのだが、その前に先ず、派出夫という新職業について少々述べたい。

佐々木邦に「昭和派出夫会」という短篇があったが、失業サラリーマンを奥様、お嬢様の話相手にさし向けるという文のことでマゾ味はなかった。ところが、戦後登場した秋好馨の「ますらお派出夫会」のアイデアは、派出夫を派出婦の競争者として、家事手伝をさせることにより、召使願望者にズバリと訴えるものを持っていた。雑巾掛けしている派出夫を、奥様とお嬢様が火鉢で茶を飲みながら「今度は良い人が当たったわね」と話し合っている図……セルヴィリ

ストの夢想する場面がそこにあった。

終戦後、間もなく出た時には、私など注目した（手帖旧第四項）

に拘らず、流行せず、映画化も成功しなかった。然るに、昭和三〇年二月以後文春漫画読本に再録されて急に反響を得、再映画化も好評なら、週刊読売、太陽等への連載も始まると大成功を収めた（雑誌四八、一〇六、一〇七参照）。ここに戦後十年の女権伸張の一影響を見て取れることは決してマゾヒストの独断ではあるまい。男は職業、女は家事という古来の大原則が、両性平等を保障する憲法下、女性の社会的進出の前に大きく揺いで来ている。この世相を背景に派出夫のアイデアが受けたのだ（尚雑誌二一〇参照）。権力に目覚めつつ尚現実の制約から家事に躊躇せねばならぬ婦人達は、男を女中の様にコキ使うという設定に、男性への優越と家事からの解放と二重の夢を見出したに違いない。

その夢が夢でなくなり、現実には派出夫会が誕じたのだから、嬉しい。虚構が現実を創造した見事な一例である。婦人雑誌のグラビア（例えば婦人画報誌昭和三二年九月号には鎌倉サーピス社という派出夫会の実態紹介がある）などで、読者諸君も、これは御存じであらう。まだ数少しいし、潰れてしまったのもあって、流行っているとはとても言えないが、とにかく、漫画のアイデアに過ぎなかった派出夫が、新職業として世間に認知されたという事実が



大切なのである。

私の提案しようとすることは、最早お分りであらう。マゾ男性を組織して派出夫会を作ろうというプランである。唯、その実現へのイニシアチヴをサド女性に取らせようとするところに、新提案のミゾがある。

ますらおに縁の深い万朶の桜と、毛皮のヴェヌスの女主人公 *anda* とにあやかっ、会名は万朶派出夫会としよう。本誌上嗜虐性を自覚自称せられる有能なる女性群が篤志家のマゾヒストの出資を待て会社を設立するのだ。勿論

資力あるサド女性は歓迎する。将来の増資分などは女性株主だけを予想しているのだが、設立の時にはマゾヒストで資力のある奴はできるだけ利用してやるのである。経営は勿論、女性一週倒で、社長、副社長以下、全重役を嗜虐女性で占める。男性株主と応募者の中から女重役の数の三倍ないし五倍の数の派出夫候補生を社員として採用し、エプロンを制服として支給し、各重役の私宅に住み込ませて家事百般の実地教習を授ける。訓練は猛烈、厳格、彼女等の嗜虐趣味を満足させるに足る。正常者は落伍するが良い。多少ともマゾ素

質ある者はこれは耐えて立派なマゾヒストに仕込まれる。前記の様に(二一章)召使願望はマゾ段階としては初歩的軽度のものであるから、ここ迄馴致することは別に困難でないのだ。訓練中は各重役家庭に順に廻して、各種の家風に馴れさせ、将来の派出夫活動に備えさせる。

七人の女重役が皆、数人の社員を訓練し終ったら、会社業務を正式に開始し、派出夫の派遣を行う。訓練中につまらぬ男の見得(男性的自尊心)など完全に叩き出されている連中だから、サービスは平身低頭、奥様連の自尊心を操るし、仕事振りの訓練を反映して極めて優秀である。今迄の派出夫とは

比較にならぬ好評、注文殺倒、面白い程儲かる。派出代金は会社に入って、各人には月給を与える。女重役は男社員より遙かに高級だが、男達には不平はなく、また許されもしない。重役家には日直、夜宿の当番で無料奉仕せねばならぬ。株は次第に女重役名義に書き替えられてゆく。増資分も公開されず、嗜虐女性だけに割り当てられる。会は膨れ上ってゆくが、それだけ女性が男性を搾取して富んでゆくのである。

名が知られるにつれて、運営は楽になる。志願者の群からマゾ素質者を選び抜いた苦勞は過去のものになり、入会志願者は初めから



会の性格を知って、ここに自分の天職を見出そうとしてやって来るマゾヒストが主になって来る。彼等としても金を使って私娼の中に職業的女主人を捜すより、ここで社員になって、金を貰いながら欲望を満せる方が好ましいのだ。寄宿舎ができて、派出仕事のない間は女舎監の下で訓練される。それに、制服、定食。こうして衣食住を確保されれば、薄給でも安心してこの会に飛びこめる。定年はないし、かりに派出仕事ができなくなっても、幹部の女社員の家で恩給代りに飼育殺しにして貰えるのだ。勿論、本職を抛つ決心のつかぬ男もあろう。彼らの為にはアルバイト部があって、訓練が授けられる。唯一夜の満足を求めるだけの者の為には、入社志願者テストの名目で、毎夜、責行事が行われている。

サド女性も、評判を聞いて集って来る。家事教授の出来ぬ女はいから、誰でも男を教えられるだろうが、やはり、美貌と年令の面で制限する必要があるだろう。彼女等はすべて幹部社員たる訓練員兼株主となって、虐待の快楽と搾取の利益に均霑し得る。

入会志願者がマゾ男性ばかりでは、じゃじゃ馬馴らしの本当の楽しみは味わえぬと不平を洩す女性も出て来るかも知れない。そうい

臨時増刊号

長篇サド小説『青い廃院』

◎弓沢、永山の両作者が、満天下の斯道愛好者の熱望の応え、堂々と放つ二大異色作品！

弓沢俊二郎作、四馬孝画——「青い廃院」——
永山久美雄作、杉原紅児画——「与那国奇談」——

残部僅少、只今お申込を。定価二百円（特価百円）

う女性の為には債務奴隷を手に入れるのだ。会社資金の一部で金融業をして、高利で貸し附ける。債務者にペコペコ低頭させる丈でも良い気持だろうが、支払不能の者が出たら、入会して派出夫として働いて返済する機会を与えるのだ。そして例により厳格に訓練する。これはマゾ素質のない者をマゾヒストに仕込むに等しいから、相当な昂奮を与えるだろう。

儲かる商売と分ると、類似の組織が他にも発足しよう。負けぬ為のサービス強化が必要になる。『どんな酷使にも堪える』為の訓練が行われる。それに、上流階級（在留白人を含めて）の人々の精神的贅沢を満足させるには、従来の派出夫的な家事奉仕では駄目なのだ。便所を定位置に、主人一家の尻拭きを専門にするトイレマンや、更には、呼ばれれば尿瓶を抱えて飛んで行き、便所迄足を運ぶ労を省かせる重宝なポットボーイが上流家庭に常備される様になるだろう。『犬と一緒に飼育できる』という標語で登場した下働きと靴磨き専門の下男は、宣伝を裏切らぬ様、訓練中の三カ月間、本当に犬小屋で起居し、残飯で生活し、乗馬訓練員（総指導は乗杉常務！）から毎日乗り廻される。成熟した女性を乗せて馬場を一周でき

る実力を持てば、坊ちゃん嬢ちゃん方のお馬になっても芝生を幾廻りもできようというものだ。この子供達は成人しても人間馬に乗ることを楽しんで、競馬大会などを催す。自分で自分の尻を拭いたことのない人達が騎手になって、万葉会厩舎の優秀馬が出場……

この時代になると、上流階級からの定需要が確立するから、会の経営は愈々軌道に乗ることになる。

こうして、万葉派出夫会は、天下のマゾ男性とサド女性の福音となるばかりでなく、新しい精神的娯楽を上流階級の人士に提供する。………楽しき未来幻想。

問題は、ある程度の規模ある恒常的組織として、この派出夫会——特に訓練施設——を発足させることにある。一旦、成立して終えば、新陳代謝する人員を補給することは、本誌マゾ読者の数から考えても決して無理ではなからう（附記第二）

一つ、大切なこと。訓練員は派出夫要員に決して肉体的交渉を許さぬことだ。派出夫はパジストでなければ派遣された先で醜聞を起す。だから、訓練中もその点は潔癖にやる必要がある。さもないと売買行為（初めは株主として出資させるから）と見て取り締まれる口実を与えることになるのだ。逆に、肉体的交渉さえなければ、警察の目を恐れる必要は少しもない。家事教授は立派な名目だから、鞭を使って厳格にやったって差支えのある筈がない。トイレ訓練や家畜化訓練に至っては、訓練員とは一層、人間的な心の通いが断たれるのが本来だから、訓練員の方でその線さえ堅持すれば、男の方がいくら昂奮してもこれを風俗壊乱視することはできない。上流支配階級の風俗に喰い入って終えば、警察はもとより一指も触れ得なくなる。

こんなプランである。後期の発展の空想はさておき、小規模の発
足自体は、単純なマゾクラブ設立案に比して（マゾを正面から名乗
らぬだけでも）遙かに実現性があると思うのだが。
——現に、空想漫画「ますらお派出所」が空想に終らなかったで
はないか（附記第二）

附記第一 三一年七月号読者通信欄、横山道生氏の次の文はセ
ルヴィリストの派出夫空想の一例である。——二人の中年の女性
が街路の並木の下で偶然ばったり出逢った。エプロン姿で買物籠
を提げたマダム風の女性が、黒いヒールに洋装の女性に「最近、
女中が国へ帰って困ってしまったわ。今日もこれから市場へ買物

に行くところなのよ」とこぼしている。すると、洋装の似合う女
性は、軽く笑って「これはちよっと秘密なのだけど、私、今、男
の家政婦を雇っていますのよ。年中無休で、それで給料なしな
の」と、誇らしげに話す。マダム風の女性は、不可解ながら、自
分もそんな家政婦なら、今からでも雇ってみたいなあ、と……

（以下略）

附記第二 若松宏「最良の仲人」（昭和三十三年一〇月一二月号）
は、サド女性重役の下にマゾ社員募集が行われる点、本章と類
想の作品であるが、本章はそれと独立に書かれていたことを附記
しておく。

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判（6×6.5寸）印画紙焼付

各組一枚一組（全部送料共）

Y1	全裸荷造縛しほり	（大塚啓子）
Y2	乱れ黒髪裸見本	（大塚啓子）
Y3	観念した胡坐	（大塚啓子）
Y4	見事な飾り物	（大塚啓子）
Y5	浴室股間縛り	（大塚啓子）
Y6	麗しの緊縛裸像	（愛川悦子）
一組一枚		八〇円
五組五枚		三〇〇円
十組十枚		五五〇円
二十組二十枚		一〇〇〇円
三十組三十枚		一四〇〇円
四十組四十枚		一七五〇円
五十組五十枚		二〇〇〇円

Y7	逆十字後手縛	（愛川悦子）
Y8	裸身の補われ人	（愛川悦子）
Y9	逆エビ後手足吊り	（愛川悦子）
Y10	全裸ねの縛り	（田中芳代）
Y11	なまめかしき緊縛	（花坂道子）
Y12	全裸フトンむし	（大塚啓子）
Y13	蒲団貫通またぎ	（大塚啓子）
Y14	初々しき裸全身像	（岩井知子）
Y15	ヌード股間しほり	（絹川文代）
Y16	全裸脚股間縛	（絹川文代）
Y17	セーラー後手吊り	（川辺砂登子）
Y18	庭園ヌード縛り	（絹川文代）
Y19	全裸全身裸自慢	（愛川悦子）
Y20	豊満双丘くらべ	（愛川悦子）
Y21	追いつめられた裸女	（愛川悦子）
Y22	遅ましきヒップ	（愛川悦子）

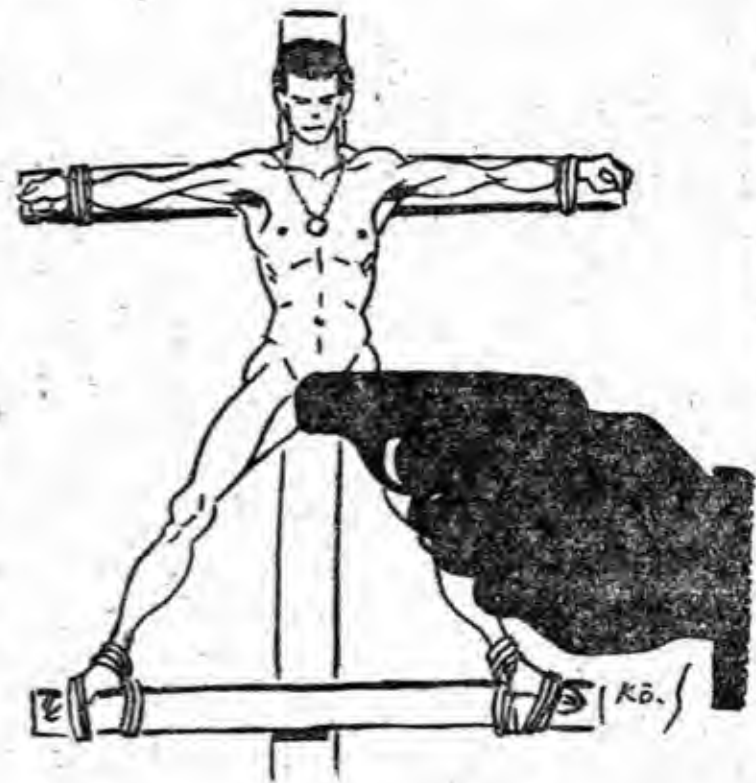
Y23	大の字晒し	（絹川文代）
Y24	縛り正面正坐	（絹川文代）
Y25	胸のポリウム自慢	（愛川悦子）
Y26	麗人受難の巻	（益田房子）
Y27	もつこれで許して	（益田房子）
Y28	むしられたスロース	（花坂道子）
Y29	全裸縛りの全身	（平野笑子）
Y30	鎮座する縛り女神	（平野笑子）
Y31	囚女後手柱縛り	（大塚啓子）
Y32	全裸強烈股間縛	（絹川文代）
Y33	ベッド縛りのポーズ	（絹川文代）
Y34	開股一番一直線	（絹川文代）
Y35	縛り腰巻色模像	（絹川文代）
Y36	亀田股間縛正面	（絹川文代）
Y37	全裸椅子またぎ	（田原美佐子）
Y38	妖艶闊のしほり	（絹川文代）
Y39	椅子またぎ後手	（田原美佐子）
Y40	強烈第手首縛	（田原美佐子）
Y41	ハタ力縛り人形	（絹川文代）

Y42	濃艶ハタ力縛り	（絹川文代）
Y43	あられもなき開股	（大塚啓子）
Y44	全裸変形股間正面	（大塚啓子）
Y45	後手立木吊り	（村井知可子）
Y46	全裸後手壁ハリツケ	（愛川悦子）
Y47	全裸腰台腰恥責め	（花坂道子）
Y48	振袖令嬢後手責め	（花坂道子）
Y49	長襦袢後手しほり	（花坂道子）
Y50	ワンピース縛り	（花坂道子）
Y51	手吊り裸身の乱舞	（絹川文代）
Y52	柱縛り観念の図	（絹川文代）
Y53	不行儀姿態の美	（絹川文代）
Y54	カメラに晒す全裸	（大塚啓子）
Y55	緊縛女体の開陳	（絹川文代）
Y56	膨隆突出した臀部	（絹川文代）
Y57	前手錠全裸像	（大塚啓子）
Y58	股間縛開股の絵	（絹川文代）
Y59	聖壇のさし者	（絹川文代）
Y60	エビ責めの表情	（絹川文代）

新連載小説

狩 獵 者

第二回

佐さ 度ど
新川 工・画 槐かい

鞭

ギギイと不気味な音をたてて鉄扉が軋み、左右から腕をとられた木島鉄次は、いやおうなしに、その中へひきずりこまれた。

ここで、読者の便宜のために、司慎之輔の設計した世にも奇怪な地下室の構造について少しく説明することにする。(図面参照)

木島は、寝室からの階段によって、まず控室に連れこまれた。その階段と向きあった位

置に、主として、山科たちの出入に使われる階段がある。

裸にされた木島は、一番大きい第一拷問室へ入れられたわけだが、第一拷問室には、控室からの扉のほか、三つの扉があり、それぞれに別の部屋へ通じている。

監禁室には、猛獣の檻のように鉄格子がはめてあり、長時間の監禁の場合を考慮して便器が据えつけてある。

監禁室からは、第二拷問室に通じていて、

そこには、水責のための装置があり、ガラス張りの巨大な水槽が眼をひく。

準備室には、種々の拷問用具が格納されている。

最後の処刑室には、死体を運びだすための通路が、物置から庭にぬけるようになっていた。

監禁は別としても、拷問や処刑は元来、刑罪として存在するものである。だから、この地下室が、私刑のためだというのなら、まだ

領けないでもないが、恐ろしいことには、犠牲者にとつてまったく無意味な拷問がおこなわれ、あまつさえ、処刑がなされるのだ。

第一拷問室には、壁や床に、幾つかの鉄の環がついていて、はじめて見る者には、なんに使うためのかの判断に迷う。

天井にさがっている滑車の用途は、だいたいの想像がつくが、ワイヤー・ロープの先の岩乗な鉤は、もし人間を吊りあげるとしたら二人や三人は楽にかかりそうだった。

木島の左右の腕は、杉田と南に掴まれたまま、無理に手首を合わされ、山科がロープで括って滑車の鉤にかける。

(吊られる！)と覚ると、木島の軀に戦慄が走ったが、腕がいったいに伸び、爪先立ちになったとき、

「よし、止めろ」と、慎之輔が、ハンドルを操作していた南に合図した。

「しばらく休息させてやろう。そのうちに薬も醒めてくるからナ」

上衣なしで、ワイシャツの上にポンチエロを着た慎之輔は、挟ったように深い木島の腋下に、悪戯っぽく、たばこの煙を吹きつけて云うと、今度は爪先に体重をかけた木島の、腿や尻の筋肉がヒクヒクと小刻みに痙攣するのを

指でつまみ、

「ホウ、固いナ。これなら耐久力もあるだろう」と楽しそうに呟いた。

完全に吊られているのではないから、手首の痛みはさほどではなく、裸で半吊りにされている屈辱も、それを堪える「男らしさ」の自己満足が、やくざの彼には、習性みたいになつていたし、少しずつ麻酔の効力がきれて、体力がもどってきたせいもあってか、木島は大分、気持ちに余裕ができていた。

準備室から、山科たちが、めいめいに得物を持ってでてきた。山科が調教用の鞭、杉田が水を含ませた麻のロープ、南は革のベルトと、いずれも鞭ばかりである。山科は別に一本、乗馬用の華奢な鞭を用意していて、慎之輔にわたした。

(なんだ、鞭か……)

口にはださなかったが、木島は、内心たかをくくった。それまでは、どんな目にあわされるのか判らなかつただけに、かえって拍子ぬけの感じさえした。外国映画などで、凄惨な鞭打ち場面を何度か観てはいるが、実際の鞭の味を知らぬ木島には、恐怖や苦痛が実感として湧いてこなかったのだ。

木島のふてぶてしい表情を見た慎之輔は、

ニヤリとして、

「木島。おまえは不死身を自負しているが、己の体力の限界を知るにはいい機会だ。どこまでおまえが鞭に堪えるか俺も楽しみだよ」

「耐久力のテストだな」

木島は、うそぶいた。

「まず、最初は小手しらべだ。南、ヤンワリと撫でてやんな」

慎之輔に云われて、南が進みでる。

三人は、邪魔にならぬていどに離れると、

木島を見守った。

パシッと、痛烈な音が鳴る。

瞬間、刺すような痛みが走ったが、すぐに消えた。

張りのある木島の皮膚は、むしろ鞭を跳ねかえす感じだった。

南のほうが、逆に歯をくいしばり、さらに力をこめてベルトを振りおろす。

筋肉のコリコリと締った木島の腹に、薄い痕が斜めに条をひいたが、木島の顔には、なんの苦痛も表れない。

南のベルトは、ところかまわずに飛んでくる。まったく無防備の木島は、ときに「ムッ！」と思わず呻くが、それよりも、連打をうけて不安定な軀が揺れるたびに、手首のロー

プをひかれるほうがこえた。しかし、それとも、堪えられぬ苦痛ではない。

ベルトの轆ぐらいでは平気な木島の強靱な軀にも、弱点のあるのを知った南は、いきおいそこに攻撃を集中する。それを見た山科や杉田が、野卑な言葉で囁きたてた。

「クソ！」

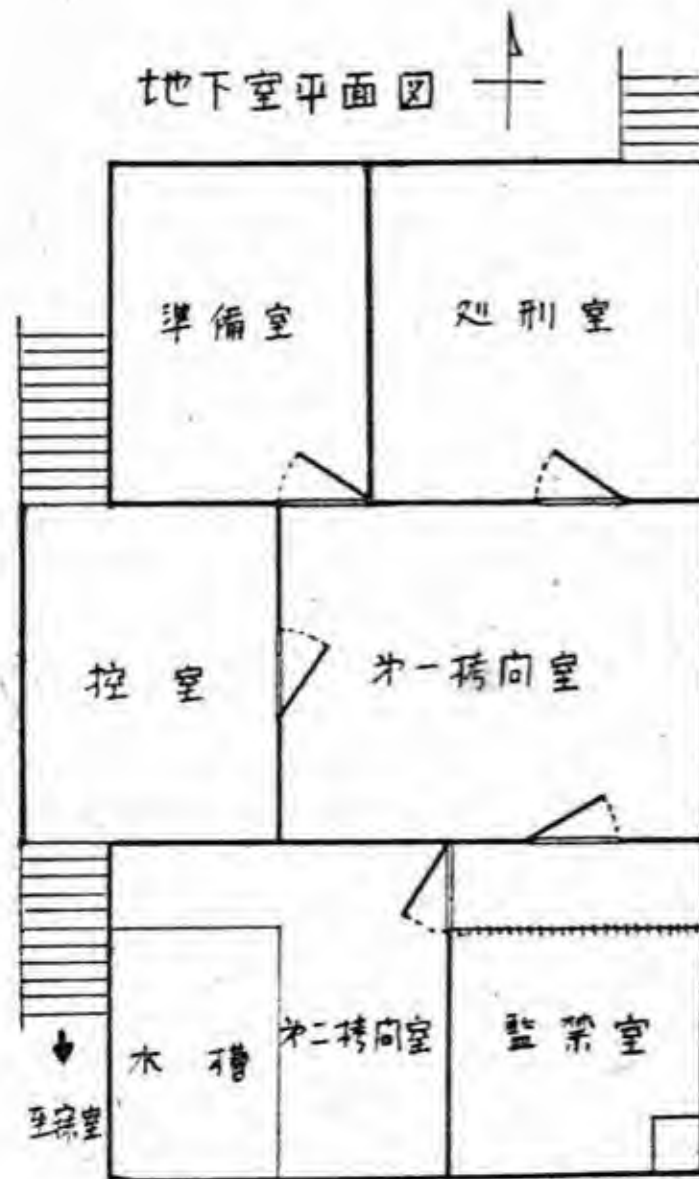
顔をしかめた木島は、自由になる脚で南の股間を蹴あげた。ほとんど、それは、効果のない反撃だったが、不意をつかれた南は、ちよつとたじろいで、轆を休めた。

「なかなか元気だな。オイ、脚も括ってしまえ。そうしたら、次は杉田の番だ」

慎之輔が云うと、また蹴られぬように南が木島の脚を押さえ、山科が足首を括り合わせた。

「さア、もう抵抗はできんぞ。あの晩の礼にたっぷりかわいがってやるからナ。俺の轆は、ちつとばかり手強いぜ」

脚をふんばってかまえた杉田の腕の筋肉が隆起すると、ビュンと重い唸りをたてて、水を吸った麻のロープが、木島の肩先から胸板へ叩きつけられた。パシッという鈍い音は、肉から骨に響くような震動を、木島の五体に伝え、鈍器の衝撃に似た深い疼痛は、焼けるように尾をひいた。



「うう！」喰いしばった木島の歯のあいだから、泳えかねた呻きが洩れる。

太いみみず腫れが、鮮かな石榴色にもりあがった。

「ソレ、もう一つだ」

一瞬、硬直する木島の軀には、脇

腹から臍の下へかけて、二本目の轆の痕がクツキリと浮きだした。

木島は、眼をつぶりたいのをがまんして、杉田の右手を睨んでいた。防禦の術はないながらも、轆が軀に当たる寸前に、筋肉を怒張させることで、いくらかでも痛みを軽くできる気がしたのだ。

杉田の轆は、容赦なく次々と飛んてくる。(親分の野郎、さっきはあんな嚇かしを云いやがったが、やっぱり俺を試しているんだ。万一のとき、俺がどれだけ頑張れるかを確かめてるんだ)

そう思うことで、木島は、自分に勇気をつけようとしたが、間断なく襲う電撃のような激痛に、脳が混濁しかかると、

(駄目だ。こいつらは、恐ろしい気遣いどもなんだ。俺は、こうして颯り殺しにされちゃうのかもしれない)

と泳え性もなく戦きだし、思いきり「ワァーッ」と喚きたくなる。

ロープといつても、水の重みでそうとうの打撃力があるから、杉田も急所は避けて打っているが、木島の軀は、隈なくといっていいくらい、全身が轆の痕で彩られた。

屈強な杉田も、さすがに息をはずませてい

るが、慎之輔はまだ「やめろ」とは云わない。
(こうなりや、根くらべだ。こいつが参るか、俺がへたばるか——)

一息いれると、杉田は、また猛然と打ちにかかった。

木島は、見苦しい悲鳴だけはあげまいと、奥歯を碎けるほどに噛みしめたが、「げっ」「げっ」という叫びは、咳嗽のように突きあげてきて、抑えることができない。

「勘弁してくれ」とは、死んでも云いたくなかった。

しかし、とうとう、どうにもがまんのできないときがきた。それは、もう、一種の生理的作用だった。

「畜生オッ！ 殺せえッ！ 殺せ、殺せ、殺しゃアがれッ！」

狂ったように叫ぶと、木島は、声と一緒に軀の中のものをすべて排出したい欲求にかられたが、すると、不意に、いいようのない虚脱感が、五官を急速に冒しはじめた。

木島が失神すると、杉田はホッとしたように、

「チェッ、案外だらしのねえ野郎だ」

と呟いて、額の汗を拭った。

慎之輔の指図で、木島は床におろされ、手

足の縛しめをとかれると、バケツの水を顔に浴びせられて意識をとりもどしたが、わずかに首を動かしただけで、すぐには起きあがる力もなかった。

「どうだ、木島。大分参ったようだな」

慎之輔が、乗馬鞭の先でピタピタと木島の頬を叩くと、

「クソ！ 参るもんか」

唸るように云った木島は、死力をふるってヨロヨロと立ちあがる。凄愴な表情は、さながら傷ついた獣だが、攻撃にでる体勢はみられず、隙だらけで傲然と突っ立っているさまは、(どうとでもしろ！)とふてくされていようだった。

「フフ、強情な奴め。よし、今度は山科がかわれ。杉田と南は、こいつを台に固定しろ」
慎之輔は、貪欲な眼を輝かせて、声高に命じた。

木島は、まだこのうえ、打たれるかと思うと、恥も外聞もなく赦しをこいたかった。しかし、彼にはやくざとしての意地があり、誇りがあった。

スッパリと観念した木島をコンクリートの台に括りつけるのは、きわめて容易だった。

台は真中から二つに分れていて、手足を固

定するように鉄の環がついている。

俯伏せに括りつけられた木島の軀は、胸から臍までの部分と、大腿から足先までの部分が、台に密着した。

元刑事の山科は、被疑者を適当にいたぶってきた経験があるが、嗜虐趣味をもっているとはいきれない。木島を鞭打つのも、それは、彼に与えられた仕事であって、己の意志ではない。しかし、山科に限らず、人間の性格には、多少なりとも残虐性が潜んでいるものである。

血を見た獣が、本能的に狂暴になるように第一拷問室のサディスティックな雰囲気は山科に勃然と加虐欲を起こさせたようだった。ピュンと激しく空気を裂いた山科の鞭は、木島の背に炸裂し、ふたたび風を切った。

「わう、ウウ……！」

最初の一撃は辛くも泳えて、叫び声を抑えた木島も、二打ち目は、

「ぐえッ！」というような声をあげ、それからあとは、打たれるたびに全身で絶叫した。実をいうと、木島自身には、もう叫ぶという意識はなかった。意志ではどうにもならぬ反射作用のように、腹の底から悲鳴が噴きあがってくるのだった。

馬の背をも抉る調教用の革鞭である。人間の皮膚では、たまるう筈がない。破れた傷口は滲みだす血でヌルヌルと光り、生臭い臭いがたった。

背中一面が、焼けた鉄板を当てられるような灼熱感で疼き、鞭のあいまにも、木島は、息を吐くごとに、呻きを洩しはじめ、ついには、呼吸と呻吟が一つになった。その声は次第に高くなり、やがて潮のひくように細くたえだえになる。

慎之輔は、手をあげて山科を制し、虫の息の木島に近よった。

「どうだ。今度こそは参ったろう。おまえはもう少しでまた気絶するところだったんだ。いくらタフでも生身の躰だ。負け惜しみもいかにげんにしたほうが利巧だろうぜ」

だが慎之輔の言葉も、木島にはもはや夢うつつなのか、呻き続けるのみで反応がない。「かわいそうにな、口をきく気力もないのか。よし、それじゃア、元気がつくように手当をしてやろう。少うし荒療治だが辛抱しなよ。南、バケツの水に塩を入れて持ってこい。よく効くようにタップリ入れてな」

それを聞くと、木島は思わず、
「ま、まってくれ——」

と悲痛な声をだしたが、それでも、まだ弱音を吐きたくないという意地は残っていて、あとの言葉はのみこんだ。

山科と杉田が、かまわず木島を台からおろす。ゼイゼイと喘息病みのように低く呻きながら、床へ転がされた木島の背中へ、白濁して見えるほどに濃い塩水を、南は、一気にザアツと浴びせた。

「わあーッ！ わわわわわ……」

凄じい絶叫とともに、木島はバネ仕掛けのように跳びあがり、めくらめっぽうに駆けだすと、激しく壁にぶつかったが、一回転してまた走り、別の壁面へめりこむように頭を打ちつけた。

絶えまのない叫喚は、人間のものとも思われなない。

頭を打ってバタリと倒れた木島は、それきり動かなくなるかと思えたが、両手で虚空を掴み、脚をバタつかせて、躰に火でもついたように、なおも床の上をのたうちまわった。

木島の躰や床をベタベタに濡らしているのが、塩水ばかりでないことを、慎之輔だけは見のがしていなかった。

やがて、さしも激烈な痛みもおさまってきたのか、それとも、体力を使い果たしてしま

ったのか、木島は死んだように動かなくな

た。

「死んだのか？」

南がこわごわ覗きこむと、
「バカ云え。こんなことで死ぬもんか。また気絶しやがっただけさ」

と杉田がこともなげに云う。

「親分。どうします？」

山科に云われて、慎之輔は、

「うん……」とあいまいに答え、仰向けにの

びている木島の躰を靴の先で弄んでいたが、

「そうだな、やっぱり、一応うちきろう。監

禁室へほうりこんでおけ。タフな奴だ、自然

に気がつくだろう。仕上げは明日だ」

と云い残して寝室へあがった。

時計は午前三時を指している。

司慎之輔は、ベッドへ入る気になれず、奇

妙な焦躁感をもてあましていたが、思いつい

て冷いシャワーを浴びると、睡眠薬を一錠多

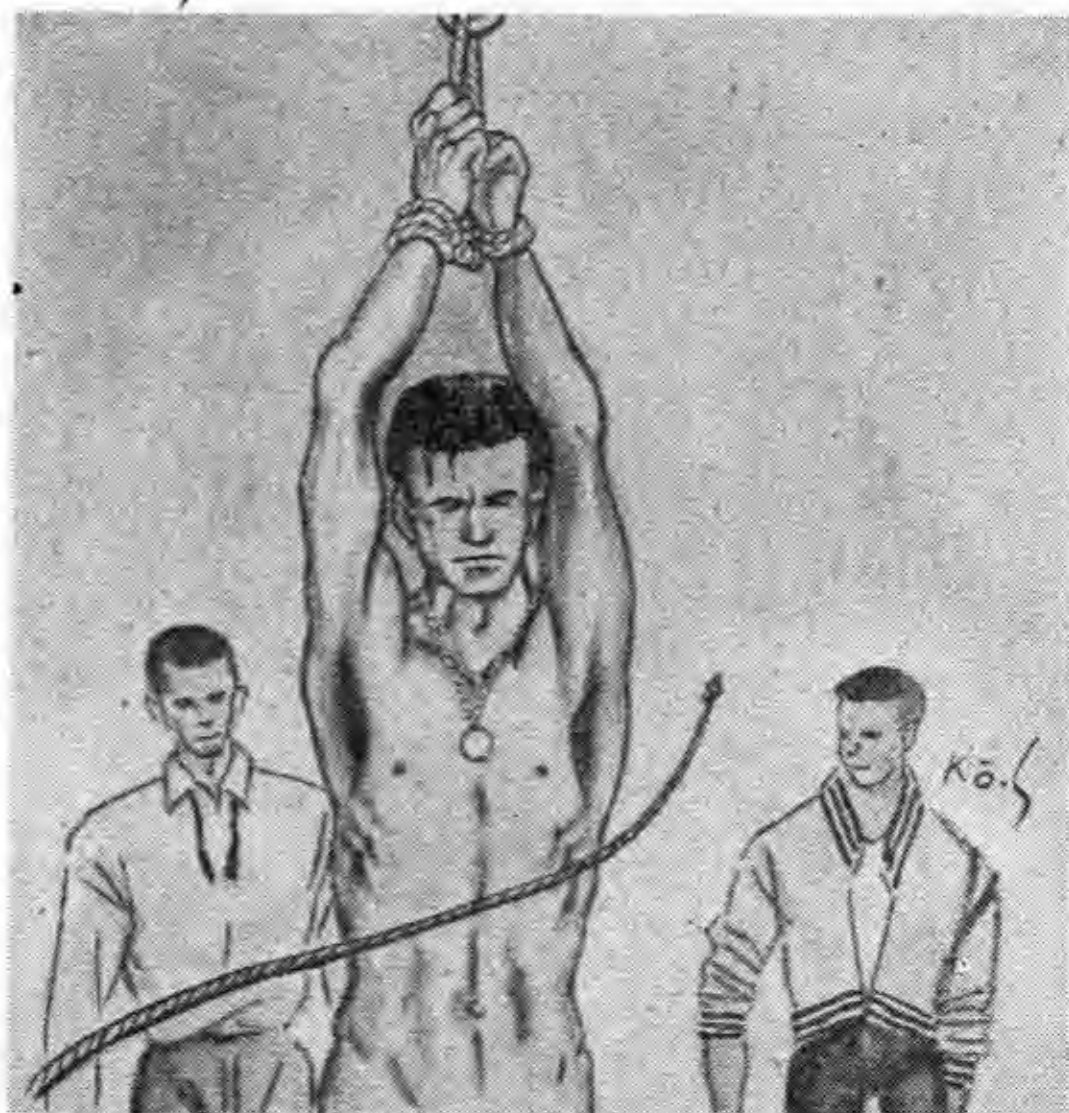
く嚥下した。

ヌード・シヨウ

意識がもどると、木島鉄次が最初に感じたのは、躰中を締めつけるような疼痛だった。昨夜(?)のことを思いだすと、口惜しさ

に涙が滲んでくる。もっとも、現在が昼か夜かは判断できない。はじめ昼だと思ったのは、地下室全体が蛍光灯の照明になっているからだった。

ぐるりを見まわすと、三方がコンクリートの壁で、一方だけが檻のような鉄格子になっている。木島には、すぐに、警察の留置場が



連想された。

「畜生……」

木島は、鉄格子に縋ってやっと立ちあがると、急に尿意をもよおした。

片隅の便器を見つけてホッとした彼は、用を足しているうちに、なんともやりきれぬじめな気持ちになって、

「畜生……」とおなじことをまた呟いた。

扉の開く音にギクリとした木島は、人の気配にも怯えるようになっていく自分がいまいる、虚勢をはって檻の真中に胡坐をかいた。

入ってきたのは、司慎之輔と南だった。

南は、携えてきた水筒と紙包を檻の中へ入れる。

「腹がへったろう。食べるがいいぜ」

慎之輔に云われて、上眼使いに睨んだ木島は、それでも手をだして紙包を開いた。

食欲があったわけではない。まして、なに

もつけない食パンが三片と水だけでは、喰う気にもなれなかったが、食物でも攝れば、いくらかでも、体力の回復が早められるかもしれないと考えた木島は、まずそうにパンを口に運んだ。

慎之輔は黙ってそのようすを眺めている。

木島は、なにか云わずにいられなくなり、

「オイ、俺をいったいどうする気だ？」

と詰問したが、『テストはもうすんだよ』という答えを、まだ未練らしく期待したのかもしれない。

「食事がすんだら、檻からだしてやるさ」

慎之輔は、冷然と云った。

『檻からだす』という意味を解放されると解釈するのは、あまりにも希望的観測だったが、木島の表情が緩んだのも無理はなかった。

「ここからでたら？」

木島は、三片目のパンをほうばるのをやめて、慎之輔の顔を見つめた。

「おまえの希みどおりにしてやるよ」

「じゃ、もう、すんだんだな」

「なにが」

「あんたの云う実験がよ」

「八分どおりはな。だが、最後の仕上げが残っている」

「……」
「おまえは昨夜、云った筈だぜ。『殺せ』ってナ」

「なんだと！」

「だから、希みどおりというわけさ」

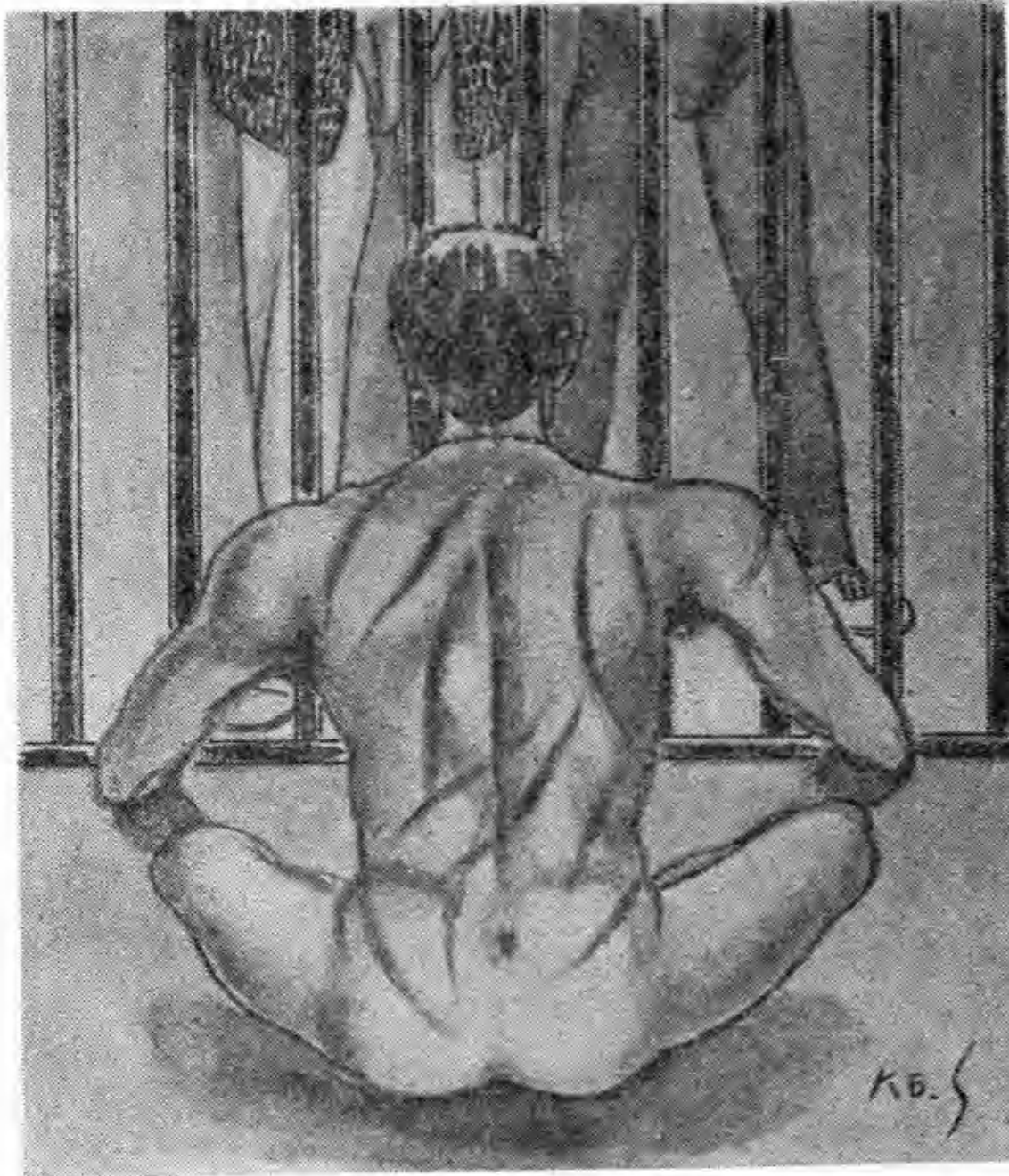
「俺を殺す！ なぜ、なぜ殺すんだ？」

「理由は簡単さ。殺したいからだよ」

「野郎オッ！」

木島は一声吠え、パンと水筒をほうりなげ、鉄格子から腕をだして、慎之輔に掴みかかる。うとしたが、逆上のための無駄なあがきにすぎなかった。

結局は、山科と杉田がやってきて、木島を監禁室からだし、うむをいわず処刑室に押しこんだ。殺すと宣告された木島は、もちろん必死で抵抗しようともがいたが、弱りきった躰ではどうにもならず、角材に二本の



横木をとりつけた古風な磔柱へ、大の字に括りつけられてしまった。

山科たちが見守るうちに、慎之輔は、上衣のうちかくしから、ゆっくりと小型の拳銃をとりだした。

キャバレー「夜光塗料」では、土曜と日曜の夜に限ってフロア・ショウがある。

ヌード・ダンサーの月野マリは「関係者以外の出入を禁ず」と標示のでている裏口を入ろうとして、雑役係の男に声をかけられた。

「月野さん。さっき衣裳が届きましたよ」

「衣裳？ 変だわ。そんなもの届くわけないのよ」

「でも、確かにあんたの衣裳だってって、二人の男が大きなトランクを運んできたんですよ」
「おかしいわね。それで、どうしたの？」

「ええ、楽屋をおしえたから、置いて帰ったんですよ。たぶん」

「そう、きつとなにかの間違いよ。そのうちとりにもどってくるんでしょう。いいわ、もう——」

マリが楽屋に入ってみると、なるほど見かけない大型のトランクが置いてある。

彼女は、薄気味悪そうに、ソッと指先で触ってみたが、ショ

の時間が迫っているのに気がつく、あわてて鏡の前に坐った。

メーキャップに余念のないマリは、鏡面の端になにかの影が動いて見えたときも、はじめは誰か顔見知りの者でも入ってきたぐらいに思ったが、いきなり男の手が肩を掴んだので、愕いてふり向いた。そして、いつのまに忍びこんだのか、覆面をした二人の男が立ちはだかつているのを見ると、恐しさに声もでず、ブルーのマニキュアをした両手で顔を覆った。

「夜光塗料」には、日曜日でもあったし、シヨをめあての客もあって、座席はほとんどがいっぱいだった。

「シヨはまだかね？」

中年の客が待ちくたびたように云うと、
「お好きなネ。もうはじまるわ」

腕環のように太い鎖で巻いた腕時計を覗いてみた女給が、含み笑いをする。

フロアに近いボックスの司儀之輔も、そのとき時計を見た。

いっせいに照明が消え、短い静寂のあとに官能を唆るような音楽が湧き起ると、螺旋階段の上にスポット・ライトが当てられた。その光の輪の中に浮かびあがった裸体を見た

瞬間、人々は思わず我が眼を疑った。それは、あまりにも、意表をついた演出といわねばならない。首をうなだれ、手をダラリとさげた不思議なポーズをとっている裸体は、まぎれもなく男性だったのだ。

筋肉がよく締まり、均整のとれた肉体は、男性舞踊手だと頷かせるにじゅうぶんだが、いくらヌード・ショウでも、衣裳らしいものはなにも着けず、遅い胸に、ペンダントだけがキラリキラリと光っている扮装に、女性の客の中には、眼を逸らす者さえあった。

ただ一人の人物を除いては、誰もがみな奇抜なシヨが、はじまったものと信じていたし、次に現れる女の裸身を想像して固唾をのんでいた。

バンドのメンバーやボーイなども、昨夜と違う演出に、びっくりはしたが、それ以上に疑う根拠をもたなかったし、女給たちときては、思わぬものにすっかり喜んでしまつた。

こう書いてくると長いようだが、実際には三十秒ぐらいのあいだしかなかった。

不意に、男の躰がユラリと揺れたかと思うと、アッというまに階段から転落したのである。

とまどったスポットが、階段下のフロアを照らしたとき、そこには、チャコール・グレイの背広の男が、死んでいるらしい男の裸体を抱き起こそうとしていた。

全部の灯りがつけられると、異変を知った人々が、ゾロゾロと集まりだす。

警視庁刑事、速水錬太郎は、裸の死体の心臓部を貫通している弾痕を認めると、同行していた二名の刑事にテキパキと指示を与えたが、楽屋で猿轡をはめられ、手足を縛られたマリが発見された頃には、慎之輔も山科、杉田も、すでに車上の人となっていた。

(以下次号)

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略面の添布をお願いします。

(編集部)

連載小説

『宇宙のどこかで』

(無期懲役囚の手記より)

佐 治 麻 造

使 役 囚 (8)

乗用車を手に入れた夫人は、物珍しさに当座は毎日の様に乗回し私はほとほと参ってしまいました。革具で胸、肩を締められ後手錠にされ、坐席の夫人の手で一鞭当てられて、車を曳き出す時の情けなさ、そして鼻鎖を引張られて顔を左右に向けさせられて曲る方向を指示される口惜しさ。途中、喫茶店等に立ち寄った夫人を、店の前で車に繋がれたまま正坐して待つ時等、本当に悲しくて悲しくて男泣きに泣いてしまいました。又お加代が買物に行く時にも使います。今迄は手錠足錠を嵌められ、籠を背負わされて連れてゆかれたのですが、これからは坐席に楽々と坐ったお加代の乗用車を曳いて

行かねばなりません。それにしても、せめて嵌口具だけでも外してくれたらと、胸も破裂せんばかりの息苦しさに、囚われの身の悲哀をつくづく思い知らされ乍ら、毎日の様に曳かされました。

ただ、典獄の注意でもあったのか、観劇とかスポーツ見物とかの歓楽地帯へ出掛ける際は使用されませんでした。奴隷ならば当然、曳かされたでしょうが、懲役囚の身ですので、少し憚られたものでしょう。

或日のこと、休暇をとった典獄は、夫人を同伴して本島へ旅行に出発しました。何かと準備の難用にこき使われた末、美しく着飾った夫人の足下にひれ伏します。

「六十四号。じゃ、五日ばかり留守にするからね。其の間、苦役は

免除してやるわ。檻の中で反省しなさい。わかった？」

檻のある室へ曳かれ、ゴム引きのダブダブの猿又の様なものをはかされます。今迄の経験がありますので、此の便が洩れない猿又をはかされた時には、これからの苦しい日夜を覚悟しました。お加代に後手錠、足錠を嵌められ俯向きにさせられて、手錠足錠の鎖を一カ所で結合して逆海老にされ、全身をのたうたせ乍ら檻の中へ這い込みました。

「そして反省おし！ 私が帰って来る迄」

夫人は檻の格子扉に施錠し、和服の裾捌きも軽やかに出て行ってしまった。五昼夜の逆海老！ どんなにそれが辛いものか、筆舌には尽せません。食事は日に一回、用便はゴム引猿又の中へ垂れ流しです。嵌口具は食事の時だけ外され、直ちに入念に嵌められてしまいます。もう苦しくて苦しくて、狭い檻の中をのたうち回って脂汗を流して苦しみもがきますが、勿論どうとも出来る訳もなく救ってくれる人がある筈もなく、気も狂わんばかりの苦しさでした。二回目の食事を与えられた時には、叶わぬこととは知り乍らも、とうとうお加代に哀願してしまいました。

「……お、お願いです……。慈悲です……。せめて……。三十分間……。いや五分間でも……。足を伸ばさせて下さいまし……。もう……。本当にもう……。苦しくて苦しくて……。死にそうで……。息が詰ってしまつて……」

「フ、フ、フ、死んだらいいじゃないの！ お前がどんなに苦しんだってね、私の方じゃ何とも思わないんだから。それとも何かい、奥様の処置が気に入らないとでも云うの？」

「……い、いえ……。そんな……。ああ、……。苦しうございます……。辛

いんです……。ほんとにもう……」

「フ、フ、フ、ほら、これ御らん。鍵よ、これ。この鍵を貸してやるからね、自分で外すといいわ。フ、フ、フ、フ」

お加代は、何と残酷にも手錠足錠の鎖を一つに結合している錠の鍵を、私の鼻環の先にブラ下げてしまいました。再び嵌口具が嵌められます。私は、もう泣くにも泣けません。此の地獄の苦しみから解放してくれる鍵を鼻の先にブラ下げながら、どうすることも出来ないのです。一昼夜の後、お加代は、私にハイポンの注射をし乍らからかいました。

「オヤ、まだ外していないの？ ホ、ホ、ホ、流石に神妙ね。フ、フ、フ、遠慮なく此の鍵、使ってもいいのよ」

嗚呼、此の辛さ、苦しさ。夫人は、おそらく私の事等、全く忘れて旅行を楽しんでいるに相違ありません。こんな苦痛も甘受せねばならない身の悲しさ。残酷な取扱いを訴えるすべもない口惜しさ。

四日目には、もはやもがく力もなく、涙も涸れ果て、檻の床に唯じっと顔を押付けたまま夫人の帰るのを、ひたすら待つのでした。

五回目の囚人食を与えられ、無理な姿勢で食ばり噉り、今日は帰る筈だと、今か今かと待って居りますと、やがてお加代がやって来て檻の扉をあけて、出る様に命じました。喜びに溢れ、最後の力を振り絞って這い出ます。鼻の鍵をとられて五昼夜振りで逆海老から解放されました。後手錠の片手だけが外されます。

「正坐おし！ 手を上へあげて」

自分の体とは思えぬ程硬張った身を懸命に起こして正坐し、見上げるお加代の手に、ああ、何と胸鎖が鈍く光って居るではありませんか。呆然として、手をあげる様にとの、いい付けも忘れ、手錠を

片手にブラ下げて合掌したままの私に冷やかな声。

「さっき奥様からね、二日程滞在を延ばすって御電話があつてね。お前にゃ、胸鎖腋鎖を追加しとく様になってさ！ フ、フ、フ、何ボンヤリしてるの？ お前、奥様に使役されてる懲役囚なんだから……」

ノロノロと両手を上へあげて、胸に胸鎖を締めて貰い、ついで腋鎖が両腋下に喰込みます。蹴り転がされて再び逆海老！ 鞭に追われて檻へ這い戻りました。夫人の電話一本で、この様な目に会わねばならぬ情けなさ。虫ケラ同然の身には違いありませんでしょうが、あんまりだと思いました。心身共に打ちひしがれ、更に二昼夜の苦しみを与えられ、それこそ骨の髄迄、囚われの身の悲哀というものを味わさせられた訳です。

二日後、半死半生の身を檻から引出され、お加代の鞭に追われて体の始末をし、シャワーを浴び、四つん這いに這って庭先にひれ伏します。胸鎖、腋鎖は外しては貰いせんが、手足の縛しめはありません。やがて夫人が出て来て、頭上に立ちました。

「正座おし！ お加代さん、口を利かせてね」

久し振りに仰ぎ見る夫人の相変らず美しい姿。嵌口具が外されます。

「……お、奥様……お帰りなさいまし」

「六十四号、どう？ よく反省したかい？」

「……ハ、ハイ……もう……十分反省させて頂きました。今後共、益々神妙に刑の御執行を受けさせて頂いて、罪の償いをさせて頂きとうございます。今後何卒……お心のままに使役して下さいまし……」

「フン。けど少しは苦しいと思ったの？ 少し顔の造作が歪んでるわよ。ホ、ホ、ホ」

「……ハイ……ほんとに……骨の芯迄……よく分りました……」

「何がなの？」

「……ハイ……私など……奥様から御覧になれば……虫ケラにも足りない分際だということが、でございます」

「ホ、ホ、ホ、そんなこと今頃、気が付いたのかい？ もう二十日ばかり反省させて上げようか」

「あっ、あ……そんな……お慈悲です、お赦し下さいまし……」

「フ、フ、フ、ところでね……」

テラスの椅子に坐り乍ら夫人がいます。

「妙なきっかけでさ、栄子さんと知合いになってね。そら、お前の奥さんだった栄子さんよ」

栄子とは私の二回目の妻の名です。

「……お前のこと話したらね、お前にお土産を下さったわよ。ほら、これ……」

示されたのは鈍く光る手錠でした。

「奴隷用の特製品よ。よくごらん」

渡された手錠を押頂いて見ますと、第一種手錠と同じ様な構造ですが、錠の部分が大きく、鍵孔の外に小さなダイヤル式の文字盤があります。又、環の内側にはギザギザが全周にあって、締まった時の痛さを想像させます。二つの環を繋ぐ鎖も大分太く、環の各々に「六十四号囚に与う。栄子」と彫ってありました。

「どう？ 嬉しいだろう。自分で嵌めてごらん」

口惜し涙を押えて、自分で両手に嵌めます。

「それからと……。私のお土産はこれよ」

真白い手で真新しい鞭を見せつけられました。「握り」の部分が大きくて太く、小さなスイッチの様なものがついています。「握り」以外は細い金網が表面に張り付いている革の棒で二本がくっついた様な形をしていました。

「これはね、新製品の電気鞭なのよ。柄の所に電池が入ってるの。本式のもの様な訳には行かないらしいけど、一応はネを上げさせるそうよ。どれ……」

やおら身を起し顎をしやくる夫人。私は後向いて背を鞭に曝します。

「あら、お加代さん、この胸鎖なんか取ってよ」

邪魔物のなくなった私の背に鞭が鳴りました。電気鞭の痛撃を想って身震いして居た割には痛くありません。むしろ普通の革鞭以下です。

「フ、フ、フ、今のはね、スイッチを入れない時よ。今度は入れるからね」

ピシリッ。鞭の当たった所が一文字に裂けた様な激痛。

「ウ、うっ。ひえーっ……」

「も一つ、如何？」

「ギャッ……、ヒーッ……」

考えて見ますと、電圧は二条の接近して並んだ金属網間にかかる訳で、局部的に鋭い電痛を与える構造です。

「これが私のお土産。フ、フ、フ、お礼は？」

「……あ、ありがとうございます……」

「じゃね、紙と鉛筆貸したげるから、栄子さんに御礼を書くのよ。」

ア、それからね、お前のいろんな恰好をね、撮して送って次しいっておっしゃってさ、十六ミリのフィルム沢山、渡されたのよ。カメラはあるから明日から撮って上げるわ」

お加代から紙と板切れと、チビた鉛筆を渡され、地面の上で御礼の手紙を書かされました。

「いいかい、文面が気に入らないとこれよ」

夫人は例の簡易電気鞭を見せびらかせ、冷やかにいいます。

「フ、フ、フ、字をまだ覚えてるの？ 間違った字の数だけこれだよ」

からかわれ乍ら、頭を絞って屈辱の文を綴りました。

「栄子様。御慈悲の手錠をお与え下さり、本当に有難うございます。早速、嵌めさせて頂きました。懲役囚の私にとりましては此の上ない品でございます。手首に喰い込む鋼鉄の錠の味と共に、貴女様の御情けの程、泌々と味わせて頂いております。虫ケラの如き私のこと等、よく思い出して下さいました。勿体のうございします。今後も、より一層、神妙に刑に服し罪の償いをさせて頂く所存でございます。御存知でしょうが、目下、典獄様の御邸で奥様に使役して頂いて居ります。本当に分に過ぎたことでございます。奥様がお撮り下さる写真を、お暇の折、御らんになって笑ってやって下さいまし。字を書くのは本当に久振りでございますし手錠の身でございますので乱筆の程、平に御赦し下さいます様。地べたにひれ伏して

終身懲役囚六十四号」

やっと書終えますと、大声で読まされました。

「フン、仲々うまいわね」

夫人はカメラのゼンマイを巻き乍らいいました。さっきから、地べたにうずくまって不自由な手でタドタドしく書いている姿を撮ったものと思われれます。

十日間近い逆海老の責苦に疲労こんぱいした身に早速、容赦ない労役を課せられ、鞭に追われ、あえぎあえぎ苦役する姿が次々に撮影されました。

其夜から、栄子が呉れたという手錠を嵌められました。

使役 四 (9)

「済んだかい？ さっさと括って貰ったいで！」

簡易電気鞭の一撃をお加代から尻に受け、膝枷の鎖を鳴らせて夫人の寝室に行きます。

「おそいじゃないの？ 何グズグズしてたのさ！ ちょっと御待ち」

既に横になっていた夫人に叱られ、じっとひれ伏し、身を切られる思いの切ない三十分間程を歯を喰いしばって待ちました。

「お起き！」

頭を蹴られて身を起し仰ぎ見る夫人は、ナイロンの黒い紗の様な艶めかしいネグリジエ一枚の姿、手にはいつもの手錠ではなくして捕縄の束を持っています。

「今日は縄を掛けて上げるわね。フ、フ、フ」

手錠であろうと縄であろうと、文句の言える身ではありません。後向きになり両手を後へ回し、右手首の上へ左手首を重ねて腰を浮かせ、うなだれて縄を待ちます。両手首を括られ、首



れ子 姿

に吊られ、上膊部、胸、腹とヒシヒシ締め上げられて行きました。媚めかしい香料と肌の匂いが鼻につき、腰枷に足を掛けて力一杯、締める時等は時々息が肌に感じられ、又柔らかな手が絶えず触れる其の悩ましき、切なさ。

「さ、お立ち！」

と最後に縄をグツと締められて、縛しめを受け終った時には、頭がクラクラとし、動悸が仲々止まりませんでした。

直立している私の回りをグルリと見回ります。

「ネ、あなた。うまいものでしょ」

ひれ伏す時、グイッと締まる首縄の苦しさ。絞首台を思い出して

ゾツと致しました。

縄付きの姿を撮影して追出します。

其夜は、慣れない夫人が無茶苦茶に掛けた捕縄の痛さ苦しさに殆んど眠れませんでした。

四、五日すると典獄が出張になりました。例によっていまいめを貰いに寢室へ入ります。夫人が一人でベッドに腰掛けてお酒を飲んでいました。例のお妾さんのところへ遊びに行つて、さつき帰ったばかりで、ガーターの付いたコルセットとブラジャーだけの姿です。コルセットの下に黒いパンティをはいていました。ボンと頭を蹴られて身を起します。すぐ眼の前に真白い腿が見えドキッとなりました。与えられる足錠を自ら嵌めます。ホンノリと頬を染めた夫人は、手錠の環を開いたり閉めかけたりし乍ら、冷然と見下ろしています。今夜も又、後手錠です。懲役囚の身、後手錠は諦めています。榮子に貰ったという此の手錠は少し動いても、とても痛いのです。夫人が手に持っている手錠の環の内側に光っているギザギザの歯を眺めて、思わず肩で息を致しました。途端に夫人の叱り声。

「溜息なんかついて何よ！ 嫌なのかい？」

震え上って、あわてて後向きになり両手を後へ回しました。背中を思い切り蹴られます。

「よし！ じゃ退屈しのぎに少し躡けて上げようね。お立ち！」

命令のままに寝台から一米離れて斜向いて立ち、膝の間に鉄棒を挟んで直立します。

「不動の姿勢よ！ よし。両手を前に水平に挙げて！ 次に膝を曲げて！ コラ、上体は真直よ。鉄棒を落さない様に。そうそう。そ



のままの姿勢で正面をじっと見て、身動きしちや駄目よ。ウン、これ外しとこう……」

嵌口具が外され、夫人は電気鞭を手にベッドに仰臥し、ゆっくりタバコに火をつきました。五分も経たない中に、肩と腰と腿の筋肉に堪え切れない苦痛を感じ、思わず低く呻きます。

「フ、フ、フ、どう？ 絶対服従だわよ。さつき命令したこと覚えてるわね？ 身動き一つ禁止よ」

身体中、ワナワナと戦慄が走り、額に脂汗が流れます。夫人には絶対服従しなければならぬのは当然ですが、苦しさの余り

「……お、おく……様。どの位……こうして……」

途端に仰臥のままの夫人の手から電気鞭が一閃します。

「……ヒーツ……ア、アッ……」

「何時間そうさせていようが私の勝手よ。お前はね、そんなことを知る必要もないの！」

齒がガチガチ鳴って止まらなくなり、身体中の汗腺から脂汗が滲み、眼が昏んで来ます。

「フ、フ、フ、大分苦しそうですね。あの脂汗！ ヨシ。そのまま、私の方を向いて！」

ベッドに深々と横になっっている夫人の方へ、やっとの思いで向きを変えます。膝の鉄棒を落さない様に足を動かす苦心。

「じゃ、あと二十分で勘弁してやるわ。ここに時計あるわよ。フ、フ、フ、御苦労さんねえ」

時計を睨み乍ら死物狂いの努力です。

「どう？ その姿勢、苦しいだろ。止めようと思ったら止められる訳ね。唯、自分でそうやってるだけなんだから……。ホ、ホ、ホ、ホ、止める勇氣ある？」

からかわれて、口惜しさに唇を噛みます。

「……奥様……とんでもございません……御命令には……絶対服従でございます……ウッ……ウ、ウ、……ア、……ア、ア……」

「手が下ってるよ。上体が倒れてる……」

漸くのこと二十分間の苦しみが済み、床に正座します。身体中突張って棒が入った様です。夫人は、やおら身を起しベッドに腰掛け、再び手錠をいじり乍らいます。

「お前だって生ま身の体なんだから、毎晩々々こんなもの嵌められてさ、それも後手に嵌められて……そりゃ情けなكارうよ。私は経験ないけど辛いだろうと思うわ。けど仕方ないじゃないの。そうだ

ろ？ お前は懲役囚じゃないの。手錠が嫌なら捕縄を打ってやってもいいけどね。面倒臭いものね。まあどっちにしろ、檻の中じゃ後手よ。辛い目に会わなきゃ罪の償いが出来ないじゃないの。そうだと。分った？」

礼をいって後向いて両手を後へ回わします。

「手錠摺れ、少しひどくなったわね。あ、そうか。此の特製品のせいね。フ、フ、フ、もう十日程したら前のに戻してやるからね」

息が首筋に柔かくかかり、冷い鋼鉄の環が左手首にガチリ、そして右手首にもガチリ。毎夜のこと乍ら情けなく堪らない一瞬です。追い出されてお加代の姿を探します。女中部屋の扉を額でノックしますと、パジャマ姿のお加代が出て来て

「おそいじゃないか！」

二つ三つ、ピンタを喰らい、面倒臭そうに檻へ蹴り込みました。翌日は、ひる前に乗用車に取付けられ、夫人を乗せて又、お婆さんのところへ曳かされました。曳き出す時など、一言、声を掛けてくれればいいものを、と思うのですが、合図は必ず鞭です。夫人を送っていった空車を曳いて帰り、お加代の下で労役に服します。夕方、再び迎えに行き、例のお婆さんも一緒に乗せて曳いて帰りました。浴室で二人の体を洗う時の辛さ、情なさ。むっちりした脚でタイルの床に蹴倒され、腰掛の代用を勤めさせられ、そして水を湛えた桶を水平に支えて正座させられたり、本当に囚われの身の悲しみを、男性として満喫させられる苦行です。

一日の苦役を終え、居間の安楽椅子でレコードを聴いている二人の傍へいざり寄って、ひれ伏しいましめを待ちます。

「お前、此頃少し又、ダラけてるわね。今夜は吊しとくからね」

嗚呼、私がダラけている、というのでしょうか。一生懸命に刑を受けているのに、と思いますが、哀願する術とてない身、口惜し涙がホロリと出ます。

「今夜は捕縄よ。ね、見ててごらんよ、私の縄捌き……」

ひしひしと捕縄が肌に喰い込み、股縄が灼きつきました。嵌口具を外されます。

「……ウッ、ウ……ウ、ウ……あり……御縄、ありがとうございますました」

ひれ伏す首に喰込む縄に、息を詰まらせ乍ら礼をいいます。

「あんた、仲々うまいものね、鮮かだわ。此の縛り方、本式みたいじゃないの」

「本式みたい、とは何よ。ホ、ホ、ホ、ホ、ちょっと一緒に来ない？」

夫人に縄尻を取られ檻へ曳かれます。お加代も来て、三人の婦人達に見られ乍ら、縄付のまま用便を済ませますと、両足首も固く括られ、膝で立った状態で両足首を腰枷の後でグッと吊られました。「そら、手を離すわよ。倒れると起上がれないよ。ホラ、此の環のところへ鼻を持って来て……」

ヨロヨロとバランスを取り乍ら、檻の略々中央の天井の鉄格子に取付けてある茄子環に鼻環を嵌め込まさせられました。妙な動作で苦心して自分で自分の鼻を吊らされる私に嘲笑が浴びせられます。お加代が檻の中へ入って来て両尻の肉にグイと電極針が挿入され、茄子環の接点と電源とに接続されます。ガチャン、ピーンと閉められる鉄格子の扉。

「お前分ってるだろうけどさ、鼻環を引張るとチクリと痛いわよ。」

ホラ、スイッチを入れるよ」

途端に下半身を貫く電撃痛。あわてて、必死の思いで鼻環を浮かせて支えます。

「お加代さん、もう少し……そうね、もう三センチ程、上へ上げてやってごらん。フ、フ、フ」

残酷にも鼻環を吊る茄子環が少し上げられ、私は死物狂いで膝立ちのまま背伸びし、顔を仰向けます。もはや、鼻の位置が五センチ程も動きますと、飛上がるばかりの激痛です。

「……ギャッ……ギエーッ……ウ、ウ、ウッ……ヒーッ」

夫人はカメラをジージー鳴らせて撮影し乍ら

「ホ、ホ、ホ、もう脂汗、流してるじゃないの。一晚もつかい？」

「……お、奥様……お慈悲……ア、アッ……ギャッ、ウ……ウ……」

「フ、フ、フ、下手に口を動かすからよ……」

「……アッ……ア、フーッ……。死んで……し、死んでしまい……」

ます。こんな……一晚中……も……アッ、ギエーッ」

「死んだって構わないのよ。懲役囚の一匹や二匹、虫ケラ以下よ。」

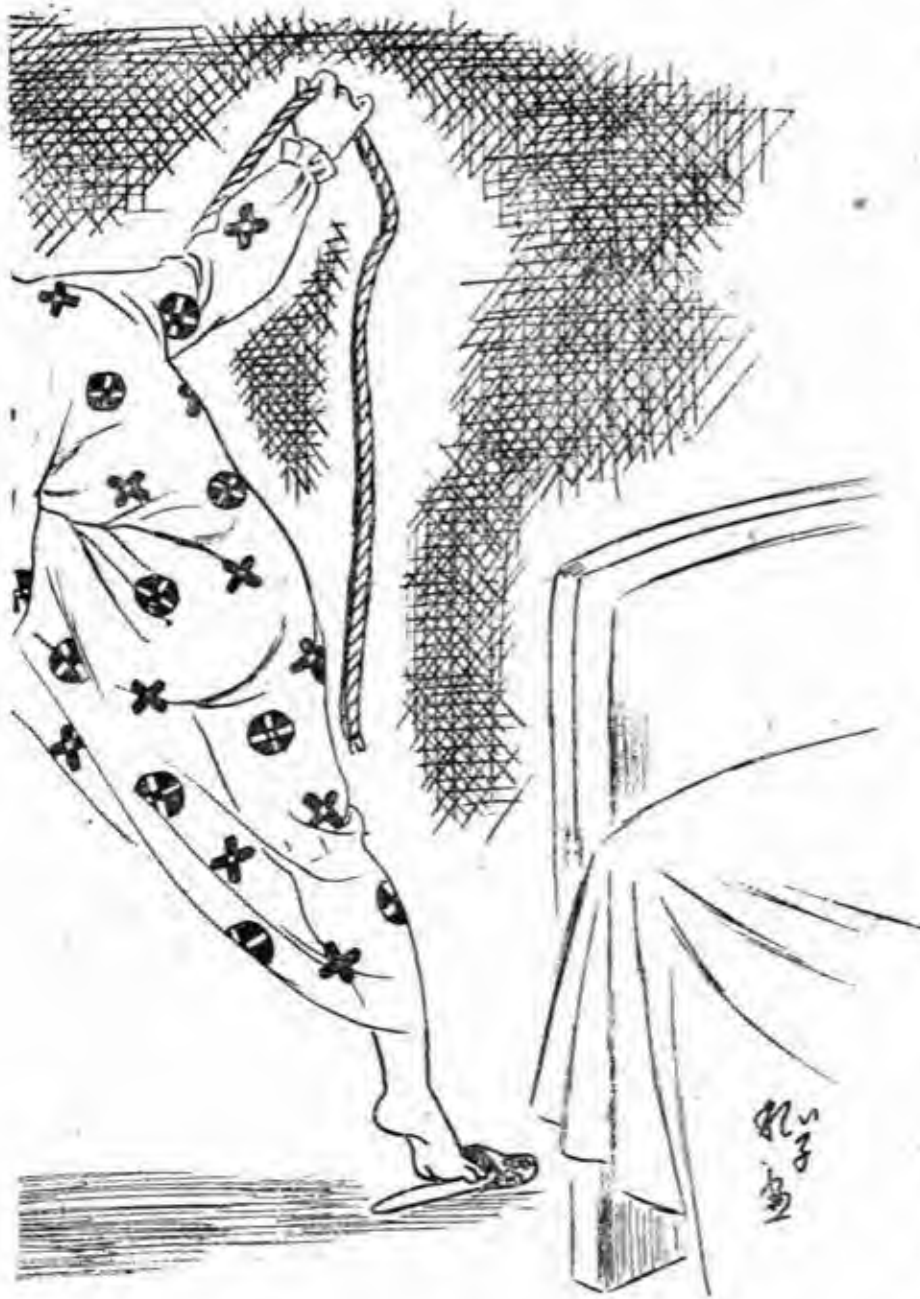
ま、たっぷり苦しんで、未だ生きていたら死んだ気で刑を勤めることね。さ、行きましようよ。何だか臭いじゃないの」

それからの苦しみ、全く思い出してもゾッとします。経験のない人には想像もつきません。眼が昏んでフラつきますと、途端に電痛で意識を取戻し、失神することもできませんし、ひと思いに鼻の障子を引きちぎって苦痛から脱しようかとも思い詰めますものの、あの事や、引きちぎる迄の電痛を考えますと、とてもそんな勇氣もなく、呻き、喚き、脂汗を流して、唯々夫人達の慈悲を祈る外ないのでした。

何時間位経ったでしょうか。もうろうとした眼に御客の婦人、例のお妾さんの顔が映りました。艶めかしいネグリジェの上にガウンを羽織って、天井の鉄格子越しに見下ろしています。もう前後の見境もなく哀願します。

「……おじひ……お慈……悲で……ござ……ウツ……ギャツ……」
「ホ、ホ、ホ、ホ、大分お苦しみの様ね。辛い？ オヤ、此のボタンを押せば外れるんじゃない？ そうだわ。フ、フ、フ、押して上げようか？」

茄子環の金具の上部のボタンに指をのせて嘲けりからかいます。



両眼に哀願をこめて見上げる私の顔にペッと唾が吐かれました。口惜しさに血が逆流します。

「我慢おし！ 懲役囚なんだから。フ、フ、フ、口惜しいの？」

持って来た羽根で私の咽喉の辺りが擦ぐられ、身もだえては激痛に呻き喚く私に声高く嘲笑を浴びせて、サッサと出て行ってしまいました。こんなひどい扱いをされるなら、監獄へ帰された方がましだ、とも考えますが、反面、全く無関心で放っておかれることもありますし、恐らく監獄へ帰されるとすれば八級囚にされることでしょうし、時々こんな風に痛めつけられることも仕方ない身だと諦めて、天井を睨んで苦悶の長い一夜を過しました。

朝がやっと来て、お加代の指先の一押しで膝立ち吊るしから解放され、床に音を立てて倒れます。簡易電気鞭の雨に齒を喰い縛って檻の外へ這い出て、縛しめを解いて貰います。

「苦しかったかい？」

「……ハ、ハイ……ありがとうございます」

監視され乍ら用便、そしてシャワーを浴び、そして膝枷の検査、嵌口具。一晩中、苛酷な懲戒を受けた身に、今日一日の苦役が課されるのです。突張ってしまった体中の筋肉に呻き声を咽喉の奥で立て乍ら、お加代に顎でこき使われます。柔かなベッドで未だウトウトしている夫人やお客様の婦人にコーヒを捧げ運ばされる悲しさ。涙が頬を伝います。

朝食後、庭の掃除をしていますと夫人に呼ばれました。ビクッとして懸命に走り、姿が見えるや否や、鎖枷の一杯



に膝行し、息を弾ませて足下にパツとひれ伏します。額が地面で音を立てる程の動作で精一杯の神妙さを表わしました。

「ホ、ホ、ホ、ホ、少しは分った様ね。じゃ、今日中、手錠嵌めたままで労役よ。それで赦してやるわ。手をお出し！」

揃えて両手を差出し、冷い手錠を嵌められます。

「ウン、今日中、家の中へ入れなきやいい訳ね。お加代さん、足錠も嵌めて。吊鎖ウンと短くしといてよ。余り分不相応に自由にさせていたから少しダラけたのかも知れないわ」

両足首に第一種足錠の鋼鉄環のギザギザが喰い込み五〇センチ程

の鎖で、腰枷の前ではなく、後で吊られます。鞭で追い立てられ、哀れな姿で労役する私の姿を夫人達は暫く眺めたり、撮影したりして笑っていましたが、やがて連れ立ってタクシーでゴルフに出掛けてしまいました。

使役囚 (10)

二、三日後、夕方から夫人を乗せて約三軒離れた劇場へ乗用車を曳かされました。途中、友人の例のお妾さん（絹子という人です）を誘いました。

「早く、早く。おくれそうだわ」

容赦ない革鞭に追立てられ、二人を乗せた重い車を、汗水垂らして曳きます。自動車に混って、奴隷達の曳く車もあちこちに見え、夕暗迫る繁華街を首の音響器を鳴らし乍ら、あえぎあえぎ大きな劇場に着きました。自動車の駐車場の隣に奴隷車の置場があり、既に十数台の色々な奴隷車が奴隷達を取付けた儘で並べてあります。コンクリートの地面に一米程の鉄柱が並び、正座した奴隷達の鼻鎖が繋いであります。

「万一のことがあると大変だからね。フ、フ、フ、主人には内緒よ。此の車で来たこと……」

入念に戒具の検査、そして固く第一種足錠を嵌め乍ら夫人が絹子に云いました。車に取付けられたまま、正座させられ、鎖と錠前で腰を浮かせることすら出来ない様にされ、鉄柱に付いた太い鎖の端の錠が鼻環にカチリと嵌め込まれました。

「じゃ、おとなしく待つといいで！」

二人は楽しそうに劇場内へ消えます。激しい労働のあえぎがおさまりますと、通りがかりの人々にジロジロ見られる恥かしさ。大勢の社会の人々の目に晒されるのは久し振りで、穴があったら入りたい程です。ふと気が付いて見ますと、斜向いの一台の車にながれて正座している二人の女奴隷は、二人共、鉄砲手錠にされて時々身もだえして苦しんでいました。主人の機嫌を損じる事をしたのでしよう。通行の人々を哀願の眼で仰ぎ乍ら、嵌口具の奥で微かに呻いていました。やがて幕が開いた模様で、人通りも少なくなりました。きびしく戒具を施され、鎖の重さにうなだれて地面を見詰めたまま、唯じっと正座して観劇の終るのを待っていますと、やる方ない悲しさにホロホロ涙がこぼれて来ます。あたりの奴隷達も時々身動きして鎖を鳴らせては深い吐息をしています。時々制服のボーイが見回りに来て叱りつけて行きます。

夜もかなり更け、やっと終ったらしく、楽し気に立ち去る男女の群れ。長時間の正座に痺れ切った両脚を、革鞭におののき乍ら踏みしめて、車を曳き出す奴隷達の哀れな姿。やがて私も繋留柱から解かれ、死物狂いで立上って鞭の合図を待ちます。渇きと飢えに堪え、重い重い車を曳いて坂道を上る苦しさ、辛さ。漸くの思いで邸へ帰り、囚人食を前に半時間程おあずけを食った後、貪る様に囓りました。シャワーで汗水を流し、夫人の寝室へいざって入ります。ブラジャーとズロースだけの夫人はベッドに腰掛けて手紙を読んでいます。お加代がコーヒーを持って来ます。

「お加代さん！ 明日帰るって！ それに凄いのよ。私の指環、買って呉れたわ。あなたには服地のお土産だって！ 嬉しいって……」喜びの余り、ケーキを床に落してしまいました。クリームが足の

甲にベッタリ付きコロコロと床にころがります。

「アラ。あ、お加代さん、いいわよ。これの嵌口具、外しておやり」「こんなもの喰べさせておやりになるんですの？」

「まあ、いいじゃないの。六十四号！ お喰べ」

命じるまま口でケーキを拾って喰べます。いまいちめを受ける前ですから手は自由ですが、手を使うこと等、許される筈もなく、又習慣のために自然に這いつくばってしまいました。久振りの甘い物の味、本当に舌が溶けそうです。

「どう？ 舌が曲らないかい？ ホラ、次はここ……」

突出した足についたクリームを舐めさせられ、ついで床の敷物に少々ついたのも丹念に舐め取ります。

「お風呂場で洗って来るわ。これ、馬におなり！」

四つ這って夫人の体を乗せ浴室へ行きます。夫人の足を丁寧に洗った後、再び寝室へ戻って足許にひれ伏しました。

手錠を取上げた様子です。取りあえず両手を後へ回し乍ら

「……あの先に足錠を嵌めさせて下さいまし……」

といいますと、どう云う風の吹き回しか

「今夜はね、特別の御慈悲で前手錠にして上げる。足錠も勘弁してやるわ」

「あ、ありがとうございます。お有難うございます……」

嬉しさに合掌して伏拝み、いそいそと両手を差伸べて手錠を嵌めて貰いました。

「そんなに嬉しいかい？ ホ、ホ、ホ、ホ、今晚だけだよ」

「ハ、ハイ……勿体ない御慈悲でございます。お陰様で……久し振りに背中をつけて眠れます。御恩は決して忘れません……」

「フ、フ、フ、そうかい。じゃ、もうお退り！」

其夜の楽しさ加減！ 何しろ足錠も嵌口具もなく、おまけに前手錠、しかも腰枷に結ばれていない前手錠なのです。手錠が締まらない様、注意し乍ら、心ゆく迄自分の体を自分の手で撫でさすって熟睡してしまいました。

日頃と余りに違うので、フト眼が覚めました。何時頃か勿論、知る由もありません。明日に差支えるから、もっと眠らねば、と思い乍ら、両手に嵌まった手錠を眺めます。栄子に貰ったという例の特製品です。両方に小さな文字盤と鍵孔とがあります。此の手錠を用いる時は大抵、鍵なしで、ダイヤルを合わせるだけで外れる様にしている訳で、其の点が便利な所です。外そう等とは夢にも考えず、おそろおそろダイヤルをつまんで回して見ました。数字が並んでいます。コンビネーションは何だろうと考えたのが運の尽きでした。

ふと自分の囚人番号を思い出し、左手のを何の気なしに右へ回して6に合わせ、左へ回して4に合わせた途端、カチリと音がして鋼鉄環が開いてしまったではありませんか！ 飛んだ事をしたと一瞬、考えましたが、すぐ又、自分で嵌めればいいじゃないか、と右手首のも外してしまいました。外した手錠を床におき、両腕を横に伸ばし思い切り「大」の字になります。早く嵌めねば、と思いながら、十分間も自由を満喫したでしょうか。お加代が何時やって来るか分りません。見付けられたら、どんな処分を受けるか想像の外です。最後に思い切り伸びをし、さて嵌めようとして、飛び上って驚きました。どうしても嵌まらないのです。環の端が嵌入する孔を覗いて眼が昏みました。鋼鉄の突起が孔を塞いでいるではありませんか。夢中になって、他の一コを見ます。同じ事です。恐ろしさに血が頭

から引いて行きました。何とかして突起を戻そうと必死に構造を調べ、ダイヤルを回し、振り動かしますが、すべて無駄です。

ずっと後で分った事ですが、突起を元に戻すには別のコンビネーションがある訳で、意地悪くその方を複雑にしてありますので到底、分る筈ありません。万策つくいて、ずしりと重い手錠を掌に乗せて眺めます。飛んでもない事をしてしまった、と悔んでも後の祭り、やがて課される懲戒を思つて全身が震えおののきます。社会の人々が見れば、吹き出して仕舞う様な滑稽な有様ですが、手錠姿が当り前の懲役囚の私にとっては、生命にも関わる一大事です。どんなに締まって居てもいいから、此の手錠の環が両手首に嵌まっていたらと、直ぐ開いて仕舞う両方の環を両手で互に押え付け、嵌まった恰好だけに見ては取落し、懲戒の恐怖と、自分の哀れさに思わず大声で泣き出してしまいました。

もはや眠る所ではありません。時間が刻々過ぎるにつれ、歯の根が合わなくなり、尾籠な話ですが小便を洩らしてしまいました。仮りに嵌めた恰好で、両手で環を押え、深くうなだれて、ガタガタ震え乍ら朝を待ちます。

遂に最後の時が来て、お加代が突然、扉を開けて檻の前に姿を見せました。

「オヤ、もう正座？ 神妙ね。昨夜は嬉しかったろう？」

恐ろしさにガクガクし乍ら、思い切つて必死の思いで哀訴しました。隠しても直ぐ発見される事です。

「……お、お……お加代様……おゆ……おゆるし下さいまし……御懲戒は……覚悟して居ります……おゆるし下さりまし。存分になすって……」

「ホ、ホ、ホ、ホ、何言ってるの？支離滅裂じゃないの。一体、何をしたの？」

死物狂いの勇気で外れた手錠を見せました。

「あら！ やったわね！」

お加代の顔が途端にきびしくなり、私はガバと床にひれ伏し身を揉んで哀れみを乞います。

「……外れてから……」

「外したんだろ！外してから、とお云い！」

「あ、ハ、ハイ……外してから……ずっと……」

……嵌まったと同じ……風にしていました……

本当でございます。おじひです……おじひ……」

「ともかく重大だわね。ま、処分は奥様の御氣持一つよ。よし、御目覚めになったら、ありのまま申上げてごらん。フ、フ、フ、馬鹿ねえ、ほんとに。手錠位辛抱できないの？懲役囚のくせに」

夫人の寝室にコーヒーを捧げ運び床にひれ伏す時のおそろしさ！

眼をこすりこすり、コーヒー茶碗を取ろうとした夫人は、不審気にいいました。

「おや？嵌口具は？」

「……ハイ……あの……奥様に申上げて来る様にと……お加代様が嵌めずにおいて下さいました」



「へーえ、何を？」

「恐ろしさにガクガク震え乍ら、舌をもつらせ、もつらせ、ありのままをいいます。」

「……どうか、御懲戒を賜わりました……御慈悲を……懲役囚の分際で、奥様が御手ずから嵌めて下さった手錠を外す等と……大それたことを……しかし……決して決して外すつもりはなかったんです。御慈悲です……命だけは……」

夫人は腹を抱えて大笑いしました。涙が出る程笑います。思わずホッと安心した途端、きびしい声。

「六十四号！ 顔をお上げ！」

口許のコーヒー茶碗越しに冷く見据える視線を感じて齒の根が合わなくなります。

「ほんとに飛んだ事したもののね。嵌まらなくて、あわてただろうねえ、フ、フ、フ、恰好を想像したら可笑しくて可笑しくて……。けど分ってるだろうね？ 戒具忌避の素振りだけで半死半生の懲戒なんだよ。それを又、事もあらうに戒具解脱とはねえ。先ず息も絶え々になる程の懲戒は覚悟おし。若し脱獄と見られれば息の根が止まる迄懲戒され放しよ」

「……い、い、いのちだけは……命だけはお助け……」

「フ、フ、フ、まあ、今日主人が帰って来るからね。典獄様に決めて頂くことにしようね」

ベルを押してお加代を呼び

「これ、第四種で締め上げて放り込んでよ」

なおも、ひれ伏して哀れみを乞う私の鼻に鎖がつけられ、グイグイ引き起されて引立てられられました。激しいビンタを続け様に喰らい身もだえして泣き乍ら檻へ曳かれます。腋鎖と胸鎖が締めつけられ、後手にガッキと第四種手錠、足には第四種足錠を殆んど自由度零に嵌められ、脛を締め付けられます。嵌口具を嚙まされ蹴倒さ

れて俯向けにされ、両足をウンと曲げてグッと腰枷に吊られ、更に膝枷と首環とが鎖で絞ほられて逆海老にされました。足で蹴って押され押され必死に檻の中へもがいて入ります。施錠の音。

「馬鹿ね、ほんとに……」

お加代は立去り、私はこうして処分の決まるのを待つのです。今迄受けた中で最高のいましめです。苦しくて苦しくて汗がダラダラ流れました。あんな意地の悪い仕掛けの手錠をやった栄子が怨めしくてならず、三年近い呻吟も結局、無駄かと考えますと、今更の様に無実の罪を被せられたのが、口惜しくて口惜しくて涙がこぼれるのでした。

使役囚 III

夜になってから曳出され、足錠の鎖を少し弛められお加代の革鞭を受け乍ら庭先へ膝で歩き、テラスの前へ引据えられました。出張から帰った典獄は、艶やかに粧われた美しい夫人を傍に、椅子にくつろいでいます。嵌口具を外され、再び戒具解脱についていわされました。

「ハ、ハ、ハ、ハ、仕掛けに気付かなかったのが運の尽きだな。あの手錠はな、奴隷用の特製品だから、その位の事は考えてあるわけさ。ま、可哀想だが命はないな。明日、手続して懲戒を決定することにしよう。フ、フ、フ、死刑じゃないよ、断わっとくけどな、懲戒だけどさ、耐え切れずに死ぬと云う訳さね……」

典獄の口から、はっきりと云われ、恐ろしさに眼が昏み、口も利けません。夫人は黙って、小気味良さそうに冷く私の姿を眺めていました。

お加代に追われて檻の内外を片付けさせられ、夫妻の寢室の窓の下で正座させられました。勿論、第四種後手錠、嵌口具、そして首に厚さ二寸程の大きな木製の首枷を嵌められ、鼻環は鎖で傍の立木に繋がれます。

「今晚中、そうしてさ、御厄介になった御礼を申上げるのよ。フ、フ、フ、」

寢室には灯が点り、やがて仄暗いピンク色の光に変わり、衣ずれの音、甘ったるい声等が洩れて来ました。今日一日、一滴の水すら与えられず苦しみ抜いた挙句、死の宣告を与えられ、此の有様です。涙も涸れ果て、唯もう怨めしいの一語に尽きる気持で、寢室の窓のピンクのカーテンを見詰めて嗚咽しました。

カーテンが動いて、肌も露わな夫人の白い顔が現われます。

「どう？ 気持は？ 諦めたの？ フ、フ、フ、フ、其の手錠、外してごらんよ。フ、フ、フ、明日中には御臨終ね。死ぬのは恐ろしいだろうねえ。折角、三年程つとめたのにねえ！ 自業自得よね、誰も恨むことはないわ」

哀願の術すらない私は唯、夫人の顔を仰ぎ見る他ありません。夫人はペツと唾を私の顔に吐きかけ、勝ち誇った笑い声と共に窓を閉めました。

恐怖と口惜しさに心身ともにもうろろとなつて朝を迎え、夫人やお加代から時々気付けの鞭を貰い乍ら正坐し続けます。最早、下半身は感覚がなくなり、このまま放置されても今日、明日の中には息絶えるだろうと思いました。

ピシッ、右の腿の外側に炸裂した電気鞭の一撃に正気を取戻します。

「六十四号！ 決まったわよ……」
死物狂いの努力で体の向きを変え、足許にひれ伏して首枷を立てました。

「いいかい。擦ぐることになったわ。両腋下を五分、続いて両足裏を五分、一分休んで腋と足と一緒に十分間。一分休んで又、繰返しよ。これを二時間だつて。フ、フ、フ、もつかい？ 本当云うとね、少しは御慈悲があるのよ。この位だったら十に三つ、四つ位は命が助かるものだつてさ。フ、フ、フ、外した手錠が正規のものじゃなかったせいもあるのよ。まあ、せいせい頑張ることね。ホ、ホ、ホ、ホ、……」

やがて看守達が懲戒具を囚人達に運ばせてやって来て、庭で組立てます。Y字形の鉄のパイプが立てられ、根元に鉄箱が据えられました。知らせがあったのでしよう、絹子も来ました。恐ろしい懲戒具を眼前にして、ほんの少量の囚人食を囁らされた私は、夫人達の嘲笑を浴び乍ら懲戒具に取付けられます。ハイポンの注射、そして首環と腰枷を残して肉に喰い込んだ戒具を除かれ、例の防水パンツをはかされ、口にはくつわを嵌められて舌を押えつけられ、看守達に腕を据じ上げられ乍ら、パイプの中途に水平に出ている三角柱の上に跨がされ、両手を上に差伸べてY字形に開いた恰好で両手首を革バンドで固定されました。腰枷の後でパイプに結ばれ、更に両足首を鉄箱の中へ突込んだまま鋼鉄の環でしっかりと固定されます。ヌラリとした感触。ずっと前、受けたことのある足裏擦ぐり器です。両腋下から両脇腹にかけて、夫々例の擦ぐり器が取付けられ、看守達は電線を接続したり、工合を見たりして、夫人に合図しました。

「じゃ、六十四号！ スイッチを入れるわよ。あとは泣いても笑っ

でも、定まった時間だけ器械が働く訳よ。いいかい！」

白い指先で軽く押したスイッチ。途端に両腋に異様な感覚が走り全身がのたうちまします。舌を押さえられた口から堪え切れない叫び声の間断なくほとばしり、脂汗を流す五分間。ホッとする暇もなく、今度は両足裏をヌラヌラと擦ぐられ、自分の声とは思えない叫びを洩らしてのたうちまします。次には両腋と足裏同時です。しかも十分間、ぶっとおしの残酷な責苦！ 全く狂い死してしまいそうな苦しみです。経験のない人には万分の一も想像すらつきません。ハイポンの注射がなければ最初の五分間で完全に失神です。ハイポンを射たれていても体中を突き上げ、突き抜け、バラバラにしてしまいそうな

限定版特別号第四弾 愈々刊行

『傑作責画と写真集並に解説』

目下発売中！

定価 五百円（送共）

限定版特別号第一弾、第二弾、第三弾にて好評を博した本誌がここに放つ待望の第四弾。華麗極まりない四馬孝拙く傑作責画三十数葉と本誌新鋭モデル陣を網羅した百数十

葉の緊縛フォトのオンパレード。ずっしりと重量感のある画と写真の外に、詳細なる解説を附したこの限定版は、何はさておいても、是非一冊はお手元に。

何とも云い様のない感覚に、気がフーッと遠くなってしまう。両責めの十分間が終り、あたりのものが眼に映じて来た途端、舌に猛烈な電撃痛！ズーンと両足先に貫ぬきます。

「ギャーッ、ギューッ」

悲鳴が咽喉を破って一瞬、全身が硬直し、意識がハッキリと致します。再び両腋を責める残酷な器具。

「……男ってものはね、女より擦ぐったがるものなのよ……」

夫人とお加代の話し声。

二人の男の懲役囚が地面に正座し、腿の上で手錠を光らせ乍ら恐ろしそうに眺めて居ります。脂汗をタラタラ流し、涎れを垂らし、全身をのたうたせて、間断なく繰返される責苦に次第と弱って来る私をそのままに、皆はテラスに集まって御茶等飲み乍ら談笑の合間にチラチラと哀憫と嘲けりの視線を私に注ぐのでした。

何の因果か頑健な私の体は、この残酷な懲戒にも耐えて絶命を免れたのでした。生き長らえた所で、苦しみの日々があるだけの話ですが。パイプから解かれ、鞭を背中に当てられた時の嬉しさ！腋の擦ぐり器を除かれ、夫人の足許にひれ伏した時の喜び！頭を蹴られ両手を差出して嵌めて貰った手錠の冷い感触に全く生返った思いでした。

「お前、本当にタフだねえ。苦しかったろう？」

未だ体がフラフラし体中バラバラになった感じで声も出ません。ともすればブツ倒れそうです。強心剤かなんかの注射を受け、そのまま檻へ蹴込まれた私は安心と極度の疲労から泥の様に眠ってしまいました。

（未完）

〔告白〕

ガラスのお部屋

柴崎 黎子



いつの間にか私も二十三才になってしまいました。本誌を知ってから、もう六年になります。東京から山国へ来て、四年目、その半分以上を病院ぐらし、それでも来年の春には退院して、それと同時に東京に帰れそうになりました。

私も自分に対してだん／＼図々しくなりまして、以前のように自分の性癖に悩んだり自分で自分を模索したりはしなくなりました。だからといって自分を具体的に楽しませたり慰めたりする方法を見つけたというのでもないのです。私は、やはり自分で本当に望んでいるものを頭の中で求めつづけ、偶発的な空想の中に、どうやら刹那的な喜びを感じている始末です。

私の家は今非常に貧乏ですから、病室ももちろん大部屋です。ベッドが四つずつ向き合いに並んでおりまして、私の所は南側の一番奥です。でも部屋のまん中には白いカーテンが引かれ、横のベッドとは大きなつい立てで仕切られていますから、せまい個室のような感じが致します。

それぞれのベッドの頭の方に備えつけの机があつて、ベッドにねていても自由にその上のものがとれるようになっています。私の机

の上には文学全集が少しと新刊の小説類と、自製のぬいぐるみ人形が五つ六つ並んでいきます。私は動物が好きですから、犬やネズミ、ウサギやカッパなどです。その中で一番のお気に入りがかっぱで、みどり色の手の掌に入るほどの大きさです。彼（彼女ではありません）には、私の一番思い出多いある青年の名がついているのですが、その方も本誌をごろんになっているでしょうから御紹介できません。手足はある程度動き、大きく開いたり、あくぐらに腕組み位はできます。

彼は私の膚をよく知っているのです。私は寂しくなると、よく彼を胸の上にのせたり、お腹の上に寝かせたりするからです。その小さな手足が私の皮膚をこちょ／＼撫でまわす時、私はうっとりして楽しい感覚の世界にひたるのです。彼はお人形ですから自分で動いてはくれませんが、私の手が彼の手足を膚にはわせるのです。いつもつい／＼悪い癖が出てしまうので、このカッパちゃんは私のとんでもない所まで知っています。

そんな遊びが導火線になったりして、私の生活の唯一の慰めは、やっぱりとりのめのない空想の世界に浸ることです。私は今、こんな事を考えています。

ある大きなお邸にとらえられて来て、一室にとじこめられるのですが、その部屋が少し変っていて、一方の壁が隅から隅まで大きな鏡になっています。鏡のようになっていても実は向うから見れば透明なガラスに過ぎないのです。部屋は、ま四角で、きれいなじゅうたんが敷きつめてあって、調度品はベッドだけ。そのベッドの上には透明なビニール様のものでできた、あたたかい毛布が一枚きり。更にその部屋には浴槽と便器がついています。浴槽は日本式の五右衛門風呂ですが、これも

ガラス製で透明です。これに入るには、ずい分、伸び上がってふちをまたがなければなりません。便器は洋式の腰かけ型ですが、これも上から下まですっかり透明なものでできているのです。部屋全体が天井のガラス窓からさしこむ日光で明かるく、ポカ／＼と暖いので、着物を着ている必要はなく、全く形ばかりの小さなブラジャーとパンティ。こうして一歩もこの部屋から出る事のできない生活が何週間かつづくという訳です。

ここで当然営まれる生活を演ずるのは勿論私ですが、鏡である筈の、ガラスのこちら側の豪華な居間で（又は客間で）、そちらを眺めているのも私です。私は二役を演ずる訳で

すが、でもどちらかの演技に熱中するとして、どうしたって、その捕われの少女の方です。捕われといいますが、心中朗らかで何の苦しみも伴ってはいません。ただ、その鏡のむこうからいつでも覗いているのだという事を宣言されて、自分のおかれた境遇をよく承知しているのです。私は本心は見えて貰っても苦にならないのですが（というより、正直に申せば見てほしいのですが）、こういう状況下なら、「仕方ない」とあきらめて、困惑したふりしながら、すべてを行います。「仕方ない」という条件のもとで私が羞恥の営みをしなければならない、これこそ私の本当の喜びなのです。

私の方からは、むこうの部屋の有様が見えませんから、いつだれが見ているのかはわかりません。でも時々来客があつて面白そうに眺めている筈なのです。それでも朝夕は入浴しなければならぬし、おトイレもしない訳にはいきません。

こんなガラスばりの空想は今までにも、いろいろ致しました。子供の頃ですが、ある温泉に浴場の腰板の部分が水槽になっていて金魚の泳いでいるお風呂に入った事がありました。あの水槽が私には忘れられず、自分もこ

のまま金魚のように泳いでいたいと今でも思うのです。でもこんな大人になってしまつてはもうあの無垢な金魚の仲間入りをする事は無理でしょう。公衆浴場で小さな女の子が平気で立ったりしゃがんだり、はねまわって遊んだりしているあの位の純真さが不自然でない年令でなければ、もう誰も喜んで見てはくれないでしょう。

ところでガラスばりの空想は、いつも本当の満足は与えてくれません。あれだけの内容では、とっても物足りないのですし、現実味に乏しいだけに、どうしてももどかしいのです。ですから、ちょっとした事で現実の体験の方がよほど私にはすばらしいし、それから始まる連想の方がずっと素敵です。

入院してからしばらくの間、私は毎日午後注射されました。回診のお医者様にされる事もあるし、看護婦さんの事もありました。腰部の筋肉注射で、あとがとても痛いのですが私はその時間が楽しみでした。

「具合はどうかね？」



武

といいながら俯臥した私のユカタを無難作にはねのけ、パンティを片側だけずりおろしてひょいと肌をつかみ、ブスッと針をつきさすのです。先生は日によって違いましたが、みんな同じやり方でした。私は、いつももどかしくて、いっそ裸にしてやればいいのと思うのでした。

ある時おトイレの帰りに私の反対側のベッドにいた四十才位の患者さんが、下穿きもしないで注射されているのを見ました。その女の人は持ち物も和服ばかりでしたから、きっと私達とは違う下着を用いていたのかもしれませんが。私はそれを見て、私がそうしたらおかしいだろうか、それとも他の人にもそのような患者さんがいて平気だろうかとずい分、考えました。でも、とうとう誘惑の心の方が強く、私は看護婦さんだけで回って来そうな日曜日をえらんで、実行しちゃったのです。

私は朝から下穿きを取って不自然でないように平然と装っていました。でも期待と不安とで、どうしても落ちつきませんでした。もし先生が来ちゃったらどうしよう、もし笑われたらどうしよう、とそればかり考えていました。そして、その場近くなあって勇気がなくなったら大急ぎではこうと思つて、ちゃんと敷布の下に用意して、まるめ

こんでだけはおきました。

いよく看護婦さんが来た時、私は、まだ順番が来ないうちからどきどきして、裾をしっかりと足に巻きつけて、うつ伏しました。そうして、もうこのまま動けないのよ、と自分にいい聞かせて、じっと待っていました。顔は赤くなって、耳までがそまっては大変と思しながら、私は必死に自分とたたかいました。やがて看護婦さんが来て、何かいいながらいつものように裾をもって、私の足の下からユカタを引き出すと、一気にまくり上げました。私は、はっとして、しっかりと足をとじていました。その途端、看護婦さんは、

「まあ、ホホホ……」

と笑いました。私は心の中で、しまったと思いました。もう間に合いません。でも三十才を過ぎた看護婦さんは、それきり何もいわないで注射してくれました。そして裾をおろしてくれながら、

「冷えちゃいますよ」

朗らかな声でいいました。私は大急ぎで毛布の中にもぐりこんでしまうほかありませんでした。

それで、その考えはやっぱり不自然だと悟って、それきり二度としませんでした。で

も、その後、幾度となく思い出しては、胸をときめかしたものでした。

私達の部屋は軽患だけです。毎日二回散歩が許されています。今は午前九時からと午後三時半からとです。そんなに大きな病院ではありませんので庭も狭く構内はつまらないのですが、外に出ると自動車道路があつて片側が雑木林の丘、片側が畑になっていて、少し行くと百戸ほどの部落があり、郵便局もあります。あまり自動車も通りませんので静かで、この道が主な散歩道になる訳なのです。私は部落に従弟のお友達がいたりして三、四軒、親しくなった農家がありますので、時々その庭へ行って遊んだりして来ますが、大抵は林の中に腰を下ろして草や落葉などを弄びます。都会育ちの私には、この土や草の匂いは何ともいえない魅力があります。私の散歩の相手は、男の患者さん達や遊びに来る従弟や、むこうから誘いかけて下さる小母さんなど、いろいろですが、近くの町から来た小林さんという二十七、八の小柄な肥った人と一番気が合いますので、大抵この人といっしよです。小林さんは結婚して一年して発病したので、お気の毒に旦那様の家できらわれ寂しい思いで療養しているのです。決して美

人ではありませんけれど、話してみると教養もありますし、何でも朗かに云つてのける気さくな人です。旦那様は月に二度か三度、お見舞に来ますが、いつも長くはいません。小林さんにいわせると、気が小さくて女ばかりの部屋に、はいられないのだそうです。旦那様は、すらっとした公務員の紳士なのですが、小林さんと並ぶと身体つきが正反對の感じで、ユーモラスでさえあります。それに性格も反対なのだそうで、小林さんが屈托なく何でも平気でしゃべってしまうのに対して旦那様は、とても「お上品」な話し方をなさるという事です。実際、小林さんは人の批評でも自分の身体の事でも、私などにはちよつといえない事を、どんく云ってしまうのです。でも、それは決して嫌な感じではなく、私もつい他の人にはいえないような事まで口にしてしまうのです。

この小林さんの口癖はどうでしょう、

「ああお腹がはった」

なのです。

「寝てばかりいるから腸の働きがぶつちゃうね。いつもお腹の中にたまつてて、すつとした事がありやしない。あんななかどう」
そう聞かれると私もつい、

「そうね、どうしてもね」

なんて告白してしまいます。本当に寝ているせいかどうか存じませんが、便秘しがちで困ってしまうんです。

「又、三日もありゃしない」

などとはしながら、小林さんは実によく食べます。旦那様の持ってきてくれるお菓子など、さっさと食べちゃって、散歩の時には部落の雑貨店で、又お菓子を買ったたりしているのです。お金なしの私なんかでは、とても真似できないほどです。小林さんは自分でも笑いながらいうのですが、本当に「エンゲル係数百」です。

「これをたべると、お通じがつくよ」

変な草の実を教えてくださいましたが、それを食べてみせる小林さんが、いつでもお腹をふくらませてこぼしているのは妙な感じです。

私は一度も実験してみません。

「浣腸してみたらどう？」

といえたのも、相手が小林さんなればこそでした。

「やあだ、誰がしてくれるのさ」

と彼女は笑いましたが、きつと一度も経験がないのでしょうか。私などはその言葉を聞くだけでも、いくつもの思い出が胸を騒がせる

のですが。

「この近くに薬局があれば御自分で買って来てなさればいいのにね。でも、あなた位重症だと、いちぢく一つや二つじゃだめかしら」

と私も、おしまいは冗談にしようとした。ですが、本当は私は一つだけそれを持っているのです。使うためではなくて愛玩用なのです。それは古封筒に入れて机の引き出しの奥におさまっています。でも、それが惜しいという訳でもなく、まさか持っているとはいえないのでした。

もし——と私は考えるのです。もし私が二つ持っていて、してあげるといったら小林さんは拒むでしょうか。いいえ、何とかかんとかうにしても、結局は応ずるに違いないと思うのです。そして私は喜んでしてあげてしょう。すると今度はもう一つあるのを見て、私にもしてあげるというに決まっています。そして結局、私も彼女の前に身を横たえるでしょう。それは全くありうる事なのです。二つありさえすれば——。

場所は、小林さんのベッドか、この林の中か、それとも病院のおトイレの中か——。その最後の場所が一番、私の気に入りました。そこでは「仕方なく」一番刺戟的なポーズを

取らされるでしょう。けれど小林さんは、きつとそれはいやがります。私のような露出趣味を持たない彼女は、毛布の中で手さぐりでしてほしいというかもしれません。

たった一つのいちぢくですが、これが私の不聊を慰めてくれた回数、カッパちゃんなどの比ではありません。私は夜、枕の横にそれをおいて、腰ひもといて片足の膝と片手を縛り（といっても結ぶことはできませんから、くるく／＼巻きつけるだけです）、横臥してじっと見つめるのです。又は両膝にひもをかけて胸の方まで引きつけてから見つめるのです。そうして縛られて身動きできなくなった私に、誰かがそれを取り上げて施術しようとするのです。その誰かは小林さんであり従弟であり、かつての恋人であり、お巡りさんであり——。

小林さんは又、よく他の患者さんのスキヤンダルを聞きこんで話してくれました。だれさんと男患者のだれさんが仲がいいとか、関係があるとかです。それが時々ある所を見ると話半分に聞いても、私などの思いもつかない場所でアベックができあがっているのかもしれない。私は別に男の人と親しくなりたいとは思いませんが、私の願うような関係で

懸賞募集

優作	一篇に付	一万円
秀作	〃	五千元
佳作	〃	二千元
選外	本誌三月分進呈	

△読者原稿▽〔告白と手記と体験〕

☆賞 金☆

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数には制限ありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」とエピソードを書いて下さい。
- 一、締切は別に定めません。入選作は最近号より発表いたします。
- 一、賞金は掲載一カ月後にお送りいたします。

なら、そんな仲になってみたいとも思いました。ですが若い男の患者は少なく、その人達はどうも好めないタイプですし、あとは中年老年の人ばかりなのです。私は自分の父に近い男性には、どうしても特別な感情を抱く事ができません。お年寄りならお年寄りで、もう異性を意識しない位の人でしたら、私も何となく安心して浣腸位してもらう気持ちになれるのです。

さて最近こんな本を読みました。それはサドの「悪徳の栄え」の第二巻なのですけど、この本は初めから終りまで、すっかり私を魅了してしましまして、こんな物語を恐ろしいとも思わずに読めるようになった私は、ずい

分、精神的に墮落してしまつたのかしらと感ずるほどでした。難しい哲学めいた部分は別として、その中に登場する犠牲者達は、みんな私がどんな事をしてかわつてみたいと思ふほど私をあこがれさせ、夢みさせるのでした。中でもヴィルジニイという十八才の美しい少女がヴェニス共和国の大法官ゼノという人の犠牲になる場面は、すっかり私の心を奪つてしましました。ヴィルジニイは貴族グリマニの娘でムジツの罪で捕えられた父を助けようと、ゼノの所へ哀願に来たのです。所が大悪人のゼノは父を助けてやるとだまし、その実、即刻、死刑にせよと記した手紙を彼女の目の前で使者にもたせ、その代償として彼

女の身体を無理やり弄んでしまうのです。その場面はここへはちょっと引用するのもためらわれるほどの描写ですが、ある一部分だけぬいて記してみよう。

あたし（主人公ジュリエット）と女中がたちまち彼女を掴まえて、大法官のみだらな視線の前に、嫌がるのを無理やり身ぐるみ剥いでしまいました。

ああ！それは何という美しい身体、何という肉体、何というみず／＼しさ、何という肌の色でしたらう！花の女神フロオラだって、これほどの魅力はなかったでしょう。ゼノはいくら眺めても飽き足らず、みだらな接吻を与えるたびに、さらに新たな魅力を発見して行くようでした。殊にそのお尻ときたら、むっちりしていて、丸々と肉づきよく、譬えようもない美しさです！……

私はその少女を自分におきかえて空想をつけないではいられませんでした。

——今日のもっといろいろ書くつもりでしたけれど、大変疲れてしまいました。又そのうちに、つづきを書きたいと思います。とりとめのない文でしたけれど、あしからずお許し下さい。

（おしまい）

当代女武勇列伝

諸岡堅雄

男の武勇伝は、ちっとも珍しいものではないかもしれませんが、女の武勇伝となると、いまもむかしも珍しいものとされているようです。ほとんどの場合は、妻が柔道をやっていた関係で、ずいぶん奇抜な彼女たちの武勇伝を、見たり聞いたりしましたが、しかしそれは後年の話。そのまえにも女豪傑列伝の中に加えられるべき幾人かのお嬢さんに接したものです。ケースそのものがやはり珍しいものだけに、いまそれを活字にして記録に残しておくことも意義のあることだともい、本誌上をかりて女武勇伝の数々を、これからお伝えしようという

わけです。最初の女性には、ほとんどの学生時代に、もっとも手近かな異性だったK子さんに登場願うことにいたします。

一、

大学在学中に父が東京へ転勤になったので、ぼくは京都の郊外（げんざいは伏見区）の深草に下宿し、そこから学校へ通っていた。近くにS寺というお寺があり、きれいな姉妹が住んでいた。姉はM子、妹がK子。下宿先の一家がそのS寺の檀家だったので、いつしか

などをよく見にいったものだ。

M子はまだ女学校（もちろん旧制）を卒業し、養子のくるのを待つ番だったが、K子はまだ宗門の経営するK女学校へ通っていた。いまはどうか知らないが、当時京都でK女学校といえば、勉強のできない、また勉強のきらいな娘たちばかり集まっていた。不良の多いことでは有名であった。不良といっても、いまのズベ公とはだいぶ違うが、しかしそれでも桃色遊戯で、よく新聞を賑わしたものである。しかしK子はそうした桃色遊戯撲滅の先頭に立って、「鉄拳」をふるっていたのだ

から、世間でいう不良とはすこし意味がちがっていた。

暴行、傷害といういかめしくなるが、とにかく相手を殴りつけ、傷を負わせたことが罪に問われて、彼女は幾度か、停学処分を受け、おかげで十九才になっても、まだ学校を卒業できないでいた。ぼくが知り合ったのはちょうどその頃なのである。そして知り合ったとたんにもまた彼女が武勇を発揮したのだから、「こいつは噂以上のお嬢さんだ」とぼくも舌をまいてしまった。

不良女学校という世評があまりにも高かったので、Y女学校の生徒が制服姿で四、五人もならんで向うからやってくると、他校の女学生たちはあわてて道を避けるか、横丁にかくれて「難」を避けたが、反対に中学校の腕白小僧たちは、わざと彼女たちの隊伍の中へ割って入り、卑猥な言葉でからかったものである。

しかしK子に殴られた中学生は、その動作が少し念入りにすぎた。彼はK子とすれちがいざま、右手で彼女の顔を下から上へ逆撫でし、「お前、別嬪やなあ」といった。手をふれられたことでK子はカッときた。これはあたりまえだが、それからさきがいかにK子

らしかった。

「ちよっとお待ち。いま何言ったん？」

呼びとめられたくだんの中学生は、すこし勝手がちがうという風情だったが、一対一ということで、安心したのか、逆に居直ってきた。

「別嬪いうて褒めたんが、気に入らんのか」

「何やて？ お前みたいな不良に別嬪いわれたら、ぞっとするわ！」

「不良はお前のほうやろ？」

「何ぬかす！」というより早く、彼女は足をあげて思い切り相手の向う脛を蹴り上げた。

「痛い！ 何さらす！」

中学生は手にしたカバンを地面にすてると両手を広げてとびかかろうとした。しかしそれより早くK子はすばやく一步ふみ込んで、得意のメリケンを入れていた。これは一発で効いた。相手は目まいがひどかったのだらう、そのまま崩れるように地面にのびてしまったが、K子はいくつを蹴ったり、靴のまま踏みつけたりした。白昼の出来事だったし、人通りも多い伏見街道だったので、たちまち辺りは野次馬で人の山。

「強いなあ、あの女……」

「どこの娘や」

「S寺の暴れ娘やがな」

「このままやったら、あの学生、可哀相や。巡査、呼んで来たれ」

このときもK子は相手に怪我をさせてしまった。目の裂傷は大したことはなかったが、耳の付け根や脾腹を蹴り上げたので、内出血がひどいということだった。幸い警察沙汰にはならなかったが、学校当局をひどくおこらせ、また停学処分ということになった。

二、

ぼくがK子に

「Kちゃん、あんまり無茶するんじゃないぞ」というと

「あんたまでそういうの？ うちのどこが悪い？ 悪いのはあっちやないの？」

「それはそうだが、怪我させたのがまずい」

「そやけど、わざと怪我させたんじゃないのよ。起き上がってまたかかって来よったら困る思うて、蹴り上げたんや」

「それがいかんのだ。無茶に蹴ったり、踏んだりしたら、相手が怪我するにきまつてる」「そやかて、男やったらときは、(男をやっつける場合は)それより方法がないやないの？」

「Kちゃんなんかはいっそのこと、柔道でも習うんだな。柔道だったら絞め技で相手を参らせることができるからねえ」

「あかん。あんなもん。喧嘩のとき役に立たん。メリケンが一番、役に立つ」

まずこんな風であった。そしてそのメリケンがまた役に立った。次ぎは滋賀県出身、住所不定の空巢狙いで、K子のメリケンをまっ向から食らって伸びてしまったのである。これは新聞にも出たので、ご存知の方がいるかも知れない。

「あつ、Kちゃん来てえ！」という姉のけたたましい呼び声に、姉の部屋へとんでいくと、三十四、五才のおっさんが姉と向き合って立っている。

「こいつ、空巢や」

姉にいわれないまでも、部屋中がひっくりかえされていることから、すぐ分った。

「よっしゃ。うちに任しといて。姉さん、巡查、呼んできて」

「あんた一人で大丈夫か？」

「そんなことええさかい、早う巡查、呼んできて」

姉が立ち去ると、K子はつかつかと賊に近寄り

「その手提げ（金庫のこと）そこへ置いて、早うお帰り。帰らんと巡查、来るぜ」

しかし賊はそれに答えず、手提げを小脇きにかかえたまま、風のようにK子のそばをすり抜けようとした。娘一人と侮ってのことであつたろうが、これが失敗のもとだった。その瞬間、K子の猛烈な足払いを食い、前のめりにつんのめってしまったのである。

K子は賊の背に跨がり、上から絞めにかかったが、たちまち男の力で跳ね返されてしまった。とび起きた賊は、取り落した手提げをかかえ込むと一目散に本堂のほうへ逃げていく。しかし脚力ではK子のほうが数等すぐれていたとみえ、本堂の広間でまた組んずほぐれずの大格闘になった。間もなく巡查が来るのだから、賊のほうは一刻もはやく逃げたかっただろうが、K子にしてみれば巡查がく

るまで時を稼げばよかった。こうした両者の心理の違いが、K子を断然、有利にした。

賊はからみついてくるK子をようやくふりはどいて広い廊下を逃げ出したまではよかったが、家の勝手が分らなかったとみえ、突き



当りの便所へ逃げこんでしまった。こうなると汲み取り口から逃げるよりほかはない。古いお寺の便所なので汲み取り口は大きく、大の男でも自由に出入りできるほどであった。だが便器は小さいので、もぐり込むためには便器を外さなければならなかった。しかし賊がそれを持ち上げて、便所の隅に立てかけた瞬間、K子に追いつがられてしまった。

振り向いた賊の顔面に、K子得意のパンチが一閃。「うわあッ」という悲鳴とともに、相手はその場にのけぞってしまった。お寺の便所はひろかったため、賊は幸いにも糞壺へ転落しないですんだものの、首からさきは壺の中へつつ込むような形となって、その場に伸びてしまった。

やがて姉に導かれて巡査がやってきた。K子はと見ると、賊の上に馬乗りになり、両手で相手の頭髮をつかみ、頭を糞壺の中へねじ込んでいた。

「こんな臭いところで、えらいこっちゃな」姉のM子がそういうと

「ほんまや。こいつは臭い飯食べてるさかい、臭いニオイも平気かも知らんけど、うちは堪らん。窒息しそや。お巡りさん、早うくってしもうて」

K子がそういうと、人のいい老巡査は

「えらいすまんこってす。もうよろし。わたしにまかせておくれやす」

三

K子の武勇伝は、当時はえらい評判であった。写真入りで記事を載せた新聞もあったし、柔道は武徳会二段の腕前というウソ記事を書いた新聞もあった。いまなら週刊誌があること、ないこと書きまくり、いっぺんにヒロインとなるところだ。

「賊の立向ってくることをK子さ

んは得意の背負投げでズンドウと投げとばし、ひろむところを難なく取って押えた」

「K子さんは賊をしっかと膝下に組敷き、利き腕を振じ上げると、じぶんの帯をほどいて縛り上げた」

「K子さんは素早く当て身を食らわせ、賊がひろむすきに、上から抑えつけ、どっかと馬乗りに跨った」

どの記事もみんなウソばかりで、「真相」はいま書いたとおりである。

「新聞だけよんどると、Kちゃんはまるで巴御前か、板額みたいや。男の人こわがって、



お聲さんになつてくれへんがな」

「そんなことかまへん。うちお嫁になんかいかへんさかい」

「そやけど、雪隠攻めのこと、どこも書かへんかったので助かったわねえ」

「ほんまにそや。あんなこと分ったら、何書かれたか分らへんもんね。うち、恥しわ」

「お巡さんもええ人やから、あれだけは黙っててくれはった。あのときの、あんたの恰好いうたら、なかったもんな。臭いところで色気だして……」

「それ言わんといて。恥し(い)。」

あとで分ったことだが、あのとき彼女は着

物に腰巻き、つまりズロースをはいていなかったのだ。そして賊との格闘で胸ははだけ、裾は乱れ、最後の雪隠攻めで相手を抑え込んだときは、ほとんどまる裸の恰好だった。姉のM子が「臭いところで色気だして……」といったのは、そのためだ。

やがてK子にも卒業のときがきた。

「Kちゃん。これからの女はせめて専門教育ぐらい受けておかないとだめだよ」

と、ぼくがいうと、

「うち、勉強きらいや。それに戦争やし……看護婦志願したらどやろかと思うて、姉さんに相談したら、あんたみたいなあわてもんには、患者さんは預けられまへん、言われてしもた」

まだ太平洋戦争へ突入するずっと前のことだったが、しかし日華事変はどろ沼の様相を呈し、世の中は日を追うて軍国調一色に塗りつぶされていった。第十六師団司令部のおかれていた深草一帯はことにそうであった。K子がカーキ色の乗馬服に、赤皮の長グツを穿いて乗馬しはじめたのも、そのころだ。

「うち、兵隊好きや。師団前の倶楽部で馬に乗ってると、じぶんが兵隊みたいな気になって、ええ気持ちや」



「そんなに兵隊が好きなの？」とぼくがきくと、手放して兵隊礼賛をやるので、ときどき困ったことがある。勉強ぎらいな女性だけに書物からくる教養は何一つ身につけていなかった。軍服にあこがれたばかりか、ついにはじぶんで軍装するようになった。このようにして軍服フェティシズムは、ヨーロッパだけ

ではなく、日本女性のあいだにもあったわけだ。

将校のような服装で、毎日のように馬を乗りまわしたので、たちまちまた街中の評判になった。

「まるで男（おとこ）女（おんな）やなあ。見てみい。偉らそうな恰好しよって」

「なんや。あいつ馬に乗ってタバコ吸うてるがな。生意気な娘やな」

深草というところはカビの生えたような古くさいところなので、かの女の評判はひどく悪かった。だからときどき、石をおつつけたり、竹竿で彼女の愛馬の尻をつつつくやつがあった。これでまた彼女の武勇伝が何頁かふえることになるが、紙幅がないのでやめる。しかし田舎道で痴漢を殴りつけ、肥え溜めに叩き落した一件だけは傑作だった。当時の模様を彼女の口をかりてお伝えすると、こういうことだ。

「阿呆なやつやないの。じぶんから足の間へ首つっ込んできよったのよ。こっちも尻餅ついたけど、両脚で首締めてやったら、”カニシテ!” いうの。もうせえへんか” 言うたら、”シマヘン” 言うたさかい、締めてた脚ゆるめたら、上からかかって来よったんよ。しかしこっちは乗馬服に長靴や、どないに暴れても恥しことなかったよって、足あげて下から胴締めやったの。毎日、馬に乗ってあの太い胴を締めてんねやから人間の胴ぐらい知れたもんや。どや? 降参か? きいても黙っとったさかい、ちよっとメリケン入れたったの。それから、もうええとおもて起ち上が

ったら、また腰にしがみついて来よったから、こんどは足かけて投げつけてやったら、ひょろひょろっと前へ泳いで、肥え溜めへ勝手に落ちよったわ」

五、

太平洋戦争がはじまって間もなく、彼女は結婚した。相手は理想どおり職業軍人だったが、妻も子もある人物であった。やがて一子を設けたが、こうした結婚がうまくいくはずはない。しかも終戦と同時に軍人株は暴落した。彼女は子どもをつれて遠く桂ヶ丘へ去っていった。

ぼくは先日にも社用で京都へ行き、桂ヶ丘の彼女のところで三晩ばかり厄介になった。子どもはお嬢さんで、もう高校二年にもなっている。母親に似て勝気なうえに、身体はひとまわりも大きいように見えた。

「若いときはほんとに無茶して、いまおもうと恥しいことばかりです。諸岡さんにいわれたとおり、やっぱり勉強しといった方がよろしおしたわ」

「いや、いや。人間だれでも年を食ってくる、後悔ばかりがさきに立つもんだ。しかしK子さんなんか、好きなだけ暴れたんだから、

思いのこすことはないはずだよ」

「わたしの武勇伝ですか?」

「そう。いまでもやっぱりあれこれ思い出すだろうね」

「そうだなあ。S中学生に大怪我させたこと、空巢狙いをお便所で取り抑えたこと、それから痴漢を肥え溜めへほうりこんだこと、あとまだまあ、たんとおすけれど、あんまり数が多いて、覚えてませんわ。ほっほっほ」

ぼくもつられて大声で笑った。もう彼女も年は四十に近いのではないか。しかし相変らず若々しくて美しい、終戦直後のあの苦労のあとがすこしも面影に残っていないのだ。

「K子さんはいまでも若くてきれいだが、何かスポーツでもやってんの?」

「なんにもしてまへん。馬も終戦のまえやめたきりです。食べ物がのうて馬はひよろひよろ、それに乗る人間さまも欠食つづきで、あれでは気のきいた乗馬はでけしまへんがな」

「でも、いまは人馬とも營養満点じゃないの」

「スポーツいうたかて、わたしは馬しかやらしまへん。しかし馬は見た目が派手やから控えてます。お宅の奥さんみたいに柔道やったら、家でもやれるからよろしおすな」

「その点はたしかにそうだな」

「強い奥さんもろて、諸岡さん、いまでも毎晩エイツ、ヤツと抑えつけられてんのと、ちがいますか」

「それや、たまには負けておかないと、サービスが悪くなるからねえ」

「女には負けておきなさい。その方が万事が円満です。人前でなんぼ偉そうにしてもよろしおすけど、夜さは、女にあんじょうせんとあきません。別れたあの人も夜さりだけはどう動めてくれました」

それなのに、なぜ離婚したのか。そんな立ち入ったことはききたくなかったので

「K子さんに、あんじょう」しなかったら、

また例のメリケンがとぶからなあ」

と、ぼくはまた話題を彼女の武勇伝に転じようとしたが、

「もうあんな無茶なこと、できますかいな。子どもがもし親に真似てあんなことしたら、必死にとめるつもりです。」

「いいじゃないか。悪いことをするやつをこらしめてやるんだから……」

「しかしその武勇伝がたたって、まだ再婚もでけん女がここにおりますかな」

「しかし、その武勇伝にこがれる男は、案外多いもんだよ」

「世の中は諸岡さんみたいなええ人ばかりとは限りません。諸岡さんはわたしがどんなに

無茶しても、いっぺんも怒ったりしなはらなんだ。悪い評判が近所からたつても、いつてもわたしをかぼうてくれはりましたな。戦争さえなかったら、わたしは専門部へ行って勉強し、諸岡さんの奥さんになっていたかも知れまへんな」

ほんとうに人間らしいK子さんだ。ただ彼女が暴れ娘だったというだけで「不良少女」の烙印をおした当時の世間を、ぼくは憎んでいる。

(この項つづく)

追伸。今回は富岡鉄斎画伯の孫娘を予定しています。いまでいうビート族の「大正版」といったところですよ。

ひと夜さに縄をしごきて縛りたる

この踊子は
何の罪ぞも

麻縄の縄にくくられ

後手の

いたみを遠くおもひ出づる日

いのちなき縄のかなしさよ

きりきりと

しめれば女肌はだのあひだより見ゆ

戯歌集

一握いちあくの縄なわ

石川いしかわ豚木ぶたぼく

一握の縄を示しし女忘れず

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
縄とたはむる

頬につたふ
なみだのごはす

いたく錆びし手錠いで来ぬ
砂山の
砂を指もて掘りてありしに



ひしひしと
女をしぼる麻の縄
女はしぼるものにしあるかな

たわむれに美女をくくりて
そのあまり憎きに小突きて
三步あゆまず

こころよく
われに縛られる美女のあれ
美女を縛りて泣かさむと思ふ

くくられて押入の隅に
ちちこまる
ゆうべゆうべの妻のいとしさ

踊子を思ひのかぎり
しほりあげ
しほりあげにしときめく心

愛妻の耳斬りてみぬ
あはれこれも
縄に倦みたる心にかあらむ

縄、縄、縄
不思議なるかな
それをもてしごけば女縛りたくなれり

森の奥より悲鳴の聞ゆ
あはれあはれ
くくられる女の声のよろしさ

怒る時

かならず一人美女縛り
九百九十九縛りて死なむと思ふ

いつも逢ふ電車の中の少女の
腕の縄目の

あとぞ気になる

鏡台の前に立たせば

処女のごと

はずかしげにも身をよぢるかな

何となく女縛りたく思ひしのみ

縛りあげしに

引廻す所なし

空屋に入り

女しほりたることありき

あはれたださるぐつはしたきばかりに

やはらかにかがやく雪の

やは肌を荷物のごとく

くくりてみたし

手の足も

力一ぱいのばさせて

はりつけ柱にくくる女よ

高きより飛びおりるとき心もて

有馬稲子を

縛る術なきか

連載第三次元小説

影^{かげ}

の

国^{くに}雪^{ゆき}俊^{とし}遙^{はるか}

バッテリーとクレンザー

気がついた時、多与子は森のままで地上に寝ていた。手足を固く縛った縄目は、そのままだったが、赤熱した串を縦横十文字に何本も突き刺される筈だった腹部は、申訳程度ながら白布で覆われていた。焼串は空しく地上に散乱していた。

その一本を一人の女が持っている。女は軍服姿で革長靴をはき、革の手袋をしていた。鉄串は先半分が赤熱して後半分は黒いままだったが、それでもそこを驚嘆みにしている革手袋からは、薄い湯気と一緒に革のあぶられる異臭が流れて来る。気持の悪くなる様な臭

いだったが、多与子はお仕置の続きに遇っている様な恐怖感で、それは少しも気にならなかった。焼串の先は真直に三田英子の咽喉を擬していた。軍服の女は、冷ややかな顔色で命令した。

「むごいことは、おやめなさい。こんな罪もない少女を処刑したら私達の革命は後世の非難を免れないでしょう。私達は大きな理想の為に闘っているのだから、復讐の鬼にならないといけない理由も必要もないのよ。保守党が私達を捕えて言語に絶する拷問を加えたら、甘んじて受け、雄々しく耐えましょう。でも私達が権力を行使する立場に立ったら、同じことを決してはいけません。世の残酷好きな人達を、恐怖ではなく、慚愧と罪悪感によって改心させ

る事が、そうしてこの世から永遠に拷問と奴隷制度を無くする事が、私達の究極の目標なのです。さあ処刑の中止を命じて、残った二人だけでも死刑を撤回しなさい。そして既に殺された人達の死骸は鄭重に葬っておやりなさい。磔にしたり梟首したりすることは愧ずべき、野蛮な行為なのです」

央子は、女の甘い、ロマンチックな演説を冷笑する様な顔で聞いていたが、流石に焼串を咽喉に突きつけられて沈黙しているだけだった。その間に女の部下が手分けして、多与子姉妹はもとより、芳江達、人間舗石として刑場に並べられている捕虜の女を全部、石を砕いて釈放した。彼女達は皆、裸だったが、女の部下が刑場近くの洋品店から衣服を探して来て着させた。

軍服の女が、その代金を払おうとすると、

「影の国のジャンヌ・ダルク、中島茂子將軍でございましょう。私も以前破産して女房と娘を差押えられて奴隷に売られた時、貴女の部下の方に助けて頂いたのです。お蔭様で今はこうして何とか商売を続けながら家中円満にやって居ります。御恩返しの方分の一にもなりません、それ位の代金は立替えておきますから……」

と固く辞退して受けなかった。

罪人がすっかり釈放されて喜び勇んで消えてしまうと、將軍は焼串を槍投げでもする様に無難作に投げた。それは百米余りも宙を飛んで、新町溪谷の急流の中に消えて行った。

「綺麗な奥さんなのに凄い力を持ってるなあ」

お仕置を中絶された不満も忘れて、群集は驚きの目を見張って、恐らく一人残らずが始めて見る「影の国」の有名な伝説的女丈夫の勇姿を見詰めていた。

「將軍。貴女が革命第一の功労者であることは誰もが認めて居ります。貴女はここ数年来、白馬に跨り、勇敢な精鋭の手兵を引連れて、此の国の山谷至る所に神出鬼没の活躍をなさって、数多くの奴隷や、死刑宣告を受けた有力な女権黨員を救出なさった。私も少女時代、貴女に憧れ、貴女の様な人になりたいと思って、地下運動に飛込んで行った女の一人です。私は今でも貴女の勇氣と行動力を尊敬しております。併し貴女は今、間違った事をなさいました。革命家というものは、地下運動の天才であるだけは満点とは言えないのです。革命が成就したその日から、革命家は為政者になります。失礼ながら貴女は革命後の社会に一市民として生きる為の感覚を全く欠如して居られる。尊敬する貴女の将来の運命を思うと、私は心に慄然としたものを覚えるのです」

三田央子は、まだ蒼ざめた顔のまま、冷静にいった。

「御忠告有難う。然し私も忠告しておきますが、貴女が保守黨員の様に、反対派の女の拷問を楽しんでいる今此の最中でも、私達の同志は第一線で多数の政府軍と闘っているのです。私達は只、新町区とその周辺、僅かの土地を解放したというに過ぎず、首都の大半はまだ保守党の領土なのです。ここで一敗地に塗れば、貴女も私も首に荒縄をつけられて、野良犬の様に刑場に曳かれて行く哀れな国事犯になるだけです。そんな状態の時に、革命後の社会に一市民として生きる為の道徳などを考えて居られては耐ったものではありません。貴女がまだそんな世迷言を止めないなら、私は革命軍司令官としての権限を行使して、貴女を一兵卒として召集し、第一線に送り込みますよ。解放地区の行政を管轄する革命治安委員会に、貴女の變な人物は不適當です」

央子はまだ何かいいたげだったが、口惜しさに身を震わせて口ももっている間に、茂子將軍はひらりと愛用の白馬に跨り、部下達を引連れて風の様に刑場を去っていった。

央子は学芸連以来の側近の同志を呼んで、茂子が何の用で急に前線から戻って来たか調べる様に命じた。

「此のままでは治安委員会の權威に傷がつきます。中島茂子が前線に帰ったらすぐ、今、刑場から逃亡した罪人達を逮捕しますから、全員の行方も厳重に監視している様に」

彼女が宿舎にしている小林幹子の邸に戻ってみると、玄関の所に保守党政府の婦人警官の制服を着込んだ島田啓子が立っていて、笑いながら、さっと白い手袋の右手を挙げて敬礼した。学芸連以来の側近の中でも一番可愛がっている娘だが、たった今、群衆の目の前で茂子に侮辱されて、むしゃくし



やしている央子は、ニコリともしなかった。

「三田さん。日の出町駅の広場から、川島宮子と娘を一人うまくだまして連れて来ました」

啓子にとっては言わば親の仇の様な存在の川島母娘である。啓子は息を弾ませ嬉しそうだ。

「バカ。何言ってるの。そんなけちな事をする為に君は日の出地区へ潜入した訳じゃないでしょ。あの地区の革新党左派と連絡を取って革命に立上らせるか、少くとも新町地区のクーデターに好意的中立を保つ様、働きかけるのが、君の仕事だった筈じゃないの」

央子にガミガミ噛みつかれて、啓子は涼しい目をパチクリさせた。央子の愛子に対する憎しみをよく知っていたので、賞めて貰えると思って勇んで戻って来たのだが……。

「それなら御安心下さい。任務は、ちゃんと果して来ました。日の出地区の革新派諸団体は、区境まで革命軍が押寄せて来たらず一斉に立上ると言って、此の通り誓約書まで渡して呉れました。その

上、あすこでは警察部内、殊に婦人警官の間に比較的、革新組織が進んでいるのです。その責任者とも逢って一斉蜂起の際の手筈を打合せて来ました」

啓子は内ポケットから何枚かの書類を取出して央子に説明した。聞いているうちに央子は機嫌を直した様だった。やっとニコリ笑って言った。

「愛子の母親と妹はどこに居るの。つい先刻まで愛子の奴も捕まえてあったのだけど、中島茂子の奴が前線から急に戻って来て罪人を無理に釈放してしまったので、今は行方知れずさ。でも又すぐ捕まえて、今度こそ母娘並べて徹底的な拷問を加えて、誰が啓子さんのママ達を刑場に送った犯人か明かにした上で、三人ともそれに相應しい公開刑に処してやるわよ。」

「裏庭の方に箱詰にして、二人とも転がしてありますわ」
「そう。それじゃ行ってみましょうか」

川島親子は見るも哀れな姿で転がされていた。宮子は小さな箱の中に膝を曲げて座り、肉付のいい背中を丸めて膝の間に首を突込み、両腕で膝を抱えていた。珠子も全く同じ姿だが、箱ごと仰向けに引繰返されている。小林幹子の家は機械の製作所なので、製品を梱包して鉄道便で送る為に、そんな箱は庭の隅にうす高く積んであった。箱と言っても幅三、四寸の板を、三、四寸置きに打付けたもので箱というよりは木の檻に近い。しかし肉付きこそ良いが、かなり小柄な母娘が、窮屈に身体を三重に折曲げられても、脚や背や臀の一部が木片と木片の間からはみ出す程小さいのだから、やはり檻と呼ぶよりは箱と呼んだ方がピッタリする様だ。箱詰めのまま仰向けにされた珠子は、開いた膝頭の間に自分の首を挟んで、可愛い丸顔を苦

しげに歪めて喘いでいた。紅潮した頬がいやにおっくりとふくらんでいた。小さくて丸まっちい両足の先が、一枚の檻板を挟んで箱外に出ていたが、その指先を横に開かせて、何とトランジスターラジオが一つ挟ませてあった。落さない様に命令されていると見えて、トランジスターを支えた可愛い指先には不自然な程力がこもり、苦しい姿勢のまま支える辛さに、足の裏全体がぶるぶると小刻みに震えていた。

「此の子、日の出町駅前で物凄いいお仕置に遇ってたんです。その故か年端も行かない割に、拷問に耐える力が強くて、こうして虐めてみると、とても可愛いですよ」

啓子は檻の中に指先を入れ、少女の可愛らしい顎を掴んでしゃくり上げた。ムッチリ丸い膝小僧の間で、仰向けの顔が斜めにのけぞり上げられた。小さな顎と合弁花の様な唇が板の間の隙間から外へ突出してしまった。瑞々しく朱い唇の間から針金が一本出ていた。

針金の根本の方は少女の唾液に濡れて光っていた。

「一体、何を食べさせたの」

三田央子が漸く湧上って来た好奇心に目を光らせながら覗き込むと、待っていた様に、啓子がその針金を引張った。

「アッ。痛ウッ。痛ウッ。ウ、ウ、ウ」

珠子は痛そうに呻いて可愛い口を半開きにした。啓子は左手で針金を上下左右に引張りながら、半開きの珠子の口中にピンセットを入れて口に含ませていた小さな赤い玉を一つ、二つと取出して、隣の箱の隙間にムッチリと盛上っている宮子の透き通る様に青い肌をした背中と並べた。

「なあにこれ。梅干じゃないの」

央子が呆れて問うても、啓子は熱心に円らな目を輝やかせて珠子のしどけなくあけた口中を覗き込み、返事もしない。

梅干の填口具がすっかり抜取られると、珠子は足先で支えていたトランジスターをやっと取られた。然しすぐその代りに、今度は両足の拇指と拇指の間に自分の唾液の垂れる、無用になったピンセットを挟み渡された。

「落すとその分だけ折檻よ。どんなことがあっても落しちゃ駄目。いいわね」

啓子は嫌にくどく念を押して珠子の認諾を求めた。仰向けに引繰返された海老姿の少女は、足指をぐっと反り返らせ、新鮮に光る大きな目に涙の露を宿らせたまま、こっくりと可憐に肯いた。途端に涙がこぼれ落ちた。

啓子はトランジスターのケースをあけて、中から香水瓶の様に美しい小さなバッテリーを取出した。その極を珠子の口許に近付け、左手で力一杯、針金を引張った。愛くるしいおちよぼ口が一瞬、大きく割れた。口中一杯に溜っていた紅の唾液をよだらせながら、少女の可愛い舌が飛出す。

啓子は鈴を張った様な目に楽しそうな色を浮べた。可憐な舌端にバッテリーを押当てた。

「ヒイイイッ。ヒイイイッ」

ムッチリ肥えた豊満な白海老は、魂消る様な鋭い悲鳴を二声、挙げた。後はウ、ウ、ウームという呻き声になり、可愛かった口許が、ヒクヒクヒクヒクと、けいれんしながら、ぶざまに歪んだ。のけぞり出た足先が烈しく震えて、指間のピンセットをバタリと落す。「やっぱり落したわね。もう一回よ」

ピンセットを挟ませて、針金を額の方へぐっと引張ると、口から出ている珠子の舌が斜上方に引張られて、薄い粘膜の舌の裏を見せた。今度はその中でも特に粘膜の薄そうな部分を選んで又バッテリーの極が押付けられた。

「ヒイイイッ」

少女は痛々しい声を出しながら暫く耐えていた。啓子はバッテリーを一層強く押付けた。薄桃色の柔かな粘膜の中に金色の極金具がすっかり埋ってしまった。

目を閉じ、口を大きくあけ、顎を突出してのけぞった、珠子の切なげな責めに耐える顔。三つ折りの白い体が苦しそうにくねる。膝頭と足先の震え。豊かな胸が大きく波打つ。

そしてバタリ。又ピンセットは落ちた。

啓子はニヤリと笑った。鼻を掴み上げて、

「又、落した。悪い子ね、君は」

央子がピンセットを拾って又、挟ませた。

「そんな小っちゃなバッテリーでも、随分、酷い苦しみを味わわせられるものね」

「梅干を先に充分、含ませといたでしょう。口の中に一杯、唾が溜っているので感電する力がとても強くなっているんです。トランジスターのバッテリーだって結構バカに出来ない責道具ですわ」

又、針金が引張られた。バッテリーが近附く。

この拷問は母親のすぐ目の前で、珠子が全身蒼白になって気絶するまで繰返された。針金をつけられた小さな舌は、自由自在に面白い程、啓子の指先の操るままに、右に左に上に下にと引張られ、舌の根本まで唇の外に引出された。その根本の中央部には小孔がうが

たれてあって、そこに針金を通した上で舌の附根をきつくくびってある。根本をくびられてスピード型になった桃色の舌は、裏表至る所に電気を当てられて、まるで下等動物の様に烈しく震えながら蠕動し、時々ピクピクと、けいれんした。蠢き廻る舌に押出されて、紅い唾液があちこちから口の外へ流れ出し、鼻も頬も顎も咽喉も赤く汚れきってしまった。遂に珠子は、土色に変色した顔をがっくりのけぞらせ、幾ら新しいバッテリーを当てられても、ピクリとも動かなくなってしまった。大きく開き放しの口から、根元を針金で括り上げられたスピード型の可愛い舌をベロリと出したままで。

珠子が蘇生した時、彼女は板の檻から出されて、角材の梯子の上に寝かされていた。梯子はその上に縛られている罪人の、頭を下に足を上にして、斜めに土塀に立掛けてあった。腕は上腹部にコの字型に組まれ、肱と肱を背合わせにして、その両端と中央を、キツチリと麻縄で括り上げられていた。

梯子に寝たままであたりを見廻すと、珠子の両側に裸の女ばかりが二人ずつ、全く珠子と同様の姿にされて梯子に縛りつけられていた。すぐ左の裸女は奴隷市場で別れて以来の姉だった。そして右側に大きな美しい獣の様に、足も首もピンと伸されて縛られている真白な肌の少女は、久しく遇わぬ間にすっかり肉附を増して大人っぽい身体になった、従姉の芳江だった。その向う側の罪人の顔は知らなかったが、それがこの家の本来の持主の娘、小林幹子だったのである。最後の一人は言うまでもなく母親だった。

母親は城北署での裏切りの一部始終の自白を強要されて拷問に掛けられている最中だった。口に大きな漏斗をくわえさせられ、漏斗以外の部分は、幅広の革の布帯で口を幾重にも覆われて猿轡されていた。

た。その上、二つの鼻腔にもしっかりとビニールの栓を詰められている。漏斗の細い管を通してしか呼吸が出来ない様にされている訳だ。そこへ、とくとくと水を注がれて、梯子上に斜め逆さに仰臥した夫人の胸は苦しげに大きく波打っていた。

夫人の拷問の進行中、珠子を寝かせた梯子だけは庭の前方に運び出された。

「此の子は母親の責道具に使うから、その辺の地べたへ寝かせて用意をしないさい」

水平に寝た珠子の腹のすぐ脇に大きな焔炉がおかれ、上にコークスが並べられた。焔炉の下には、上向きに取付けられた吹管と酸素ボンベが並んでいた。

漏斗になみなみと溢れんばかりに注がれた焔一杯の水を、やっと飲み干すと、猿轡が外されて、婦人は娘の様に可愛い口を無理にあらわれ、口中一杯に練製のクレンザーを押込まれた。

夫人の頭の下には薄くて広い秤皿が置かれ、皿はフレキシブル・スプリングで支えられ、スプリングの台座は複雑で精巧な装置によって水圧管に連結し、その先は酸素ボンベと吹管を遮断するバルブに繋がっていた。

珠子には、そのメカニカルな責道具の個々の機構の意味するものは解らなかったが、それらの一切の物が、何を意図してそこに置かれ、何を待受けているかは過去の経験から付度出来た。梯子に縛りつけられたまま、過去に幾度か経験した拷問の前と同じ症状を呈して、同じ恐怖の予感におののき始めた。

白い滑らかな肌に鳥肌が立ち、心臓は早鐘の様に鼓動し、縛られていても手足が震えた。口の中はからからに乾いて、観念してじっ

としている積りでも咽喉は自然に喘いでいた。

啓子が宮子夫人の傍に寄って、斜めに立て掛けられた梯子に、手摺の様によりかかって、逆向きに仰臥した夫人の顔を覗き込んだ。

小さな鼻を掴み上げた。

鼻腔にビニールの栓を詰められ、口中一杯、はみ出る程、練クレンザーを含まされて、夫人は息苦しさに顔を真赤にして目に涙を浮べ、憐れみを乞う眼差しで啓子の勝ち誇った顔を見上げた。

啓子は気持良さそうに指を丸めて、夫人のはち切れそうにふくらんだ青白い頬を、パチン、パチンと弾いていたが、苦しさに耐えかねて、罪人が口中のクレンザーを吐き出しそうな気配を見て取ると、手早く鼻孔に詰めてある栓を引抜いた。

夫人は鼻腔を一杯押広げて、早く楽になろうと深呼吸した。

「お前は裏切者として本来なら油虫をお皿に一杯食べなければならぬのだが、今は寒くて油虫が居ないから、代りに、今口の中に入れているクレンザーをすっかり食べなければなりません。食べるに当って二つだけ注意をしておきます。第一に、クレンザーをほんの少しでも口の外へ出したら、フレキシブル・スプリングと水圧管の作用で、その重さに応じただけ酸素が吹管から働いて、コークスの火を熾して珠子の顔をあぶることになって居ります。クレンザーの重さ、水圧の強さ、酸素の量、コークスの火力等は、充分計算してありますから、若しお前が一口もクレンザーを食べず、すっかり口の外に吐出したとしたら、火力は猛烈に強くなって娘の首から先は漢方薬の様に黒焦げになってしまいますよ。これが、第一の注意。第二に、クレンザーをすっかり食べても、余り時間が長く掛ると娘の命は保証出来ません。遅くとも五分位の内に食べた方がいい

でしょう。その理由は……。もう解りましたね」

啓子は、そう言って夫人の鼻を掴りながら、梯子の上の顔を心持のけぞらせた。顎を出してのけぞった夫人の目に、焔炉のすぐ前に逆さに立てられた、珠子を縛りつけた梯子が映った。髪を束ね縛られて、その縄をピンと伸して梯子の横木に結ばれ、まだ舌をスペードに縛ったままの針金の先には、一盃位の分銅を附けられて珠子の無残にひきつった肢体と殆ど直角の角度を作って、水平に真下を向いて保たれていた。その顔の下一尺足らずの所でコークスは既に赤々と熾っていた。のけぞった顎が苦痛に震え、分銅の重味で附根まで露出した針金附きの舌が顔中で一番火面に近附いていた。呻く度にその舌がヒクツ、ヒクツ、と痛々しくひきつれた。その動きにつれて分銅もかすかに上下し、舌の動きが停ると左右に静かに揺れた。前手コの字縛りの両腕が胸の中央まで斜め前に下り、恐怖の爲か苦痛に耐える為か、縛られたままで、両掌がしっかと反対脇の関節を掴み、鋭角に曲った白魚の指が突刺さる様に腕肉の中に喰い入っていた。

「さ、クレンザーをお食べなさい。奥様」

啓子は冷やかす様にいつて宮子夫人の鼻をもう一度、力一杯掴って引張った。それを合図に逆様に立たされた珠子の白いムッチリした外腿に、革鞭がピシリピシリと強い力で当てられた。拷問開始の肉体のサイレンである。

夫人は、可愛い娘を顔面焙りの苦痛から救ってやりたい一心で、慌ててクレンザーを飲込んだ。余り慌てたので咽喉が詰って暫く目を黒白させた。それでも食道を嚥下されて行ったクレンザーは、口の一番奥に詰っていた、ほんの一塊に過ぎず、唇も結び合えぬ程含ま

されていたクレンザーの大部分は微動もしなかった。息が詰って暫し悶えていた罪人は、苦悶が静まってそれに気附くと、焦って、一杯にふくらんだ口をもぐもぐさせた。すると今にも溢れ出しそうだった口の合わせ目近くのクレンザーは、ぼろぼろと口からこぼれ落ちて梯子の下の方の秤の皿の上に溜った。秤の針の動きにつれて、圧力



計の針も活発に左右に振れた。バルブが開いて吹管が烈しく酸素を噴上げた。シューッというその音は、四十種と離れていない真上に顔を垂らされている珠子の耳に、地獄の火の山の噴火する音の様に怖しく響いた。灼熱したコークスの間を潜り抜けて来る熱気が、まともに珠子の顔を焙った。舌の先が乾いてヒリヒリ痛む。珠子は火面に水平に固定された可愛い顔を、辛うじて左右に僅かにのけぞらせて、熱風と副射熱に顔の肌も焦げそうな苦痛を少しでも柔げようとした。前髪がじりじりと焦げて、灰色の短い捲毛に変わってゆく。眉も焼け落ちた。目の前で睫毛が燃えた。涙も溢れ出る傍から蒸発してゆく。その必死の形相の凄絶さが、ポンベの下に敷かれた鏡に明々と映し出され、反射鏡を幾つも使って、クレンザーを夢中で食べている母親はもとより、梯子に括られたまま逆さ斜めに寝かされている他の裸女の一人々々にも、居ながら、手に取る様な近さで見える様装置されているのだ。

夫人の目の前の、自動車のバックミラーの様に突出した鏡の中で、珠子は火焙りで死んで行く直前の刑死人の様な凄愴な顔を見せていた。夫人は一層焦りながらクレンザーを嚥下した。しかし、ざらざらした磨き砂を多く含むクレンザーは、相当咀嚼して唾液を混ぜ合わせないと、とても流暢に咽喉を通じてゆく代物ではない。といって咀嚼すればする程粉末石鹼が溶けて白く泡立ち、その粘っこい舌触りと悪臭が鼻をつき、呑み込むどころか既に胃の腑へ納めたものまで吐いてしまいうような衝動が込み上げて来る。咽喉をぐっと閉塞し、歯を喰いしばってやっとその衝動を抑えると、歯の外に溢れたクレンザーが又、ポロポロと頬を伝ってこ

ぼれてゆく。シューツと吹管の吹鳴音が一層高まり、熱気が少女の頬を烈しく伝った。逆吊りと顔焙りの拷問が重なった為、珠子の白かった頬はただれた様に真赤だ。コークスは白い焰さえ上げて燃えていた。発生したガスに目を犯され、真赤に腫れ上った目から清冽な涙が泉の様に溢れて蒸発しきれずにコークスの上に滴り落ちた。鼻腔の粘膜も咽喉の奥もヒリヒリ痛む。乾燥しきった舌がのけぞり悶えるにつれて、舌根から、吊下った分銅がぶらぶらと不規則に揺れていた。苦しげにのたうち廻る。腹や胸や脚の白い波だち。呻きと号泣。その声もガスにやられて次第にかすれて行く。

夫人はやっとクレンザーをすっかり飲込んだ。氣持悪さに顔をしかめながら啓子に許しを乞うた。

珠子は梯子に縛られたまま身を起された。悶えの烈しさに、さしも固く縛られていた縄目が緩んでいた。逆態から正態に体位を戻されると縄目がずれて、少女の豊かな身体に新しい喰込みを作った。今までの縄目の跡がその少し下に痛々しく赤い筋目をつけていた。秤皿のクレンザーが除かれ、メーターの針は零に復した。バルブは閉じて火力は弱くなった。真赤に火照った顔を正面向きのままぐったりさせて、珠子は拷問が続いている様に喘いでいた。半開きの口からだらしなく涎を乳房まで垂らし、半開きの目は上気しきっていた。熱れきったトマトの様な豊頬を涙の筋が光って下りている。此のトマトは茹で立ての様に熱いので、涙は顎まで届かぬ内に蒸発し、光の筋は砂漠の中の川の様に途中で消えている。髪を束ねた荒縄は依然ピンと張っていたが、やはり多少の緩みがあるので、珠子の顔は責苦の表情をはっきり正面に見せたまま、ほんの少し斜に傾いていた。それが一層少女の責顔の痛々しさを強調する事になって

いる。足首を梯子に括りつけられたまま、小さな足先が斜に内を向いて力なく垂れていた。

「奥様、大分氣持悪そうね。もう一杯お水を飲んで口の中をすっきりゆすがれたらいいか」

啓子は、からかいながら夫人の鼻を又撮んだ。軽く唇が開くと、その隙間に強引に漏斗をこじ入れてくわえさせた。樹一杯の水が注がれた。苦しうにやっとの思いでそれを飲終ると、先刻こばれたクレンザーが又押込まれる。

「食べかけた御飲は、すっかりお上りなさいな」

これが最後だと思つて、夫人は目をつぶって、ヌルヌルし、しかもザリザリしているクレンザーを、氣持悪そうにニチャニチャと咀嚼し、身を震わせながらやっとの思いで飲込んだ。余りの氣持悪さに総身が鳥肌立っていた。

「どう、美味しかったでしょ。お代りが食べたくはないかしら。え？」

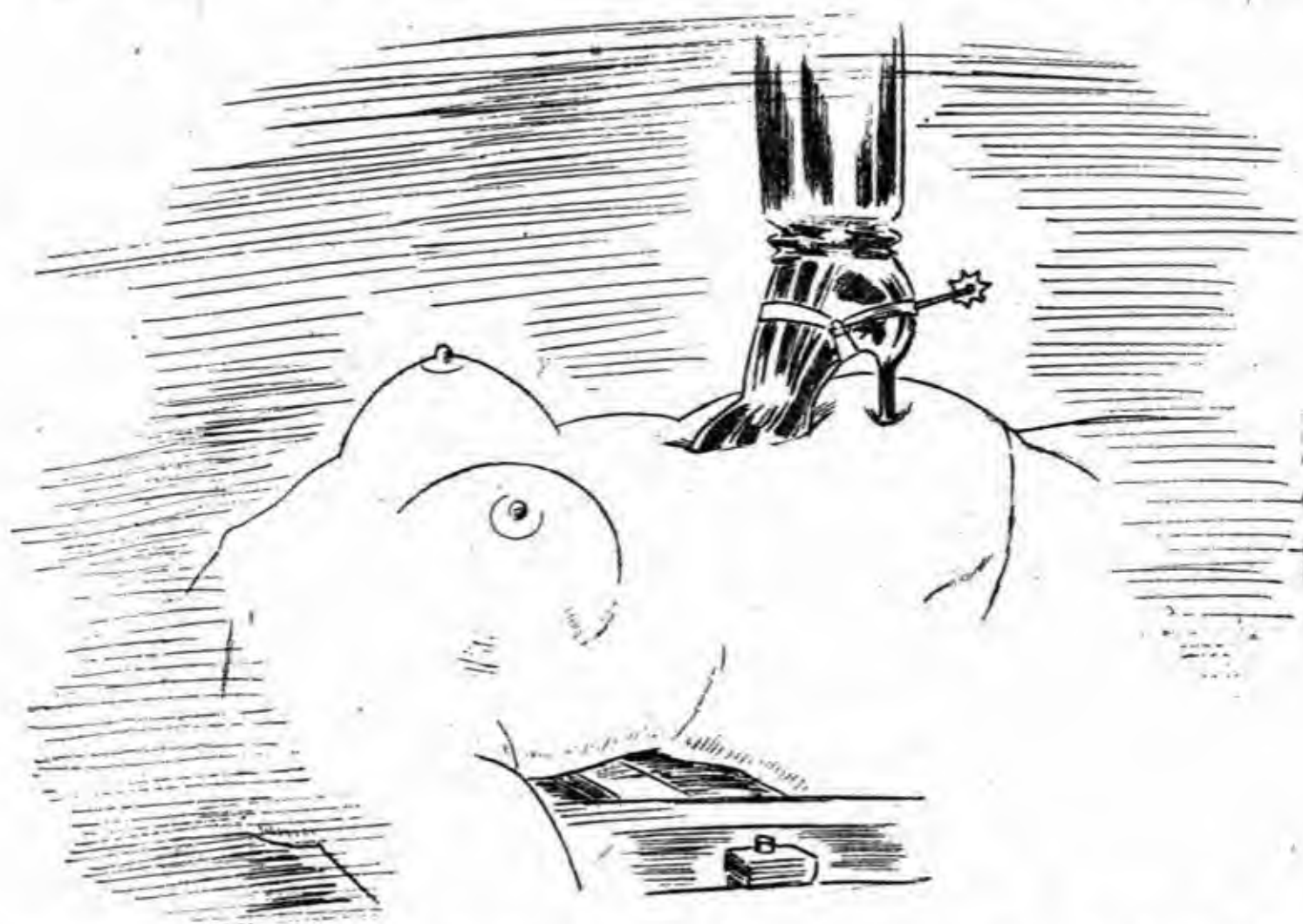
啓子は笑いながら、又夫人の鼻を撮み上げてその顔を覗き込んだ。小鼻に爪を立てて思いきりギュウツと撮んだので夫人は顔をのけぞらせ、口をあけて痛そうに咽喉を鳴らした。クレンザーで灰色に汚れ、小さな泡のビッシリ附いた舌が口の中で痛そうに蠢いていた。「もうお許し下さい。氣持悪くて、これ以上は一かけらも食べられませんわ」

「食べたくなかったら、城北署での裏切の模様を、詳しく正直に白状するんです」

夫人は辛そうに顔を歪めた。彼女は今でも自分一人、命が助かった事を負担に思っていた。あの直後、舌を抜かれて長い間、監禁さ

れていなかったら、きっと何等かの方法で自殺していたに違いない。その後、此の国の進んだ医術によって再び舌を移植され、元と全く同じ状態にされたが、その時は既に気持もかなり静まって、どんなに誤解されても迫害されても、いつかはきっと自由の身に立戻って今度こそ女権拡張運動に命を投出して献身しようと思っていた。それで彼女は自殺だけはしない積りでいた。

しかし、やっぱり死ななければならぬかもしれない、と彼女は思った。啓子の言う「裏切」は、彼女が桜川玄太に酷問されて気を失っている間に、娘の愛子によって行われたもので、彼女は何も知らなかった。しかし母親として、そんな事を言うわけには行かない。「私達は裸にされて、親子四人、種々な姿で吊されました。とても辛うございましたし、何より可愛い娘達が苦しむ様を見ていられなかったものですから……」



宮子がそう言って殊勝らしく目を閉じた時、

「嘘だわ、嘘です。啓子さん、母はそんな女じゃありません。どうか母を許して下さい」

逆さ斜めに梯子に仰臥したまま愛子が叫んだ。

「お黙り。まだお前の訊問される番ではないのよ。自分の番が来た時に、訊かれた事だけに返事すればいいの」

ピシーリ、ピシーリと愛子の太腿に鞭が鳴った。苦痛に歪む口許へ荒々しく練クレンザーが押込まれ、革布の帯で猿轡が嚙まされた。縛られて抵抗出来ない愛子は、その口惜しさを両足を力一杯伸ばして耐えた。生々しく桃色の鞭痕のついた太腿が、くっきりと逞ましい筋肉を漲らせた。その上に又、鞭が飛ぶ。

暫く気持良さそうに、折檻される無言の愛子を見返していた啓子の視線が、宮子の豊かに隆起した胸の上に戻った。

「その時の模様をもっと詳しく言って御覧」

別冊奇譚クラブ

目下発売中

定価三〇〇円
(特価一五〇円)

創刊号

「告白・手記・体験」特集

四馬 孝画

リクエスト画廊 16 葉

グラビヤ希望写真集

五十一葉

本文

告白手記体験集

28項目

第二集

「松井籟子作品集」特集

口絵 滝れい子画

「狐 灯」 画集

北原純子画

「淫 火」 画集

グラビヤ

須川令子被縛独演集

宮子は黙って目を閉じた。元来が出鱈目なのだから、具体性のある詳細な供述など出来る筈がないのだ。

啓子は又、樹一杯の水を手にして宮子の唇に近附けた。鼻を撮み上げて、思わず薄くあいた口許へ、ザブリ、ザブリとその水を掛けでは責め立てる。

「さあ、お言い。何を愚図々々してるの」

水に責められて宮子は、悲鳴を上げたり、呻いたりしながら、全くの空想で桜川玄太との一問一答をねつ造して行つた。しかし空想の悲しさで、供述が矛盾してしまつたり、口ごもつたり、長い間、沈黙して筋を考えたりしなければならなかつた。その度に宮子の口はこじあけられ樹の水を注ぎ込まれた。既に二樹の冷水と口一杯のクレンザーの詰っていた胃袋は、新たな水責めではち切れんばかりにふくらみ、外見にしても青白い上腹部がこんもり盛上つて下腹より

隆起して見えた。加えて寒空の下で長時間、戸外に寝かされているので、腹が冷えきつてシクシク痛かつた。それでも彼女は、自分だけ助かった罪の償いだと思つて、素直に咽喉をコクコクと可愛く鳴らして、注がれるだけの水は飲んだ。水は腹一杯に満ち、食道まで溢れてしまつた。ともすると食道の締りがなくなつて咽喉から鼻、口へ、クレンザーの臭い水が逆流して来る程だつた。

その苦しさに口も利けなくなつて、咽喉に込み上げて来る水を、ウツ、ウツ、と呻いて抑えつけていると、啓子がいきなり革長靴をはいた足で、ふくらみきつた胃袋の上を力一杯踏みつけた。息は詰り、目の前が真黒になつた。背骨が梯子の横木に食い込んで押される様に痛み、力まかせに踏みにじる啓子の足の動きにつれて、裸女を寝かせたまま撓んだ梯子はギシギシと鳴つた。

「ウツ、ギヤアツ、ギヤワーツ」

奇妙な泣声がフツと途切れると、罪人は腹中の水を鼻と口から溢れ流していた。それはどつと噴出した様な烈しさだつた。苦しさは無理矢理、水を飲まされる辛さなど足許にも及ばぬ程だ。そして何とこの惨めさ、情なさ。

啓子が身体から降りると、腹のふくらみは元に戻っていたが、革靴の足跡がくっきり窪んで青白い腹に残っていた。水とクレンザーと胃液の混合物に汚れきつた顔を拭かれもせず、すぐ又、口を割られて水を流し込まれた。水がなくなるとクレンザーを食べさせられ、それがなくなると又、水、又、クレンザー。

その間にも供述は強要された。やっと終つた時、罪人は虫の息で、どろどろのクレンザー溶液で、その腸も胃も食道も気管も口も鼻も汚泥漬けになっていた。顔や鼻、口はホースで清水を灌がれて綺麗

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切V
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切V
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切V
復刊第4号	(昭和31年5月号)	△売切V
復刊第5号	(昭和31年6月号)	△売切V
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切V
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切V
復刊第8号	(昭和31年9月号)	△売切V
復刊第9号	(昭和31年10月号)	△売切V
復刊第10号	(昭和31年12月号)	△売切V
復刊第11号	(昭和32年1月号)	△売切V
復刊第12号	(昭和32年2月号)	△売切V
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切V
復刊第14号	(昭和32年4月号)	△売切V
復刊第15号	(昭和32年6月号)	定価二百円
復刊第16号	(昭和32年7月号)	定価二百円
復刊第17号	(昭和32年8月号)	定価二百円
復刊第18号	(昭和32年9月号)	定価二百円
復刊第19号	(昭和32年10月号)	△売切V
復刊第20号	(昭和32年11月号)	△売切V
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円

復刊第22号	(昭和33年1月号)	△売切V
復刊第23号	(臨時増刊号)	△売切V
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第30号	(サド特集号)	△売切V
復刊第31号	(昭和33年8月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦虚小説と緊縛写真)	定価二百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第40号	(昭和34年3月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(サド特集第一集)	三百五十円
復刊第43号	(昭和34年5月号)	△売切V
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦特第二集)	定価二百円

復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第51号	(サド特集第三集)	三百五十円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第54号	(悦特第三集)	定価三百円
復刊第55号	(昭和35年2月号)	定価二百円
復刊第56号	(昭和35年3月号)	定価二百円
復刊第57号	(サド特集第四集)	三百五十円
復刊第58号	(昭和35年4月号)	定価二百円
復刊第59号	(悦特後四集)	定価三百円
復刊第60号	(昭和35年5月号)	定価二百円
復刊第61号	(昭和35年6月号)	定価二百円
復刊第62号	(悦特第五集)	定価三百円
復刊第63号	(昭和35年7月号)	定価三百円
復刊第64号	(昭和35年8月号)	定価三百円
復刊第65号	(昭和35年9月号)	定価三百円

特に定価の半額に奉仕いたします。

に洗われた。しかし、お腹の中は一体どんなことになるのだろう。誰もがそんな好奇心で宮子夫人の、今にも子供を産む孕み腹の様に大きく膨脹した青白い腹を見守っていた。夫人は只ウンウン唸っているばかりだった。

「さあ今度はお腹の中も綺麗にしてやるわよ」

啓子が太い浣腸器で罪人の剥き出しのお腹を突つついた。縄を解

かれた夫人は、手取り足取り梯子の上につつ伏せにされた。手足は真直下に伸され、ピインと綱を張って地面に打った杭に括られた。青白い小肥りのヒップを上首を下にした宙浮き四つん這いの姿勢で浣腸を受ける様を、弱い真冬の陽射しが寒々と照らしていた。太い硝子管に一杯に詰っていた濁った液体がシューツという小気味良い音と一緒に、嘴角から進り出ていった。(未完)